
とある騎士の聖杯戦争（ヘブンズフィール）

ヌエマル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある騎士の聖杯戦争^{ヘブンスファイル}

【Nコード】

N13350

【作者名】

ヌエマル

【あらすじ】

魔術の世界に伝わる……………聖杯戦争の伝説……

たった一つの聖杯を巡り、今此处に『普遍化された聖杯戦争』の開幕を告げよう——！

科学と魔術が交差する時、聖杯は目覚める——

『ならば僕は、その現実を斬り裂いてみせる——！』

マトリクス（前書き）

随時更新予定のサーバントの紹介です。

ネタバレが嫌な人はスルーして下さい（宝具に関しては自重しています）

マトリクス

【CLASS】セイバー

【真名】????

【性別】男性

【属性】秩序・善

【ステータス】筋力…B 耐久…B 敏捷…C 魔力…B 幸運…

E 宝具…??

【クラス別能力】

・対魔力…B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

・騎乗…B

騎乗の才能。

大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、幻想種は該当しない。

【保有スキル】

・直感…A

戦闘時に常に自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。

研ぎ澄まされた第六感はや未来予知に近い。視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。

・信仰の加護…A

一つの宗教観に殉じた者のみが持つスキル。

加護とはいうが、最高存在からの恩恵はない。

あるのは信心から生まれる、自己の精神・肉体の絶対性のみである。

・無窮の武練…A++

一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。
心技体の完全な合一により、如何なる戦況下であっても十全の戦闘能力を発揮できる。

【宝具】

『???』

・ランク…??

・種別…??

・レンジ…??

・最大補足…??人

当麻の『イマジンプレイカー幻想殺し』を弾いたとされる宝具。

あらゆる『イマジンプレイカー異能の力』を打ち消す『イマジンプレイカー幻想殺し』を弾く程の能力の為、何らかの無効化能力と思われるが……？

『??? (双剣)』

・ランク…??

・種別…??

・レンジ…??

・最大補足…??人

セイバーが腰に佩く二剣一対の片手剣。

『イノケンティウス魔女狩りの王』を消滅させる事から、魔術の初期化能力があると思われるが……？

【備考】

上条当麻が訳も分からないまま契約したサーヴァント。

普段は周りを凍り付かせる様な発言の多い天然ボケだが、戦闘になると雰囲気が一変し、強力な戦闘能力を発揮する。

本来、ステータスは全最高値の強力なサーヴァントらしいのだが、アベレージ・A魔力供給が無い為、その何れもがランクダウンしている。幸運だけ

ダウンし過ぎなのはマスターのせい……？

特別珍しいスキルは保有していないが、それぞれが調和し合う事で、スキルの弱点を補完し合う事が出来る。『信仰の加護』が無効化される『神性』を持つ相手には『無窮の武練』が、『無窮の武練』が及び難い遠くの敵、見えない敵には『直感』が、『直感』を鈍らせる精神干渉を行う相手には『信仰の加護』がそれぞれ三竦みの関係で弱点を補う。

性格はとても素直で、マスターの命令には基本的に従順。また、マスターとの相互理解を第一とするのは、何か理由がある模様……。『信仰の加護』を持ちながら異教徒を排斥する様な素振りが全く無いという器の大きな一面も持つ。

序章（前書き）

こんにちは

とってもとっても生意気なヌエマルです

二股連載始めましたw

何処かで書いた通り、この小説の主人公は上条サンとオリジナルサーヴァントです！

……でも今回の主人公影薄ッ！サーヴァントに至っては登場もしてないじゃん！

近い内登場予定のオリジナルサーヴァント（ウチの子）が皆々様の御眼鏡に叶う事を祈っています！

序章

太陽系 第三惑星

地球

その衛星軌道上に浮かぶ科学の筐体 『人工衛星 おりひめI号』

地上を観測し続けるそれをある者はこう呼ぶ
『ツリーダイ樹形図の
アグラム設計者』と

そしてそれは今日も観測する

大気中の分子の1つ1つを

1ヶ月先までの天気を

「オラ待ちやがれコンガキャ~~~~!!!!!!」

「しばらくぞゴルア~~~~!!!!!!」

「不幸だ~~~~~~~~!!!!!!!!!!!!」

かの少年が駆け抜ける、不幸の女神に愛された青春の日々を

そして

『聖杯戦争開始マデ、アト、……………』

この『学園都市』に起こり得る、未来永劫を――

同刻――

『学園都市』第7学区 学生寮近辺――

白いビルの屋上で、その少女は逃げていた――

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

身長が150cmにも満たぬ彼女が着るは、汚れ一つ無い清純な純白の修道服――、その随所に鏤められた、その服に派手さでは無く、美しさを与える金の刺繍や装飾――、時折服の隙間から覗く彼女自身の銀色の髪が神々しさを際立たせる――

それはまるで『教会』そのもの――

その小柄な教会は息を切らし、今にも倒れそうになりながらも必

死に走っていた――

時折後ろを気にする様に振り向いて、確認するや否や前を向き、
また少ししたらその繰り返し――

その少女は、『何か』から逃げていた――

「ハア……、ハア……、ひ、一先ずは……安全かな………?」

後ろを確認し、人影の有無を確認した白の少女は走力の慣性に戸惑いながら足を止める。

永遠に続くと思われた少女の逃避行は一時の休息を得て、息を整える機会を得たのは少女にとって僥倖だった。

「ハア………、ハア………、……きよ、教会まで……、あとどの位……なのかな……?」

少女はその碧の双眸で、見えもしない目当ての教会を探して夜景の摩天楼を見渡す―― 勿論の事、それを見つける事等叶わない……。

絶望的だ――

少女はそう思った―― だが、その眼からはまだ意志は潰えていなかった――

「こうなったらサーヴァントを召喚して……………でも私、魔術使えないし…………」

ブツブツ呟くにつれて、その碧眼が不安で曇り出す少女だが、ブンブンと頭を振ってこれを振り払う。

「ううん！ サーヴァント召喚に必要なのは、飽く迄も魔術の使える使えないじゃなくて、サーヴァントを世界に繋ぎ止める魔力！ それだったら魔術の使えない私にも……………アレ？ 私、魔力も大丈夫かな？」

健気に気張っては見たものの、やはり不安は晴れない様子……………。

「ええいもう！ ここまで来たら破れかぶれなんだよ！ とにかく陣を描いて……………！」

若干ヤケを起こしつつも、少女は懷から白いチョークを取り出し、地面（屋上）に『何か』描き始める……………

「何かの文献で読んだ事あるもん！ サーヴァントって、人間が人間で有る限り、『魔術師』や『聖人』よりもずっとずっと強いって！」

藁にも縋る思いで、夜の帳が降りる暗がりの中、少女は『それ』を描き続ける――

「……………でも、『聖杯』に導かれるって記憶してるけど、その辺りが良く分かんないんだよね」

『聖杯』なんて残ってる訳無いのに……、そう疑問を吐き出しながらも少女はその手を止めない。

「それとも最近言われてる事、本当なのかな？ 聖杯は偏在してるって……？」

だが、そんな根も葉もあるか分からない噂を気にする様な余裕等、今の少女は持ち合わせていない――
そして少女はそれを描き終えた。

「よし！ 後は適当な呪文と何らかの媒介を――！」

だが、時間は残酷だった――。

ツキキューーン……………

「！！」

少女の足元が爆ぜた――！

少女は勢い良く振り向いた先に居たのは、月影に照らされた、2
人組の『敵』――！

「っ!!」

！
それを確認するや否や、足元の陣に目もくれず、少女は駆け出す

2人組の銃弾の火花が少女を追跡するが、それよりも早く少女が
屋上から――、

「たあっ!!!!」

――飛び出した――！

だが、『敵』は尚も少女に狙いを定める――！

その凶弾と、白の少女の背が交差する時――、

ピカッ

ゴロゴロゴロゴロ……………

物語は始まる
!

序章（後書き）

F a t eファンの方々に土下座！！申し訳ありませんm（「」）；

聖杯戦争のルールですが、『とある』の世界観に合わせて若干のアレンジがあります！

可能な限り原作らしさは残す予定ですが、何卒ご容赦下さい……

それとオリサーヴァントはステイル戦まで登場しません！……本当にスマセン……………

どうか長い目で見守っていて下さい……

邂逅（前書き）

こんにちは

マイペースなヌエマルです

久しぶりに一人称視点で書きました！やっぱ書き易いです！
とりあえずはキリの良い所まで描けたので投稿しました

邂逅

東京西部に位置し、

総面積は東京の3分の1

総人口約230万人（内8割が学生）の日本が誇れる巨大
技術先進都市

そんな『学園都市』に夏休みがやって来た

上条 side

「……………暑い…………」

現在、学生寮自室で横たわっております、私、『上条 当麻』は、
蒸し風呂地獄に晒されています……………。

「くっ……………あのビリビリめ…………」

今思い出すのも忌々しきは、昨夜のあの落雷ですよ。
不良達から逃げて、撒いたと思ったら今度はあのビリビリ…………

砲^{ガン} 確か…………学園最強の能力者『超能力者^{レベル5}』の1人…………『超電磁^{レベル}』の…………あ、名前忘れた。ま、いいか。

閑話休題

そのビリビリが起こした雷で学生寮は停電。そのせいで、俺の部

屋のエアコンは機能停止……………、日差しからガンガンエネルギーを吸い込んだ部屋の空気は熱気と化し、部屋の主たる私、上条当麻から汗を井戸水の如く汲み上げていった……。

「……スンスン、ウグッ……………!!!!」

イコール、それは冷蔵庫の中身の全滅を意味していた……。今嗅いでみた買い置きของヤキソバパンも青筋立てて投げ捨てる程のモノだった――

ベシヤ

「グバツ!!」

その後、文明の利器たるカップ麺を湯切りしてたら中身ごと台所の流しにぶちまけ……………、

バキツ

「ヌオツ!!」

更になけなしの金が入った財布を探していたら足元のキャッシュカードをストンピング……………。

極め付けは――、

『上条ちゃん、バカだから補習で……………すV』

と、担任の小萌先生からのラブコール連絡網……………

「……………不幸だ……………」

もうこの十年以上経つ人生の中で、数えるのも億劫になったテンプレの台詞が虚しく響く……………。

もうホント、不幸だ……………。

ピッ　ピッ　ピッ　ピッ　ピッ

そんな俺の所持品で唯一生き残ってた携帯電話！その生存を何気に歓喜した俺はモバイルを開いて、出掛ける前の景気付けに占いサイトにアクセスした……………お！しかもこのサイト、夏休み特別企画で夏休み中の総合運を占ってくれるそうだ！

占いなんか良い事信じて悪い事信じなかったモン勝ちだ！そんな軽い気持ちで俺は占いに必要な情報を入力する……………はてさて、結果は……………、

金運　　E　使っていないのに金が無い……………

恋愛運　E　月無き夜に気を付けて……………

仕事運　E　報われないのに次々と……………

勉強運　E　報われねえよコンチクショ……………

……………不幸だ……………てか何だこの横文……………

「ま、まあ占いなんて悪い事信じなかった方が勝ちだ勝ち！　なはははははは……………さ、さあて天気も良いし、布団でも干すかな……………」

」

乾いた笑いで無理矢理開き直った俺は携帯を閉じてベッドの上の布団を纏めて持ち上げる。

途中バランスを崩して、さっき投げ捨てたヤキソバパンを踏んじまっただが、ここは敢えてスルースルーW気色悪い程柔らかい感触もスルースルー……。

「やれやれ、この上条さんの不幸さ加減を誰か何とかしてくれませんかね……。流れ星さんか何かにでも願ってみますか？　なんてなWおっと、脳天直撃コースは勘弁ですよ？」

流石に不幸が重なるとこんな軽口も口ずさめる様になるという物だ……。どうよこの『慣れ』の力！慣れたくねえけど……。

そして片足で戸を開けてベランダに出ると――

「ん？あれ？もう布団干してたっけか？」

その欄干には既に白い毛布が――

「――って違う！」

訂正！白い女の子が干されている！?!?!?!?

ぐぎゅ……………

「?」

……なんて驚いていたら、何処からか、三大欲求を持つ人間にはとてもとても慣れ親しんだ気の抜けた音が……。

その音源を辿るのは別段難しくなかった……何故なら音源は目の前にあった、いや、居たのだから……。

「……………う……ん……」

その音が原因で目が覚めたのか、その小柄な体軀を綺麗な『つ』の字に曲げていたその布団少女は、顔を此方側はつきり確認できる様な角度に首を動かす……………。

日本人では在り得ない銀髪碧眼の目の前の少女は、まだあどけなさの残る声で――、

「……………おなか……へった……」

「……は?」

「……………おなかへった……」

「……………」

「……………おなかへったって言ってるんだよ……」

布団少女はしっかりとコッチを見て物を申した……って俺に向けて言ってたのかよ……；

「おなかいっぱい食べさせてくれると嬉しいな♪」

屈託の無い笑顔で食い物を請う少女はこの状態で『行き倒れ』と言いやがるつもりでしょうか……。

「または『倒れ死に』とも言う……」

そんな事はどうでも良い私、上条当麻はこの時、昨夜からの色々な不幸の積み重なりでもう既に色々な許容量^{キャパシティ}を超えていたのである――

「この子には何処か遠い所で幸せになって貰おう」と思って……言い換えれば「この子には早々にここから立ち去って貰おう」とちよっとした悪心抱いた自分は、何でも良いから（全滅した）食料を目の前の少女に差し出す事にした――。

そして、最初に頭に思い浮かんだモノが、先程踏み付けて最早『三次元』から『二次元』の物体になりつつあったヤキソバパン――

「……………こんなモンで良かったら……」

利き手の右手で床のそれを拾い上げ、少女の口元へと持っていく。

「！ありがとうございます！そして頂きます！！」

匂い等気にする様子も無く、少女は大口を開けて……………って、え？

「あ……………」

ガブリッ！

「んぎゃああああああああああああああああああ！！！！！！手ェ食うなあああああああ！！！！！！」

上条 side END

「うん？」

『学園都市』のとあるビル群の屋上で、とある男は何かに向けて振り向く――

「どうしましたかステイル？」

「ん、いや何でもない神裂……誰かの断末魔が聞こえた様な気がしたんだが、こんなゴミゴミした街だから多分聞き間違いだ……」

ステイルと呼ばれたその男性は正面へと向き直り、神裂という女性を見据えて言う。

「そうですか……では急ぎましょう……彼女を探しに……」

神裂は戯言と取ったのか、興味無さ気にそっぽを向く。ステイルもまたそれを気にする様子も無く、二人してビルからビルへと飛び

移っていく――

「……………！ 待った神裂！」

幾度かの跳躍の後、急にステイルが声を荒げて制止を促す。

「今度は何ですかステイル？ 戯言なら後にs……………！」

足を止めた神裂もステイルの言葉を理解したかの様にハツとする。

「気付いたか……………近くに魔力の渦がある……………」

「ええ、しかもこれは……………色彩が……………『無い』……………？」

二人は訝しげに辺りを見渡す。一見すると周りは白い建造物か、青空を妨害する風車位しか見当たらないが、この二人にはそれらに目もくれず、二人の双眸は一方向を向けている――

「……………神裂、お前は『彼女』の搜索を続けてくれ……………、こっちは僕が行く！」

「良いのですかステイル？」

「ああ、他の魔術師が『彼女』を狙っているのかもしれない……………もしそうなら、その芽は早めに摘まない……………。何、こんなに分かり易い魔力の渦なんか流す奴、僕にとっては素人同然さ……………」

ステイルは余裕を表す様に取り出したタバコに火を着け、その紫煙がビル風に攫われる。主流煙をふかすステイルの眼には慢心も油断も無い――

「……………分かりました。では私は搜索に戻ります」

「OK……………んじゃあ例の場所で……………」

そういうと二人はそこから別行動を取った――

それから少し時間を撒き戻して――、
インデックス side

私は今、『命の恩人さん』の家の中にてご飯を恵んで貰っている……………。

今私が口にしてるのはビスケット……………さっきの『酸っぱい味付けがされた野菜炒め大盛り』も良かったんだけど……………

って言っても、今の私は『恵んで貰ってる身』！我俥言ったらいけない事位分かってるんだよ！

「で、何でアンタはウチのベランダで干されてたんだ？」

「ウン、撃ち落されちゃったんだよ……………」

ホントは屋上から屋上へ飛び移ろうとしたんだけど、と私は付け足す。

「ハア！？ 撃ち落とされて……………一体誰に！？ てかお前怪我は……………！？」

「多分アタシを追ってた『敵』に……でも大丈夫！ 怪我なんかしてないよ♪」

両腕を元気に動かして、私には『歩く教会』があるんだもの！ っ
て言いたかったけど、それよりも大事な事を思い出した！

「それよりも自己紹介しなきゃだね！ 私の名前はインデックスって言うんだよ」

「おお、俺は上条当麻……って、インデックス？」

『命の恩人さん』改め、とうまが私を怪訝な目で見つめてくる。

「ってそれ、どう聞いたって偽名じゃねえか！ お前の名前は『目次』か！？ それとも何か？ 目次みたいに一杯名前でもあるのかよ！？」

ああそっか、この国だと『Index』はそっちの意味の方が慣れ親しんでるんだね。

「うーん、『禁書目録』って意味なんだけど……一杯あるのは私の名前じゃなくて……。あ！ 名前ならもう一つあった！ Dedicator 545（献身的な子羊は強者の知恵を守る）っていうんだよ！」

「で、でいいか……。まあいいや、んで、そのインデックスさんは一体何で追われてたんだ？ 後、その『敵』っていうのは？」

とうまが話の本懐にメスを入れて来たんだよ！ それは私が話した

かった事でもあったから、包み隠さず教える事に迷いはなかったよ。

「多分、私が持ってる10万3000冊の魔道書を狙った何処かの『魔術結社』だと思う」

とうまの質問に一度に纏めて答えた私だけど――、

「は？魔道書？魔術結社？」

「ウン！『グリモワール』と『マジックキャバル』とも言う」

「……………えっと……………それって新興宗教か何かですかシスターさん？」

「……………上手い事言ってそこはかとなく馬鹿にしてるね……………」

全部本当の事なのに、失敬な！

「……………と、とりあえず1個ずつ疑問を片付けていこう。まずその、10万3000冊の魔道書って？」

「ウン、私が持ってる『この世全ての魔道書』。『エイボンの書』
『ソロモンレメゲトンの小さな鍵』『死者の書』……………代表的なのはこんな感じ。
あ、でも『この世全ての』っていうのはちょっと大袈裟かな？ひょ
っとしたら私の知らない魔道書も何処かにあったりするかもだし」

「ん……中身はともかく、その10万3000冊ってのは何処にあるんだよ？お前、手ぶらにしか見えねえけど……………」

「持ってるよ？　ココに」

そう言って私は自分の額を指差した。

とうまは私の額を呆然と見つめている。フッフッフン、詳しく知ったらきつとその呆然が驚愕に変わるんだよ！ 何を隠そう、私は……………。

「……………ひょっとしてそれ、何でも物が入る異空間に繋がったフードか何かですか？」

「“ズルッ” そんな便利な物だったら私は私をこの中に隠すんだよ！！」

私が指差したのは『フード』じゃなくて……………！！

「…………まあ持ってんならいいや。それと魔術結社の『魔術』ってのは？」

あ、丸投げした！

ウウ~~~~、抗議したい所だけど、向こうの興味は完全に別の所に行っちゃってるみたいだから仕方ない…………。

「まあ、魔術っていうのは、多分君が想像してる様な物で大体合ってると思うよ…………」

「？ それってオカルト系統のアレですか？」

「ウン！ 究極的に言えば『この世の奇跡を人為的に起こす術』って表現できる」

魔術を私なりに噛み砕いて端的に説明してみせるけど、とうまは

両手で支えた身体を伸ばして唸るだけ………む！　その顔は信じてないね！

「……………ゴメン、何か助けになれるって思ったけど、多分無理だ………」

「？」

さっきまで訝しい表情だったとうまは『申し訳無い』と言いたそうな顔をする。

「俺も色々な『異能の力』を見てきたけど、『魔術』はちょっと信じられない……。この『学園都市』じゃ、『超能力』なんて珍しくも何とも無いから……『科学』の力で誰だって開発出来ちゃう………」

「『超能力』は信じるのに『魔術』は信じないって変な話!!」

それって『奇跡』は信じて、『神様』は信じないのと同じ位おかしいんじゃないかな!?

「じゃあなんかその『魔術は在る』って証拠とかあんのかよ………？何ならいっちょ見せてくれよ」

そう言うとうまだけど……

「無理。私、魔力無いから魔術使えないの」

「“ガクッ”使えないんじゃ、ホントにあんのかどうか分っかんねえだろ!!」

「あるもん！ 魔術はあるm……………あ！」

反論して真実を言い張る私は、我ながら良い名案を思いついた！！

「そうだ！！ アレなら！！！」

「？」

カキカキカキ
カキカキカキ

「……………あの、インデックスさん？」

「ん？ なぁに？」

「急に閃いた的な事を言いながら、なんでウチのテーブルに落書きを？？」

「失敬な！ これは落書きじゃなくて魔法陣！ サーヴァントの召喚陣なんだよ！？」

「さ、鯖…………？」

勘違いしてるとうまを一喝した私は陣の作成を再開する。

昨夜は『敵』が割り込んで来て失敗しちゃったけど、今度はそんな心配はゼロなんだよ！

チョークとテーブルの色は違うし、この部屋は日中なのも手伝って明るいし！手元が狂うなんて事は無いんだよ！

よし！ 出来た！

「よし！ それじゃ……」

「ちょ、ちょっと待った！ お前人家のテーブルで何する気だよ！？」
それにその鯖……なんとかって何なんだよ！？」

「訂正すると『サーヴァント』という。広義では『召使い』って意味なんだよ」

手に付着したチョークの粉をパンパンと払いながら訂正。

そして私は得意げに胸を張って『サーヴァント』についてとうまに説明……したい所なんだけど……、

「……といっても私も『サーヴァント』っていうのがどんな物なのかは曖昧な事しか分かんないんだよ」

はぁ？ともう何度向けられたか分かんないとうまからの怪訝な眼差しが私に突き刺さる。

「『サーヴァント』っていうのは、魔術の世界でも存在が疑われる概念で、古くの伝承に幾つか記憶が残っている事位しか分かってないの……。でも、『ヨセフの聖杯に導かれた勇者達』とか『霊長を守護する阿頼耶の顕現』とか、資料によって表現はマチマチなんだけど、どの文献にも『召喚』や『降霊』の魔術式に通じる記述があって、その事から『サーヴァント』っていうのは『使い魔^{アガシオン}』の一種なんじゃないかって思われてる」

私の説明に適当に相槌を打つとうまだけど、構わず私は説明を続ける……。

「一部には生涯をその研究に費やすっていう物好きな魔術師達もいるって聞くけど、そんな魔術師達のおかげで色々と分かってきた事もあるんだけどね……。このサーヴァント召喚陣の術式とか、召喚の為の呪文とかね。そんな魔術師達の成果もあって、近年じゃ魔術の世界では『サーヴァント』ってのが単なる眉唾物じゃないって言われ始めてるんだよ。噂程度に成功したって話もあるし……」

「？　はい質問！」

「はい、とうま君！」

「話聞く限りじゃ、その『サーヴァント』ってのも『異能力』で呼び出すモンなんだろ？　だったら何で魔力の無いお前にも召喚出来るって言えるんだ？」

「うん、良い質問だね」

ちよっと先生になったみたいで良い気分♪そんな私は無知なとうまの為に懇切丁寧に（胸を張って）説明するんだよ！

「よく分かんない！」

「“ガクッ” 何だよそりゃ！？」

「でも、伝承の一説では『サーヴァントは聖杯によってこの世に現出するモノ』なんて言われてるんだよ」

「聖杯？ それってあの……確か……最後の晩餐の……」

「それもあるし、神の子の血を浴びた杯の事とも言う。でも今の世界にそんな規格外な聖遺物残ってる訳無いから何とも言えないけど……とにかく、実際にサーヴァントを呼び寄せるのは聖杯で、召喚する魔術師はサーヴァントを現界させる為の魔力を供給出来ればいいんだよ！」

「……………いやだからさ……お前その理屈だと、魔力無いんじや召喚しても無意味なんじやね？」

「……………」

うん、これが昨夜でも躰いた問題……………。魔力の無い私じや仮に召喚に成功してもサーヴァントに与える魔力が無いんじや……………。

「……だ、大丈夫だもん！ サーヴァントの中には魔術師の魔力無しでも現界出来る能力を持ったヤツもいるって聞いた事あるし、ききっと私が今から呼び出すのもそんな感じのヤツだよ！」

「声震えてんじやねえか……」

うう、とうまは一言多いんだよ！ いいモン！ 絶対成功して目に物見せてやるんだよ！

「呪文唱えるからとうまは黙って見てて！ 邪魔しちゃダメなんだよ！！ 邪魔してそういうサーヴァントが出て来なかったら、とうまのせいなんだからね！！！」

「へいへい……（どんだけ自信無いんだよ……）」

とうまの生返事に一言言いたい私だけど、キリが無いから儀式の準備に掛かるんだよ。

私もサーヴァント召喚なんて当然ながら初めてだから緊張するけど、そんな事いつてられない！

目を閉じ、深呼吸して心を落ち着かせて――、

その呪文を思い出し――、

ゆっくりと――、

間違えない様に――、

詠唱を開始したんだよ――

閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

告げる。

「おっ!？」

とうまの意外といった声が聞こえて来た。

私にも『魔力の渦』を感じるんだよ！瞼の向こうに色彩の『無い』それが魔法陣にどんどん収束していくのが見えるんだよ！

これは、サーヴァント召喚の兆候っぽいんじゃないかな！？

—— 汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

—— 聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

—— 誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

—— 汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！——！

クライマックス

呪文の後半に差し掛かって、私のテンションも最高潮なんだよ！最後の気持ち強く発音して、胸の内の期待と興奮を言霊に乗せて飛ばすんだよ！

魔術の使えない私がサーヴァントを呼び出せれば、『敵』にも対応が出来る—— 期待はソレ！

魔力の無い私でもこの儀式魔術は使えた—— 興奮はソレ！

だから——、

し
し
し
し
し
し
し
し
し
し
し
ん

反動は大きかったんだよ
らくたん

インデックス side END

邂逅（後書き）

ハイ、まだオリサーバントは出てきません……

可能な限り省く所は省きますが、次回も登場させられるかどうか……

ステイル戦には参戦予定ですので、もう少しお待ち下さい……m（

――）；m

それから世界観融合に伴って、原作と多少変わった設定は後書きに書いて行きたいと思います。

ネタバレを含む事もあると思うので、読みたくない人は回れ右です！

・サーバント？

作中でインデックスが言う通り、魔術の世界でも詳細不明な魔術。名称から『使い魔召喚』の一種と推測されている（裏付けは取れている模様）が、成功した者の存在は噂程度にしかない。

伝承の研究によって幾つか分かった事がある（召喚の儀式の手順等）ものの、『聖杯』を始め、分からない単語が多く、解明にはサーバントに直接訊く位しか有効手段が無いとされる（そもそもサーバントが人語を解するのかすら分かっていない）。

それではまた！

（非）日常（前書き）

はい、3話目になってもまだ主人公サーヴァント出ませんm
し；m

その代わり、今回の最後には予定より繰り上げて他のオリキャラを出しています！

(非) 日常

—— 差し込む日光

—— 草臥れた毛布

—— 日常で見慣れた、上条当麻の部屋

—— そこに現れた非日常は、彼にどんな不幸（確定事項）を齎すのだろうか

「んで？ その『鯖なんとか』さんは何処どこに？」

上条当麻は呆れ果てていた……。

何に呆れていたのかというと、今朝ベランダに干されてた、『インデックス』と名乗るシスター少女に『魔術』やら『サーヴァント』やら、聞き慣れた様で聞き慣れない専門用語のマシガントークにある……。

「……………おっかしいな……………？ 陣や呪文に変な所は無いんだけど……………」

少女インデックスも予想外だったらしく、怪訝な表情で陣を念入りに観察する……。

「あのさ……………上条サンはズブの素人なんですけど、出来ないなら出来

ないって素直に言ったらどうなんですか？ 別に上条サンはテーブルに落書きされた程度のイタズラなんかには怒る程狭心ではありませんの事よ？」

元よりお前魔術使えないんだろ？と付け足し、両腕を組んで身を乗り出した上条はその腕をテーブルの上に乗せ、聴き手によっては貶している様に聞こえなくも無いお節介を焼く。

そして、相対するインデックスにはそう聞こえた模様……………。

「……………んもう！ 邪魔しないでっていったんだよ！？ そんなに私の話が信用出来ない！？ あとこれは『イタズラ』じゃなくて『魔術』！！『ま・じゅ・つ』！！！！」

「…………その信用を得る為にやってる『魔術』とやらが伴ってないんですが…………？」

理不尽な怒りを当てられながら平静を保ち（呆れに呆れ）、上条は冷え切った頭でツツコミを入れる…………。

インデックスは悔しそうに眉を寄せ、頬を膨らませている…………。一見すると愛らしいが、当の本人は表情通りの心境だった…………。

「（うう…………やっぱり魔力の無い私じゃダメなの…………？ 『サーヴァント』も助けに来てくれないの…………？）」

インデックスの涙腺が震える。

決壊し掛けたそれを塞ぎ止めたのは、上条からの一言だった。

「ん？ おっと！ 此处に腕置いたら話にならねえよな…………」

「？」

上条は自らの手元に目をやると、腕組みを解いて、両腕を自分の胡坐の上に運ぶ。

インデックスはその仕草を怪訝そうに見つめて、上条に訊く。

「とうま、腕がどうかしたの？」

「ん？ ああいや、腕つつーよりも『右手』がだな……コッチの手をテーブルの上置いてたら、きっと証明が出来ないだろうし……」

上条の本来の利き手は『右手』。それは腕を組むと自然に『右手』は左腕の輪を潜って下に回る形になる。そんな腕組みをテーブルの上に置いていたら、『右手』は魔術(?)の焦点と目されるテーブルに密着する事になってしまう……。

上条当麻には、例え魔術がインチキだとしてもソレを避けないと『インチキ』と言い切れない理由があった……。

「俺の右手には生まれつき、『イマジンプレイカー幻想殺し』って能力があつてな……『異能の力』なら触るだけで何だって打ち消す事が出来ちまうんだ……」

「？」

先程とは打って変わって、今度は上条が『教える側』、インデックスが『教わる側』に立場が逆転する。

インデックスは初めて耳にする『イマジンプレイカー幻想殺し』という単語に疑問符を浮かべながらも、上条の説明を傾聴する。

「『右手首から上』限定って狭い範囲に限られっけど、逆に言えば『右手首から上』は『異能の力』であれば、電撃レールガンだろうが超電磁砲

だろうが……………」

神の奇跡だって打ち消せます、ハイ……………」。

苦々しい『昨夜』を思い出しながら、説明を行う上条当麻……。少々仰々しい説明文は、『上条当麻』という人間の経験から裏付けられた、彼の中の無自覚の自信だったのだろう……。だが――、

「ブプーっ」

会って間もない少女に伝わる訳が無い……。

「何小馬鹿にした様な目で噴き出してんだよ……！」

「だって……♪見るからに無神教なお人に『神様の奇跡だって打ち消せます』って言われてもね……」

それこそ『サーヴァント』以上の眉唾物だよ……、と付け加え、さっきまで自分が今の上条みたいな立ち位置だった事を棚に上げ、インデックスは言いたい放題に言葉を散らかす……。

「グヌヌ、ムカつく……！こんなインチキ魔法少女に眉唾物呼ばわりされるとは……………！！！！」

「インチキじゃないもん！ホントだもん……！」

「現にやってみて何にも出来なかったじゃねえか！」

「どうまが邪魔したのがいけないんだよ！！」

「邪魔してねえだろ！」

「いんやした！」

「してねえ！！」

「した！！」「してねえ！！」「した！！」「してねえ！！」「した！！」「してねえ！！」

×5回以上のループの後、テーブルから乗り出した二人は顔の距離を近づけ、互いに睨み合い、唸り合う。

「てかよく考えたら、大体何で修道服着た少女が『撃ち落された』なんて表現でウチのベランダに干されてんだよ！？　そもそも此処『8階建て』だぞオイ！　それに『撃たれた』にしてはお前ピンピンじゃねえか！！」

「だからそれは『屋上から落ちた』って言ったんだよ！　あとこの修道服はれっきとした魔術霊装で、『歩く教会』って言うんだよ！！」

この魔力で動く霊装の対物理・魔術結界のおかげで、私自身は無傷なんだよ！と付け加えて吼える虎！
インデックス

「ほほう何だ……、『鯖なんとか』よりもソッチの方がずっと分かり易いじゃねえか……！　だったら、この右手でその服に触れれば、

その『歩く教会』とやらが粉々に吹き飛ぶって訳だな……!!」

ワキワキと蠢かせた右手をギュッと握り締め、自信に満ち溢れた悪い笑みを浮かべる竜^{かみじょう}!

「フッフーン♪ 君のその力が本当な・ら・ね♪」

されど、虎^{インデックス}も一步も譲らず!!

トリノの聖骸布の精巧な模造品で編まれたその服『歩く教会』に
対する信頼は、この程度では揺るがない!!
その完全に舐めきった態度に、竜^{かみじょう}が動く!

「OK上等だ! お前がその服の力を信じて、この右手の力を信じ
ねえって言うのなら……、まずは——!」

——そのふざけた幻想をぶち壊す!!!!!!

ポンッ……………

……………響いた音は柔らかだった……………

「……………あれ?」

「……………別に何処もぶち壊れていないんだけど♪」

勝ち誇る様に胸を張るインデックス……………
だが――

パンツ

「んがっ!!!!!!!!!!!!!!?」

ぶち壊れた。

「……ん？」

『学園都市』第7学区 学生寮近辺の某ビルの屋上にて、ステイ
ルが周囲を見渡す……。

「……………気のせいかな？　今、絹を裂く様な悲鳴とフレッシュ野菜

に齧り付く様な咀嚼音が聞こえた様な……また空耳か？」

右目の下にバーコードを刻んだ長身の神父『ステイル・マグヌス』は己の耳を疑いつつも、その手の煙草は手放さない……。

『ニコチンの無い世界は地獄』と公言する程の愛煙家な彼は、薄っすらと開いた細い双眸を足元に向ける。

「それにしても……………」

俯瞰の先には白いビルの床とほぼ同色のチョークで描かれた魔法陣が存在していた。

先にステイルが感じた『魔力の渦』の発生源と思われるものだ……。

「視覚的に騙したつもりなんだろうけど、惜しかったな……。『魔力の渦』の起こってる最中じゃ、トーシロの魔術師でも目を凝らす物だよ……………」

この場に居ない、陣の主を批評するステイルだが、本当の懸念は別にあった……。

魔法陣というのは、読んで字の如く『魔術師が描く陣』の事。足元の魔法陣もまたその枠外に漏れず、それは逆説的に言えば『以前、この場に魔術師が居た』という動かぬ証拠となるのだ。

「……しかし、よくこんなに正確に陣を描けた物だ……。このチョークが風化しきってない所を見ると、割と最近描かれたんだろうね……………」

昨晚辺りとか……、とステイルは陣の作成時刻を推定する。

「だが、そんな真夜中に白いビルの屋上に白いチョークで陣を描くなんて『非効率的』だ……。手暗がりなんだから敵の前に自分の視界が騙されてしまう……。にも関わらず、この陣は描かれて時間はそう経っていないから、真夜中にこの陣が描かれたのは明白と見ていい……………」

ブツブツと呟きながら、陣に対する推論を組み立てていくステイル……。そして、陣がビルの表面から完全に消える頃にそれは完成した――

「つまり、この陣の作成はそれを『完全』に記憶していないと有り得ないって事だ……。そして――、『彼女』ならそれが出来る……………」

と、刹那、ステイルの心中にまた別の懸念が生まれ、そして彼は目付きを変える。

「……………急ぐ必要が、あるかもな……………」

――そう呟いたステイルの姿は一陣のビル風と共に消えて行った――

視点を戻して上条当麻の自室――

「じゃ……………ん！ 完成……………！」

何故か部屋の主の布団に丸くなっていたインデックスが何かの達成を高らかに宣言して布団を払う。

その姿には以前とは若干の相違があった。傍らに置いたフードを被っていないのもそうだが、その最たる物が、修道服の全身の随所に取り付けられた『安全ピン』の存在であった――

全身歯型だらけのフレッシュ野菜よろしく上条当麻は、ソレの適切な表現を用いて質問する……。

「何だ？ そのアイアンメイデン??」

それはもう『修道服』以前に『服』では無くなっていた……言わば即興で『服』の形にした『布』だ。安全ピンでその体裁を繕っている所が、ちよつと弄るだけで首元から下全部が崩れそうな『脆さ』と同時に何故か触れたら色々な意味で痛そうな『鋭さ』を感じさせる……。

「日本語では『針のムシロ』という……はあ……」

………二人の身に何があったかは推して図るべし……。

閑話休題。

「あっいけねえ！ 俺今日、補習だったんだ！」

ついさっき来た担任からの連絡事項を思い出し、上条は咄嗟に携帯電話を開いて現在時刻を確認する。

意外に話し込んでしまった様で、既に走って登校しないと遅刻は確定しそうな時刻になってしまっていた。

「インデックス。俺、これから学校行かなきゃなんねえんだが、お

前どうする？」

此処に残るならカギ渡すけど、と上条は親切心で訊くが、インデックスはそれに微笑んで――、

「いい、出てく。あまり一箇所に残まってる連中此処に来そうだし……、君だって、この部屋ごと爆破されたくないよね」

「あ、おい！ 待てよ！」

やんわりと断りながら、インデックスは玄関に向かって行き、上条はそれ呼び止めようとして彼女を追いかける………が、

グギッ！

カシャン！

「どあつととつと………！」

床に蹴っ躓いた拍子に手に持ったままの携帯電話を落とし、バランスを崩した上条の足が、吸い込まれる様に………。

グシャー！！

「あゝ………」

携帯をストンピング………。

「……君の右手、幸運とか、神の御加護とか、そういうの纏めて消してるんだと思うよ？」

「は？」

そんな光景を見て、インデックスは上条の『イマジンプレイカー幻想殺し』に対して自分の見解を述べ始める……。上条もそれに若干興味を持った様で、彼女に耳を傾ける。

「その右手が空気に触れてるだけで、君は風船が膨らむみたいにドンドン不幸になっていくって事だね♪」

ガーーーーーン……

天使の様な笑顔で地獄へ突き落とす様な発言に上条は完全に氣力を喪失し、その場で四つん這いになってしまふ……。

その風船の中の空気は右手が原因か！？！？ と、心当たりの有り過ぎる的確な推論に心の中で嘆く上条であった……。

「……………不幸だ…………」

そしてテンプレ……。

「何が不幸って、その能力を先天で身に着けちゃった時点で、もう不幸だよね♪」

更に追い討ち……。

「……………なあ、お前…………」

上条は四つん這いになりながらもインデックスに訊ねる。

「お前、此処を出て行く宛とかあンのかよ!？」

それはインデックスが駆け出した時点で訊きたがっていた質問であつた……

その質問にインデックスは一拍置いてから答える……

「ウン、ちよつと遠いけど、教会に……。そこへ行けば匿って貰えるから……。この服の魔力をサーチして来る『敵』に見つかる前に行かなきゃだけど」

「ちよつと待てよ！　そこまで分かつて放り出せるかよ！」

『針のムシロ』と化した白い修道服を摘みながら、静かに答えるインデックスだが、その言葉を訊いて、上条は彼女の外出に対して食い下がる。

インデックスはそんな上条に対し、先の言い合いの様に断固抗議するでも無く――、

「じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？」

――ただ微笑んで、そう答えた……。

「は～～い、それじゃあ補習の授業を始めるです～～！ 先生気合入れて小テスト作って来たので、早速配るです～～！ 赤点以下の人は罰ゲームに『すけすけ見る見る』ですよv」

エ～～～～ッ。という生徒達の不貞腐れた大合唱を向けられるのは、声も体型もまごう事無き子供な桃色の担任、『月詠 小萌』先生。

140cmに届くか届かないかという、ダンボールでも台に使わないと黒板上部に届きそうに無い低身長とソレに見合った幼児体型、そして声変わり等遙か先の出来事と思わせる高い声色の三拍子揃った、『学園都市』の七不思議の1つとして数えられる彼女はこう見えてもれっきとした成人女性。

七不思議というのは大抵、『どうでもいい様な事』が実態だったりする物なのだが、彼女の場合に限って言えば、きつと『どうしてもいい様な事』が実態という事自体考えにくい……。

そんな『都市伝説』と『学園七不思議』の融合少女が教師をやっている此処は『学園都市』第7学区の一角に位置する、上条当麻の母校である。

今朝の一件以来、上条はインデックスと別れ、こうやって学校の補習へと馳せ参じている……。

しかし当の本人は勿論乗り気な訳が無く、浮かない顔で頬杖を突きながら教室の黒板をボンヤリ見つめるのみ……。

「『すけすけ見る見る』って、目隠しながらポーカーやる奴だっ
たかにゃ」

「10回連続で勝たな帰れませんちゅーおイタな企画w」

「やれやれ……今日は3人仲良く、朝まで生居残りな予感だにゃ」

「……って、土御門何で俺の顔を見ながら言う!？」

「ボクなんか、小萌センセに怒られる為にワザと赤点取る所存です
よ〜w」

「青髪、お前は黙ってる……」

窓際族な当麻に話しかける、金髪とサングラスが特徴の生徒『土
御門元春』とテノールの効いた野太い声で話す細目の『青髪ピアス』
……。

上条の親友にして、3人揃って「クラスの三バカ」デルタフォースと目される彼
等は何だかんだで——上条が不幸不運の避雷針にされたりする
事もしばしばあるが——とても仲が良かった。

「上条ちゃんは記録術かいほうの単位が足りないので、どの道『すけすけ見
る見る』ですよ〜v」

「げえ……」

小萌先生の可愛らしい声で告げられた上条は死刑宣告された死刑
囚にでもなったかのようにゲンナリと青筋を立てる……。

上条当麻の『罰ゲーム確定Ⅱ下校時間延長』が決定した決定的瞬
間だった……………。

「いやあゝゝ、小萌センセはカミやんがカワユゝてしゃゝないんやねゝゝw」

「愛されとる証拠ってヤツぜよw」

「ヲイ、お前等にはあの背中を見て悪意は感じられんのか？」

そんな上条を突つつき回す悪友二人はケラケラと楽しそうに笑っている……。その片方、『青髪ピアス』は更に言葉を続ける。

「あないなお子様に言葉で責められるやなんて、ボクやったらハアハアしてたまらんシチュエーションですよゝゝw」

「…………お前はロリコンの上にMかよ……、救いよう無えなオイ…………」

「アハアゝ、ロリ『が』好きなんちゃうでゝゝ、ロリ『も』好きなんやでゝゝゝvvvvv」

「あのな……」

身体をくねらせながら堂々とオタク（で済むのか？）宣言する青髪にトホトホ呆れた上条の顔はますます彫りを深める……。

デルタフオース

そんな『三バカ』のやり取りも、小萌先生の「はゝゝい！ 静粛にしないと、罰ゲームに『コロンブスの卵』追加しちゃいますよゝゝ♪」という忠告に青髪がトリップした事で、一段落する。

しかし上条は、まだ補習は始まったばかりだというのに一日働き詰めて疲れたと言いたげな表情で大きなため息――、

「不幸だ……」

——やはりそんな時に呟くテンプレ台詞であった……。

「(……………アイツ……、今どうしてんのかな…………?)」

窓の外の女子テニス部の練習風景をボンヤリ見つめる上条の脳裏に去来するのは、今朝起こった怒涛の出来事——

『インデックス』と名乗る謎のシスターとの遭遇——、

『魔術』という自分の知らない『異能の力』の存在——、

10万3000冊の『魔道書』——、

この時、上条は結果として失敗した『サーヴァント』に関しては既に忘却済みだったそうな——何故なら、それよりもずっと心に引っ掛かっていたのが——、

『——じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる?』

そんな彼女の別れ際の言葉……………身体の小さな少女の身に余る様な『強さ』を示された気がした、哀しい『拒絶』だった——

「(……………でもま、意外と早めに会えるかもな…………)」

彼女は今朝去る時にベッドの上に自分のフードを忘れて行っていたのを思い出し、上条はきっと取りに戻って来たりするだろうと思う事で補習に専念しようと——、

「センセ〜、上条くんが女子テニス部のヒラヒラに夢中になってま〜ッスwww」

「ゲッ!？」

——した所でまたしても青髪……。

——時は過ぎ去って夕方——、

『完全下校時刻を過ぎています。学生の皆さんは速やかに帰宅して下さい。完全下校時刻を過ぎています。学生の皆さんは……』

「……………結局、こんな時間まで居残りか……………不幸だ……………」

憂鬱な表情で幸せの逃亡を許すため息をつきながら、上条当麻は下校していた。

あの後、青髪の密告が原因で、罰ゲーム追加にはならなかったものの、小萌先生は泣き出してしまい、彼はついさっきまでクラスから痛い視線を浴びせられながら補習を受けるという陰湿な不幸な目に会っていたのだ。気が滅入るのも頷けるかもしれない……。カラスの代わりに鳴り響く都内アナウンスが妙にもの悲しく思えた……。

しかし——、

「あ、いたいた!」

世界は上条当麻を休ませる気は無い様だ……………。

「見つけたわよアンタ！ 今度こそ……」

スタスタスタ……

「……………って、待ちなさいよちよつと！」

走り寄って来たその少女は気丈な口調で上条を懸命に呼び止める。
ようやく気付いたのか、それとも気付かぬフリを諦めたのか、上条は立ち止まり、その声の主である少女を見遣る。

ヘアピンを止めたその茶髪の少女は、当麻の学校の物とは違う制服に身を包んでいた……。気の強そうな釣り気味の瞳通りの言動で当麻に迫る。

「ああ？ 何だ『ビリビリ』じゃねえか……」

「『ビリビリ』言うな！ 私には『御坂美琴』ってちゃんとした名前があるの！！ 全く……初めて会った時からいっつも『ビリビリ』『ビリビリ』……」

『ビリビリ』改め御坂美琴は声を荒げて本名を主張する。

『常盤台中学』という、第7学区屈指のお嬢様学校に通う中学2年生、そして『学園都市』において7人存在するとされる『超能力者』の第3位、通称『超電磁砲^{レベルガン}』——それが『御坂 美琴』である。

だが、当の上条はそれも何処吹く風といった様に——、

「んで『ビリビリ』、今日は何の用だよ？」

呼称を変える事は無かった……。

「白々しいわね分かってる癖に!! 『勝負』よ『勝負』!!」

「勝負？」

「ええそうよ! いつもいつも逃げられてるけど、今日こそはちゃんと私と勝負して……」

「興味無えからお前の勝ちで良いってば……」

スタスタスタ……

と、慣れた風に美琴を適当にあしらって帰路につく上条。話の腰を折られた美琴は――

「待ってって言ってんでしょーーーがコラア~~~~~~~~!!」
「!!!!」

ドン!

バチバチバチバチバチ!!!

――当然キレた……。

「うおおっ!!!?!」

渾身の力で踏み込んだ美琴の足からは強力な電磁波が広がり、上条のみならず、周囲の人々の携帯電話や清掃ロボット、はたまた公共モニター等の大小あらゆる電気機器に影響を及ぼす――

「ハア……、ハア……、ハア……、どうよ……腑抜けた頭のスイツチ切り替えられた!？」

「フザけんなこの『ビリビリ』!! 昨日お前が落とした雷のせいで、ウチの電化製品やら冷蔵庫の中身が全部オジャンになっちまったんだぞ!! おかげでコッチは朝からマトモなモンも食えなくて、腹のHPがもう臨界点ギリギリなんだぞ!!！」

「なっ! あ、アンタが戦わないのがいけないんでしょ!! アンタが真面目に戦ってくれば、私だってこんなにしつこく勝負申し込みに来ないわよ!!！」

「しつこいって分かってたのかよ!!！」

電撃を皮切りにヒートアップする二人の口論……。『男子高校生』と『女子中学生』の口論というのも珍しいが、何もこの二人、昨日今日出会った様な間柄では無い……。

毎度毎度、出会い頭に（主に美琴から）お互いの能力を使った喧嘩など日常茶飯事。二人が出会って穏便に済むという事自体が珍しく、こんな口論など寧ろまだ後者の類であった……。

「……ったく、じゃあお前、真面目にやってもいいんかよ？」

「なっ……!!！」

上条の真面目な声色で放たれた言葉に美琴は一瞬怯んでしまう。流石の『学園都市』第3位の『超電磁砲』レールガンでも、やはり中学生。全ての『異能の力』に対して天敵たる上条の『幻想殺し』イマジンプレイカーはただでさえ未知なる能力だ……。下手をすれば、『能力による攻撃』を打

ち消すだけでなく、『能力自体』を消されるのではないか……そんな可能性が頭に浮かび、彼女は一瞬とはいえ、勝負に躊躇……恐怖したのだ。

しかし、上条はそんな美琴の素振りを気にする様子も無く、その場を立ち去ろうとする――。

「――まったく、朝はエセ魔術師、夕方はビリビリ超能力者ときたモンだ……」

「まじゅつ、し……?」

上条からの聞き慣れない単語を聞き取り、それを訝しむ美琴……。しかし、ソレを思案する時間は彼女には無かった……。なぜなら――、

ピーーーーーーピーーーーーーピーーーーーー

『メッセージ。メッセージ。電波法に抵触する攻撃性電磁波を感知。システムの異常を確認しました』

「「え、っ……?!」」

背後の清掃ロボットからの機械音の心当たりの有り過ぎる警告が聞こえ、二人の顔は一気に青褪める……。

そして――、

ウーーーーウーーーーウーーーーウーーーーウーーーーウーーーーウー
ー

「「うわあああああ!?!?!?」」

人間の本能に『逃走』を煽る警報を鳴らしながら、清掃ロボットが暴走を開始！ 上条と美琴は当然の如く走り出す！

「バ、バカヤロー！ あんなトコでビリビリすつから！！」

「う、うっさいわね！ 喋ってないで、早く逃げなさいよ～～～
～～～！！！！」

「不幸だあ～～～～～～～～！！！！！！」

——『不幸』に始まり、『不幸』に終わる……

——それが上条当麻の日常であった……

——だが、

——その閉幕も、そう遠くないのかもしれない……

interlude

インデックスと別れた上条当麻が登校していった後の幕間——

『上条』の表札に書かれた部屋ががらんどうであったのも僅かな時間だった――

ソレは、何の前触れも無くやって来た――

「フウン、ここね……」

その侵入者は唇の『緋^{あか}』を妖艶に曲げる――

「『イマジンプレイカー』の坊やの部屋………ウフフV」

居間のスペースの宙に浮かぶ『緋^{あか}』は両足を組み、棚引くカーテンを背にして魔法陣を俯瞰する――、

その『緋^{あか}』を一言で言い表すならば、『絶世の美女』だった――

左右に向けて螺旋状に纏め、その先から更に伸びる真紅の長髪――

両腕を肘の上まで覆う、赤黒い幾何学模様の手袋――

だが、何より目を惹くのはその肢体だ――

胸や尻に実る、西洋瓜を連想させる蠱惑的な果实――

それらを隠すのは緋^{あか}いヌーブラと食い込む様な下着――

そんな肢体の魅力を助長する様に鏤められた、全身の宝石群――

そして、下半身にフワリと広がるドレスの様な半透明なピンクの布のみ――

常人が見れば卒倒するであろう、現代の女性にしてはあまりにも

節操が無い格好は、肢体、服装共々、先程この部屋を訪問していた白いシスターと全く逆する……。

あまりに浮世離れしたその美女が、何故一介の学生の寮の部屋にいるのか、その答えは彼女が見下ろす魔法陣にこそある……。

「それにしても、何の資料も手元に無く、しかも二つとも寸分の狂い無く『サーヴァント』の召喚陣を描いちゃうなんて……流石は『禁書目録』と言った所かしら……?」

美女はテーブルの魔法陣をその細く、白い指先でゆっくりとなぞる……。

「……でも、運が悪かったわね、あの子……いえ、良かったのかしら? ……もしこの召喚が無効化されてなかったら、あの子の生命力が無理矢理魔力に練られてごっそり……なんて事も有り得たのに……」

……と、『^{あか}緋』い美女は妖艶な口振りで物騒な発言を口遊び、優雅な仕草でカーテンを払い、向かいのビルを覗く。

インデックスが『飛んだ』と目される白いビルだ……。

「………運が悪いのは、召喚を無効化した『^{イマジンプレイカー}幻想殺し』の坊やの方かしら? ^{ワタシ}だってこの妾が……」

召喚陣をイジるんだからね………v

良い笑み………、あまりにも良い笑みで、美女はその3本の指先を魔法陣に向ける――

するとそこから幾重にも重なった、緋色の魔法陣が展開される――

「数秘紋 隣人の731」

――浮かび上がるは“7”“3”“1”のアラビア数字。

3つの数字が幾つにも増え、その順列を守りながら魔法陣を取り囲むと、陣は立体化し、緋に染まったソレは周期的に回り始める――

「さて、と……これであとはキツカケだけ……あゝ疲れた……。帰ってシャワーでも浴びよう……」

お楽しみが終わったかのような怠惰な声が、彼女の儀式終了の合図だった――

「さて……妾^{ワタシ}にこんな事頼んで、今度は一体何を見せてくれるのかしらね……『クロウリー』のヤツ……」

その眩きが終わる頃、部屋のキャンバスに緋^{あか}い色は忽然と消え去っていた――

i n t e r l u d e o u t

(非) 日常 (後書き)

作者はこの作品では基本的に『サーヴァントという形でしかオリキ
ヤラを出しません』！

そして主役サーヴァントのヒントも少しだけ出しています。これで
真名が分かった人は、A++ランクの『芸術審美』スキル持ちです
wwww

火蓋し召喚（前書き）

どうもこんばんは！

やっと、やっと主人公登場です！！！！！！／（T T）／

でもまだ戦いません；

火蓋し召喚

チーーーーー

学生寮の昇降機エレベーターが目的の階に辿り着く

ソコから降りてくるのは、今日も頑張って不幸を切り抜けた高校生『上条当麻』

これから彼が目にするのは

希望か、絶望か

1

「……………ッあゝゝゝ疲れたゝゝゝ……。ったく、『ビリ』と一緒に逃げ回ってたら、ますます遅くなっちゃった……」

不幸だ……と普段ならこの後にボソリと呟く上条だが、目の前の奇妙な光景に目を奪われ、そのテンプレを呑み込んでしまった……。

「?……清掃ロボットが3体……?」

そこは見慣れたドラム缶フォルムの清掃ロボットが自室の前に群がっている光景だった。あまり見ない珍しい光景だなど、上条が目を凝らした先には、

「！……………何ていうか、不幸だ……」

銀髪の白いシスター、インデックスの倒れた姿だった――

予想はしていた為か、あまりに早い再会に上条は満更でも無いと
いった風にインデックスに話し掛ける――

「インデックス？　お……いいインデックス！　こんな所で寝てたら
風邪引くぞ？」

インデックスに歩み寄り、声を掛ける上条だが、彼女からの返事
は無い……………。上条は彼女を揺り起こそうとしゃがんで手を掛け
るが――、

「おい、インデック……………！？」

その赤い感触に、言葉を失った――

「……………何だよ……………コレ……………?!」

上条はその差し出した手を見遣ると、その手は赤く染まっていた。
見ればインデックスの背中もまた、その白い修道服を侵蝕するかの
様にその『赤』が広がっていく……

彼女は怪我をしていたのだ――　それも血色を奪われ、顔面蒼
白になる程に――

「おいインデックス！？　しっかりしろ！！　誰がこんな事を！？」

上条は尚も彼女の耳元で彼女の名前を呼び続けるが、反応は無い

だが、

「うん？ 僕等、魔術師だけど？」

「!？」

背後の代弁者がそれに答えた

「お前は!？」

上条は勢い良く振り返り、背後に現れたその男をその双眸で真っ直ぐ見据える

上条を遙かに超える180cm程あると目される身長、それとは不釣り合いな童顔、赤い髪とバーコードの刺青の入った右目下、両耳に光る幾つものピアス、重苦しい黒い神父服カソックに身を包んだその男もまた、火の付いた煙草を咥えながら、此方を見据えている……………。

「うん？ これはまた…………神裂のヤツ、随分と派手にやったモンだな…………」

その男は視線を手負いのインデックスに移すが、飽く迄も冷静に

淡々と喋る。

「……………なんで……………此処に……………」

「うん？ 此処に來た理由？ 忘れ物でも取りに來たんじゃないのかな？」

そういえば彼女、フードはどうしたんだろうね？と続けた男の言葉に上条はハッと今朝の出来事を思い出す――。

『イマジンブレイカー幻想殺し』でインデックスの『歩く教会』を破壊した事――

、
インデックスの言う『敵』がソレの魔力をサーチしているという事――、

インデックスが唯一無事だったフードを自室に忘れていった事――
、
そして――、

『――じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？』

「（……………コイツは俺を戦いに巻き込まない為に……………！！）……………ツバカヤロウ……………！！！」

頭の中で全てが繋がった上条はインデックスに哀しい罵倒をぶつ

ける……否、それは自分の無力さに向けて、だったのかもしれない……。

だが、それを議論する暇は今の上条には無い……。上条は振り返り、背後に立つ男をキッと睨み付ける……！

「……やだな、そんな目で睨まれても困るだけなんだけどね……」

しかし男はその飄々とした姿勢を崩さない――

「それをやったのは僕じゃなくて神裂だし、それに彼女もそこまでやるつもりは無かっただろうよ？ 一体何の因果で壊れたのか、『歩く教会』が働いてると思っていた彼女の過失だろうけど、まあ僕でもきつと同じ間違いをしていただろうね……それに僕だったらこの程度じゃ済まなかっただろうから、そういう意味じゃ相手が神裂で良かったって事だ……」

それが不幸中の幸いだけどね、と男は自嘲する様に語る……。

「何でだよ……」

「？」

「俺は魔術なんてメルヘン信じられねえし、お前等魔術師みてえな生き物の考えは理解出来ねえよ……」

けど！ と、拳を握り締めながら立ち上がった上条は目の前の男を真っ直ぐ見据える！

「お前等にだって善悪ってモノがあるんだろ！！ こんな小さな女の子を寄って集って追い回して………血塗れにして………！ これ

だけの事を仕出かして、お前等はまだ自分に正義があるなんて言えんのかよ！……！」

上条はインデックスに目を配りながら男に訴える。

しかし、男は意に介した様子も無く、啞え煙草を手にとって彼女を指し示す……。

「……………言いたい事が終わったら退いてくれないか？ ソレ、回収するから……。」

「……………回、収……？」

「正確にはソレの持ってる——いや、記憶している10万3000冊の魔道書……グリモワール……だけどね……。」

また出て来た。上条の脳裏から離れなかった、インデックスの持っているという10万3000冊——

今朝のインデックスとの会話では理解出来なかった単語だ。だが、少し違う……。目の前の男の言い回しがインデックスの時とは異なっている……。

「……………記憶、だって……………?!」

「“完全記憶能力”……一度目にした物を一瞬で覚え、それを一生涯記憶し続ける能力さ……ソレの頭はその能力を利用して、世界各国に封印指定された危険な魔道書を記憶・保管する、言わば『魔道書図書館』……。」

故にソレの名は『インデックス』……『禁書目録』……って訳さ……。

「……禁書、目録……」

上条はその言葉を噛み締める様に反芻する……。

最初から妙な名前だと思っていたが、そんな理由があるとは、上条は思いも寄らなかった、寄る訳が無かった……。

「ま、ソレ自体に魔力は練れないし、魔道書自体も君みたいな常人が不用意に目の当たりにすれば有害ってモンじゃないんだけど……それらを差し引いてもその10万3000冊は少々危険なんだ……だから、何処かの危険な魔術結社に拉致される前に……」

こうして保護に馳せ参じた訳だよ……。

「……………保護、だって……?!」

上条は耳を疑った。

インデックスをこんな目に会わせたこんな奴等が——、『保護』？

「そうだよ。そうさ……、今君が考えてる意味での『保護』で合ってるよ……。それにいくらソレに良識や良心があったって、拷問や薬物にはきつと耐えられない……正直手遅れかと思ったけど、どうやら杞憂だったみたいで安心したよ……」

こんな小さな女の子がそんな事をされていると考えただけで、心が痛む……男は飽く迄も自分達のやり方を肯定的に語っている……。人にそれを『正しい事』と思わせる、罪を赦す、といった口ぶり……だがしかし、上条にとっては神経の逆撫で以外の何者でも無かった——

「……ツテメエ……何様だ！……！」

既に堪忍袋は臨界を超え、上条は男に向かって駆け出し、殴り掛かる。

だが、男は柳の如くそれをかわし、勢い余った上条が男の背後に回る形となる。二人の位置関係が逆転したともいう……。

「ステイルⅡマグヌス……と言いたい所だけど、ここはFortis 931（我が名が「最強」である理由をここに証明する）と名乗ろうか……」

「?! ……その名前、インデックスと……！」

名乗られたその名前に上条は今朝のインデックスの『もう一つの名前』を思い出す……。

「ああ、『魔法名』だよ……。僕達魔術師は魔術を使う時、『魔法名』を名乗らないといけなくなってる……もつとも、そんな古い因習に興味は無いんだけど……」

重要なのは『魔法名』を名乗った『事実』なんだよ、とステイルⅡマグヌスは煙草を手に取り、それを寮の外に向けて投げ捨てる。傍から見ればただのポイ捨てに見える行為だが、そんな生易しい物であつたら、上条当麻はどんなに幸せであつただろうか……。

「言ってみればこれは——『殺し名』、かな……」

——炎よ。

ステイルのその一言で、彼が投げ捨てた煙草は、ゴワアツという轟音と共に内側から爆ぜ、それは大いなる炎となってステイルの掌に収まっていく……。

まるでその炎全てが目の中の男の従者の様に——

「ッ………これが、魔術……！？」

その炎達を避ける為、上条は咄嗟に右手で顔を庇う姿勢を取る。
多くの『超能力者』達と渡り合^{ドンパチして}って来たという経験に基づいた、上条当麻独自の構えだ……

「（……この右手……『幻想殺し』^{イマジンプレイカー}）は『異能の力』なら何だって打ち消しちまう………けど……！」

俺はまだ、『超能力』以外の『異能の力』を相手にした事が無い
！！

経験の不足は心の余裕を無くす……。初めて相対する魔術師に果たして『無能力者』^{レベル0}の自分が敵うのか、そんな不安が上条の心を侵蝕していく……。

だが——、

「——巨人に苦痛の贈り物をオオオ……！！」

「!」

そんな時間も許さず、ステイルは炎の魔術を上条に向けて投げ付ける!

学生寮の一角に爆炎が広がる――

「……………ツちゃー……、やり過ぎたかな……。ま、こんなトコか……その程度じゃ、何度やっても勝てないって事だね……」

掌の残り火を握り潰し、ステイルは背を向ける……………だが――

「誰が……」

「?!」

「何度やっても勝てないって……!!!!」

驚愕のステイルが振り向いた先にいたのは、炎に巻き込んだ筈だというのに肉体はおろか、服に焦げ目すら付いていない、上条当麻の姿だった――

「ハ、ハハ……、そうだよ、何ビビってんだよ俺……。インデック

スの修道服をぶち壊したのだって、この右手の力だったじゃないか
「！！」

不安が杞憂に変わった事で、上条の口からは自然と笑みが零れる
……。

人間とは不思議な物で、強大な敵を前にしても、自分に有利な要素が働くと、それだけで心の不安など簡単に振り払ってしまう物である……

そして、今の彼もまた――、

「へっ………いいぜ……！ テメエがインデックスを傷付けるのを肯定するなら……」

「くっ………！」

ステイルの炎が再び上条に襲い掛かる――！

「まずは……」

だが、上条は焦らず、それを『右手』で握り潰す――！

「そのふざけた幻想^{げんそう}をぶち壊す……！！」

とある一室に輝く魔法陣の呼応に気付く物は、この場にはいなかった――

「成る程……合点がいったよ……『歩く教会』が一体誰に破壊されたのか……経緯はともかく、君だったのか……」

目の前の高校生を見据え、その危険度を上方修正するステイル。
イレギュラー

ステイルは経験豊富な魔術師だ。平均的な魔術師では太刀打ち出来ない程の実力もあるし、数多くの修羅場を潜ってきた自信もある。故に、先程とは逆に今度は上条の方が歩み寄り、ステイルの方が未知の力の脅威に晒される事となった。

相違点があるとすれば、それは――

――世界を構築する五大元素の一つ、――

『不安』を噛み砕く、その『経験』と『自信』――

――偉大なる始まりの炎、――

「!？」

上条は立ち止まった。ステイルの元に再び炎が収束していくのだ！

「――それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり、――」

増幅された炎は再びステイルの掌へと集まってい——それ
は、先の魔術よりも見るからに強力な業火だ——

「——それは穏やかな幸福を満たすと同時に冷たき闇を滅する
凍える不幸——」

——その名は炎！ その役は剣！！——

その二節の詠唱で、業火は更にその勢いを増し、瞬く間にステイ
ルの長身を超える火柱と化す——

「——顕現せよ！ 我が身を食らいて力と成せ！！！」

そして——、

「■■■■■■■■■■~~~~~！！！！！！」

——火柱から悪夢が生まれた——！

「……………！」

上条は目の前の悪夢から目を逸らさずに真っ直ぐと見据える。

収束した炎の熱が皮膚に届き、その熱気は周囲の可燃物には焼却を、金属の尽くには色を変える程の熱気を与えている――！

それは業火の擬人化だった……。集結した黒点が巨大な人の姿を形作り、それは尚も燃え続けている。まるで、この世の全てを燃やし尽くす為に存在している様な――そんな炎の概念が巨人の形を持った物、というのが、目の前の悪夢の表現には相応しい……。

「紹介しよう……。彼は『魔女狩りの王』……その名の意味は……」
イノケンティウス

――『必ず殺す』！

「■■■■~~~~~ッ!!!!!!」

かのローマ教皇の名を冠する炎の巨人は、地に響き渡る咆哮と共に、その手に顕現させた、身丈に届く程の炎の十字架を上条の頭上目掛けて槌の様に振り下ろす――！

「――邪魔だ！」

だが、当麻は臆する事無く、退魔の右手『イマジンプレイカー幻想殺し』を突き出し、眼前の巨人を打ち砕く――
……つもりだった……。

ゴオオオオオオオオオ……

「!? 何だ、コイツ?!」

上条の驚愕、それは目の前に起こる現実に対してだった……。

『イマジンプレイカー幻想殺し』は、眼前の敵を打ち砕く筈だった……だが、現実はそのようにはならなかった……。

『イノケンティウス魔女狩りの王』は健在だった……。明らかに『異能の力』たる『イマジンプレイカー魔術』が元になった炎の巨人は、それにも関わらず、上条の『イマジンプレイカー幻想殺し』を寄せ付けけない——！

「俺の右手が効かない!? ……………! 違う! この炎…………!」

否、それは確かに有効だったのだ……。だが——、

「消滅した直後に復活してる!?!」

存在の明滅を繰り返す炎に目を見開く当麻。

そう、右手が効かなかったのでは無く、効いてもすぐに再生する力が、この業火にはあったというのだ——！

自分の『魔術』を無力化する光景を2度も見たスタイルが、そんな簡単に消滅させられる様な『魔術』を使う筈が無かったのだ!

『イノケンティウス魔女狩りの王』の槌を防ぐので手一杯な当麻をその向こうでほくそ笑むスタイルだが——、

「【ルーン】」

「「！」」

不意に、聞こえる筈が無いと思っていた声がした――

「【神秘・秘密を指し示す24の文字にして、ゲルマン民族により、2世紀頃より使われる魔術言語で、古代英語のルーツとされます】」

インデックスだ――

血色を抜かれ、顔面蒼白で倒れ伏していた筈のインデックスがその声の音源だった。

だが、その彼女の様子は、今朝とはあまりにも『異質』だった――

「【『インケンティウス魔女狩りの王』を攻撃しても効果はありません。壁・床・天井……辺りに刻まれたルーンの刻印を消さない限り、何度でも蘇ります】」

「……チツ、ヨハネのペン自動書記か……」

自分の『魔術』の仕組みを看破され、ステイルは今だ倒れ伏すインデックスに向けて舌打つ……。

「お前、インデックス……だよな……?」

飛び散る火花の奔流の中、上条が問い掛ける。その『異質』は、ただ感情を込めずに言葉を紡ぐ。

「【はい。私はイギリス清教内第0聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔道図書館です。正式名称は『Index-Library-Prohibitorum』ですが、呼び名は略称の『インデックス』で結構です。現在、自動書記・ヨハネのペンを起d「少し黙れ……」“ガッ”】」

「!!?」

耳障りに感じたのか、ステイルがインデックスを足蹴する事で、彼女の口を無理矢理塞ぐ。

「……………君には出来ないさ……………。この建物中に刻んだ僕のルーンを完全に消滅させるなんて……………片手間で君に出来るかい？」

「!」

勝ち誇った様にステイルは上条を蔑む様に一瞥を投げる。

今の上条の現状はあまりにも不利だった……………。目の前の『魔術』イマジンプレイカーの弱点が分かったのに、今、『幻想殺し』に相對する、この眼前の『魔女狩りの王』イノケンティウスの攻撃を防ぎながら、幾つ有るかすらも分からない寮中のルーンを全て消す……………。

あまりにも『絶望的』だ……………一人ではとても出来ない……………。しかも相手はこのままインデックスを連れて逃げるか、この炎の巨人で自分を押し潰すかで勝利が確定する現状――

「ツクそ! だからって……………こんな所で……………こんな奴に……………!」

……………イイイイイイイイン――

当麻の『右腕の甲』に光が奔る――

「諦めろ。そうすれば殺しはしないよ……」

最早、生殺与奪権を握ったかの様に勝ち誇るステイル……。それは『勝利への確信』によって裏付けられた言葉だった……。

「……………ッ誰が……するか……よ……!!」

上条は強気に言い返し、『イノケンテイウス魔女狩りの王』を押し返そうとする――

「フウ……………愚かだ……………けどその蛮勇は讃えよう……『イノケンテイウス魔女狩りの王』…………」

――『潰せ』

「グッ…………アゝアア、グウッ……………!!!!」

ため息混じりの主の命に従い、一層力を入れる『イノケンテイウス魔女狩りの王』…………。

上条はついに膝をつく。その地面は熱気を帯びており、空気中の熱気と相俟って、上条から徐々に体力と意識を奪っていく――最早潰されるのも時間の問題だった――

「ツくそォ…………!! ウ、クウウウウ……………!!!!」

それでも上条は折れた膝を起き上がらせる、目の前の現実**に必死**に抗おうとしている――**！**

「……………」

何を思っているかは表情からは読み取れないが、ステイルはその少年の足掻きを冷ややかに見つめている……

「(……目の前で、女の子が危ないって分かってるのに……『右手』が……届かねえ……!!!)」

クソ！クソ！！クソ！！！！

上条は心中で罵倒した――

短い『右手』を罵倒した――

無力な自分を罵倒した――

何度も何度も罵倒した――

そして、叫んだ――

「(……こんな『右手』を持って生まれた俺はいつとも不幸続きだ……！成績は上がらねえ、金は浪費する、不良もブツ飛ばせねえし、女の子にもモテやしねえ……！……けど！………それだけなら良い………けど………!!)」

――困ってる目の前の奴を助けられない『不幸』だけは――

謎の爆発に呆ける二人……。

上条は尻餅をつき、ステイルも開いた口が塞がらなくなり、両者共に現状の整理に苦しむ状態に陥っていた――

やがて――

カツ　カツ　カツ　カツ　カツ

鋼のような足音が、その壁の穴の向こうから聞こえてくる――

やがてソレは穴から姿を現す――

「……………」

それは、白金の騎士だった――

曇り一つ無い白く輝く甲冑は神々しく――

それに覆われるは、身長が当麻に届くか届かないかという少年的な体躯――

特に兜は特徴的に特徴が無かった。馬の尾の様に髪の毛が垂れるその兜は、騎士を想像すれば、真っ先に思い浮かぶ格子状のスリットは無く、代わりに顎が設けられている――

鎧の背中に羽織る紫色のマントは風に棚引き、蒲公英タンポポの様に黄色い裏地が見え隠れする――

左手には赤い十字架の刻まれた白い小盾を携え、腰には、片方に三つ編みの下緒が見られる2本の剣を佩いている――

その騎士は状況判断の為か、辺りにある程度見渡すと、当麻にその格子の向こう側から光る目を向ける――

「――今一度、貴方に問いたい。貴方が僕のマスターですか……」

「……へ、へえ？」

兜に反響する高めのボーイソプラノからの問いに、思い返すだけで赤面しそうな声で答える上条。……無理も無い。目の前の騎士は、自分とほぼ変わらぬ背に関わらず、その存在感は圧倒的だったのだ

――そんな目の前の騎士は、上条の『右腕』に視線を移す――

「……右腕に『令呪』を確認しました。マスター……」

『騎士』の視線の先、上条の『右腕』――もっと言うなら『手首より下』の前腕部の甲、『手首より上』の右手が普通では絶対届かない位置だ――には、見た事の無い模様の刻印が刻まれていた――

それについて触れる暇も無く、事態は進行する――

今度は眼前の騎士が自分に向かって頭（しうべ）を垂れて来た。本物の騎士らしく膝をつき、まるで上条を『自分の主』として仰ぐ様に……

そして――、

「サーヴァント『セイバー』。召喚に応じ、参上致しました。これより我が剣は貴方と共に在り、我が勝利を貴方に捧げます……。ご命令を……『マスター』」

「!? サ、『サーヴァント』?!」

「『セイバー』……?」

――その日、少年は『^{フェイト}運命』に出会った――

『聖杯戦争開始マデ、アト、……………』

火蓋し召喚（後書き）

主役サーヴァントはやっぱり『セイバー』でしたwww

次回からは『セイバー』も活躍します！頑張りますのでよろしくお願ひします！

……………割とヒント出してると思うので、もう彼の真名分かった人居るかな？

業火く聖盾（前書き）

小説情報に主人公の決め台詞を先行公開です。

どういう意味かはお楽しみに！

業火と聖盾

上条は困惑していた……。

ステイルも困惑していた……。

『世界』すらも、困惑していた――

『正史』から外れた、科学と魔術の物語が――、

――今、この『騎士』によって、変わっていく――

1

「ご命令を……『マスター』」

落ち着いた、緩やかな口運びで、自らを『セイバー』と名乗った『騎士』は言葉を紡ぐ……。

一方、彼に『マスター』と呼ばれた上条はというと――

「マ……『マスター』……？」

――今だ現状に思考回路がついて行かないのか、口をパクパクさせて『騎士』の言葉をオウム返しで返すばかり……。

マスター……ますたー……master……日本語訳して『主人』……。

……………って誰が……………誰の……………？

「『貴方』が、『僕』のマスター……………です」

うおっ！心を読まれた！？

「いえ、全部口に出てますよ、『マスター』……………？」

「え？マジッスか？！」

心の隠し事が驚く程出来ない自分と目の前の『騎士』の言う事に
絶句する上条……………。

「ってか何なんですかちよつと?! 『シスターさん』に『ビリビリ』に『魔術師』と来て今度は『コスプレ騎士』って……………今日の
三文小説でももっとマトモな展開考えますよちよつと?!?!? 流石
の上条サンもそろそろ許容量超過寸前なんですけど?!?!?!?!?」

流石の上条も声を荒げて、目の前の『騎士』に八つ当たる。

『騎士』はそんな自暴自棄になりつつある上条を両手で諫める……。

「ん?」

「落ち着いて下さいマスター! あと『こすぷれ』とは何d「あゝ
……………!!!!!!」うわっ!?!」

そんな上条が、ある一点を見つめた後、また一層大きな声を上げる……………。

「か、……上条さんの部屋が跡形も無く……」

それは今さっき『騎士』がぶち壊して出て来た壁の向こうに見える『上条当麻』の部屋だった……。

本来、壁に隔たれて見えない筈の『上条当麻』の部屋は、壁も床も天井も、波動砲でも通ったかの様な焼け跡だらけで、もうプライベートがバレる心配など無い程、その見る影が無くなっていた……。特にぶち抜かれた壁と一体となっていたキッチンはどうこの世に存在せず、破れた水道管から切なく噴き出す水の音が死者の哀悼の様に聞こえた……。

「ア……アア……ア……」

はい、キャパシティオーバー許容量超過……。

「……………不幸だ……………」

ガッツツクウウウウ……ン、と四つん這い通り越して土下座な体勢となって額を床にぶつける上条であった……。

「……あつと、えーとえと、ス、スミマセンマスター！ ……えと、その、僕、マスターの御殿とは露知らず……あ……あの………マスター？ マスター？！ ……顔を上げて下さいマスター！！」

自分の不手際に気付き、『騎士』もまた、その高潔な甲冑に似合わぬうろたえ振りを見せる。

『騎士』の謝罪の辞も耳には通らず、今の上条には最早両腕のくの字を矯正する気さえ見られなかった……。

そんなやり取りを見つめるステイルは、上条よりも先に平静を取り戻していた。

そして、その目はまるで猛禽類の如き鋭さで、突如現れた『騎士』を見据えている……。

「（『サーヴァント』……『セイバー』だって……?!）」

冷静に現状を整理するステイル……。だが――、

『今日の前に信じられないモノが居る』……

どんなに冷静に分析しても、出てくる答えはそればかり……

「（……一瞬ローマか何処かの騎士が割って入って来たモノだと思ったが……あんな鎧……ローマだけじゃなく何処の騎士団でも魔術結社でも見た事が無いぞ!? それにアイツ……）」

人間じゃ考えられない魔力の塊だ……!!!!

ステイルⅡマグヌスは『魔術師』という肩書きとは裏腹に現実主義だ。

曖昧な『可能性』では無く、『確実』な未来を掴む為、彼は『魔術師』として、今の今まで自分を研鑽し続けて来た。

そうやって身に着けて来た彼の實力には、現実主義者であるステイルが、現実に対抗する為という血の滲む様な努力と強い想いが込められていた……。

――だが、何だアレは!? 夢でも見ているのか!? 今、

目の前の出来事は現実なのか……?!

もし、これが現実だとするならば、考えられるのは、『騎士』が自分から言った『サーヴァント』という単語……………。

「(……………そんな眉唾物……………信じてなんかなかったんだけどな……………!)」

『サーヴァント』……………一般の世界から『オカルト』だの『インチキ』だのと揶揄され、信じられていない『魔術』の世界ですら、その存在を信じる者が少ない、詳細不明の魔術概念……………。

名称から察するに使い魔^{アガシオン}の原型、或いは亜種か何かだと、何も知らない魔術師なら思うだろう……………。ステイルもまた、そんな魔術師の一人だった……………。

だが、あれは使い魔^{アガシオン}なんて可愛い物では無い……………あれは

———
化け物だ!!

「———灰は灰に———塵は塵に———」

———自然と呪文^{ソレ}が口から漏れた……………。

それは、眼前に現れた強敵に対する『恐怖』か、『高揚』か、『

焦燥』か――、

「(何だって良い！　とにかく『潰す』！！！！)」

『先手必勝』……

ステイルの頭の中にあるのは、ただその言葉だけであつた……。両の手の上に炎が灯る……やがて炎は2本の剣を形作り、眼前の化け物を屠らんと、ソレは振り下ろされた！

「！」

「『吸血殺しの紅十字』！！！！！！」

『騎士』が此方に気付いた様な素振りを見せるが、ステイルは攻撃を止めない。

2条の剣閃は空間を十字に焼き尽くしながら、真っ直ぐ直進していく――だが、

「フッ！！！」

『剣の騎士』――セイバーは即座に折り曲げた膝を矯正し、振り向き様に左腕の円盾を構える！

その盾は小さく、防御力よりも取り回しに特化した、所謂『バックラー』に近い形状だ。そんなバックラーもどきが、今日の前に迫

る業火を防ぐ事など、普通では敵わないだろう……。

——普通では……、

「なッ！」 「えっ!?!」

炎剣を放ったステイルもようやく顔を上げ始めた上条も再び驚愕する！

炎剣『吸血殺しの紅十字』は確かにセイバーを捉えた筈だった……だが、その炎はセイバーが構えたバックラー程度の大きさの盾によって、霧散したのだ……。

「……………侮るな魔術師^{メイガス}。僕も『三騎士』の端くれだ……相対するなら、もっと強力な魔術を用意しろ……」

盾を構えた左腕で焼け焦げた空気を払いながら、セイバーはステイルを威圧する。

先の様なうろたえ振りを微塵も感じさせないそれは、まごう事無き『騎士』の振る舞いだ……。

上条はそんな自分を守る様に立つ『騎士』のマントが棚引く背中を見つめ続ける……。

「(……………『幻想……………殺し^{イマジン ブレイカー}』……………?)」

今の炎を無効化したセイバーの力を自分と同じかと思う上条。
上条にとって、目の前の『異能の力』を打ち消す能力は他に心当

たるモノが無かったからである。

だが、もしそうでなくても、自分と似た様な力を持った誰かが、ヒーローの様に自分を守る様に立っている光景……、

誰もが一度は憧れる『ヒーロー像』の様に思えてならなかった。

そんな想いもまた、上条が目の前のヒーローの背を見つめ続けた要因なのかもしれない……。

「マスター。召喚されて早々急を要する事態みたいですが、あの魔^{イガス}術師はマスターの敵、と判断して宜しいでしょうか？」

「え！あ、ああ……」

セイバーの言葉で上条は現実に戻され、彼の質問に肯定する。

「ではマスター、ご命令を！ マスターがお望みとあらば、この『セイバー』として召喚された身、マスターを守る盾となり、眼前の敵を打ち払う剣となりましょう！」

その『騎士』の澄み切った声は世界に浸透する様に辺りに響く――

上条には、この『騎士』が何者なのか分からない……。ようやくマトモに回転し出した思考回路を持つてしても、その現状はあまりに理解し難い物であったのだ。

……言葉から察する限り、彼は味方みたいだが、自分は『マスター』なんて大層な呼ばれ方される様な身じゃないし……と、様々な『可能性』が情報の少ない頭に浮かんでは消して、浮かんでは消してのループ作業が上条の脳内で行われる……………。

だが、その二人の問答が終わらずとも時間は進んでいく――

「……フーン、強力、ね……」

セイバーの威圧にステイルは動じた素振りを見せず、それどころか、ふてぶてしく笑って見せた――

「それって例えば………」

……
―― こんなのとか？

「■■■■■■~~~~~~~~ツ!!!!!!」

「「!?!」」

その不敵な笑みは『勝利への確信』――!

当麻とセイバーの背後に炎の巨人が蘇った……!

「イノケンティウス魔女狩りの王! 『サーヴァント』を先に潰せ!!」

「「ッ!!」」

ステイルの指示に従い、巨人は拳をセイバーに向けて振り下ろす。上条は頭より身体を早く動かし、咄嗟に駆け出して『右手』を眼前の騎士に向けて伸ばすが――、

轟音。ただそれだけが全てを物語る……。

2

「あ、くあッ……、ッ………!!」

学生寮の6階……要するに当麻の部屋のある階の1つ下には、壁に右手を掛け、肩で息をする上条が居た。

炎の地獄から命からがら脱出して来た彼は、満身創痍という言葉がお似合いな格好だ。白い夏用の学生服は所々焦げて黒ずんでおり、黒煙の森から抜け出した名残か、顔や腕などの肌の露出部分は煤汚れている……。

だが、そこにあの『騎士』の姿は無い………。

「ハア……ハア……ッ死ぬ………ホントに……死ぬ……!」

自分の存命を疑いながら、上条はその疑念を払う様に肩で息を行う。額の汗を腕で拭う度に、拭った箇所にも煤が移り、薄汚れるが、上条にそんな事を気にする余裕は無かった……

そんな折――

「……………ん？」

奇妙な光景が目に入った。

それは普段見慣れた学生寮の廊下に『異物』が此処^{じゅうおうむじん}彼処に張り巡らされた、異質な光景だった。

「何だ、コリヤ……？」

上条はその『異物』の1つに右手を伸ばし、剥がして手に取ってみる。

そこには何らかの文字らしきモノが描かれたいた。単純且つ鋭角的なそれらは『魔術』に疎い上条には、最近聞いた言葉しか検討が付かなかった。

「これが……『ルーン』?! コピー用紙に書いてセロハンで貼り付けてるだけじゃないか……」

こんな物であんな炎^{バケモノ}の巨人作れんのかよと、『魔術』のあまりの規格外振りに思わずぼやく上条……。

そんな思いで手にしたコピー用紙を眺めていると――

「うん？」

不意に、更に不可思議なモノが上条の視界に入った。

「何だ、コレ？」

それは『刺青』に似ていた――。

竜の顔を模った三画の紋様………抽象するならば敢えてこう表現できるモノだった。今手に取っている『ルーン』とも違う、もっと複雑なモノだ……。

自分の右腕に何時の間にこんなモノが……と、ソレを訝しい表情で見つめる上条だが、ふと、あの『騎士』の言葉を思い出す。

『……右腕に『令呪』を確認しました。マスター……』

あの騎士の言っていた、『令呪』という単語……。

今考えると、あの騎士はこの『令呪』（と呼んでいたと思われるモノ）を確認してからだ……。上条の事を『マスター』と呼び始めたのは……。

……もしかしたら、『マスター』って単語は、この『令呪』と関係してるんじゃない……！

「……ってそうだ！！ アイツは！？」

そこまで考えて、上条はあの『騎士』の安否について思い出す！

あの時、炎の巨人に襲われそうになる『騎士』を目の当たりにした上条は、無我夢中で『右手』を伸ばした——それは突き飛ばしてでもその『騎士』を助ける為の行為だった。

だが、それが災いの始まりだった——！

『“バチン！” ぐあっ！！』

『右手』が『騎士』の甲冑に触れた途端、それは耳を劈く鋭い音と共に弾かれたのだ——！

『右手』が吹き飛ばされる程の衝撃。それと一緒に上条の身体は後ろに持って行かれ、『騎士』の方も思いも寄らぬ衝撃を喰らったせいか、体勢を崩し、炎の巨人の一撃をマトモに受けってしまう……。

そんな目を背けたくなる光景が、巨人の脇を潜る様に吹き飛ばされた上条が見た『騎士』の最後の姿だった――

「アイツは!?!? 無事なのか!?!?」

自分があの『騎士』を助ける筈が、災いを招く遠因を作ってしまった事を思い出した、思い出してしまった上条は、通り過ぎる弾丸を目で追う様な速度で振り返る。

その時、目にしたのは――、

轟! と階段の上から流れる地獄の業火と――

「グアッ!!」

その奔流に揉まれながら落下して来る『騎士』――セイバーが居た!!

「お、おいお前! 大丈夫か!?!」

セイバーの無事に安堵しつつ、上条は彼に呼び掛ける。

「!?!? マスター?! 何をしてるんですか!?!」

開口一番に叱責……。

いや、さっきの自分には非があるのは分かってるが、そんなにハッキリ言われると――、

「早く逃げて下さい！ マスター！！」

……………は？

「この魔術……僕の『対魔力』じゃ抑え込むのが精一杯なんです！
！ 長くは持ちませんから……早く、マスターだけでも……！！」

目の前の業火相手に構える意味があるのか、その小さな円盾を構えながら、セイバーは上条に避難を促す。

上条は驚いた。今、現在進行形であれ程危険な目に合ってるにも関わらず、目の前の『騎士』は自分の身を案じてくれている事に……。

「うッ……ぐ……ぐうう………！！」

両手を使って盾を支えても尚、苦悶の声を上げるセイバー。
インケンティウス

炎の巨人は主の命通りに言われた『標的』を押し潰そうとその爆炎を纏った両手でセイバーを押さえ込もうとしている……。

視覚だけでも十分に伝わってくるこの炎の熱気……。あの甲冑ではきつと中はサウナ状態に違いないのに、それにも関わらず、セイバーは膝を付かない！

背後の上条マスター当麻を守る様に……………

——彼は正しく、『盾』になっていたのだ——

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

セイバーは咆哮と共に巨人の手を払い除け、盾の体当たりで炎のインケン

巨人を階段の上へ向けてガンツと押し込める――！

「マスター！ お早く！！」

そう言い残して、セイバーは視界から消えていった……。

焼け焦げた臭いが鼻に突くこの場に残り残された上条は、一先ずは安堵の息をつくが、すぐに自分のすべき事を探し出す。

「と、とにかく……何処かに通報を……！」

アンチスキル

ジャッジメント

警備員か風紀委員が来てくれれば、きっと何とかなる……切羽詰った状況が続く、今の今まで出てこなかった、そんな一般的な考えを浮かべ、上条はポケットのケータイを探る。

「つて、クソッ！！」

だが、ようやく探り当てたケータイは今朝の一件で壊れてしまっていた事を思い出し、上条はイラつきをぶつける様にそのケータイを投げ捨てる。

「じゃあ、公衆電話を……」

思い浮かんだ次案を実行する為、上条は廊下の手摺を持って立ち上がる……

「……………」

だが、上条は――、

「(……逃げる為じゃない……………逃げる為じゃ……………！)」

『私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる?』

悲壮な暗喩で、上条を危険から遠ざけようとした純白の少女……
インデックス

『早く逃げて下さい! マスター!!』

出会ったばかりにも関わらず、上条を主と仰ぎ、そして主の為に
セイバー
戦う白銀の騎士……

出会って間もない彼等の姿が、声が、言葉が、上条の脳裏を掠めていく――

「……………ッ!」

たった一日での出会い全てが、今この時、上条当麻を試している……。

自称『フォックスワード偽善使い』の上条が、この後にどのような行動を起こすのか――

二人を見捨てて逃げるのか――、二人を助けに戻るのか――

――やがて、

「(出会ったばかりの赤の他人と……一緒に地獄へ堕ちようなんて……………!)」

—— 考えられつかよ……!!

寮の手摺りを掴む上条の握力が、自然と強くなった

業火く聖盾（後書き）

アニメと似た様な展開でつまらないと思う方もおられると思いますが、何卒応援宜しくお願いします

現実（前書き）

はい、こんばんは！

割りときりの良い所まで書けたので投稿します！

少しでも楽しんで頂けたら幸いです

現実

白い修道服を血に染めた、小さな少女、

それを俯瞰するステイルⅡマグヌス、

その双眸に込められた想いは、

『哀』か、それとも『愛』か

業火の旋律。それは長年付き添って来た相棒の帰還だと、ステイルはすぐに分かった……。

眼下の少女を視界から外し、背後にゆっくりと身体を向ける……。まるで、誰が来るのかを分かっていたかの様に――、

「……………流石は『セイバー』のサーヴァント……………『イノケンテ魔女狩りの王』でその程度のダメージとはね……………」

「フウ……………」

階段周辺に広がる炎の海から歩いて来るのは白銀の騎士――

自らを『セイバー』と名乗る者だった。鏡の様な輝きを持っていた銀の甲冑は、熱気によって鈍い虹色に変色し、煤で黒く染まっている箇所さえある。

普通ならば甲冑の中は既にサウナ状態で、常人ならばいつ倒れても可笑しくない筈だが、『騎士』は息一つ乱さず、膝を折る様子も

無い――、

1本の剣、或いは1枚の盾を思わせるその佇まいを崩さないのだ

それをさも当然、予想済みと言った面持ちで彼を迎えるステイルは、十指全てに指輪を嵌めた両手を広げてその健闘を讃える。

「……………貴方も……………よもやこれ程の大魔術が使えるとは……………驚きです……………」

よもや自己再生する魔術とは……………と、セイバーもまた、尻餅のついた『魔女狩りの王』^{インケンティウス}の業火を見遣りながら、ステイルの魔術の腕を素直に賞賛する。

「お褒めに預かり恐悦至極……………って、それを相手にして全く息を切らさない君に言われてもねえ……………もう少し位はダメージを与えたかったんだが……………」

君には『少し』過ぎたかな……………と、ステイルが自嘲気味に嗤うと

「■■■■■■~~~~~!!!!!!」

「!」

それを合図とした様に、何時の間にか起き上がっていた『魔女狩りの王』^{インケンティウス}が炎の十字槌をセイバー目掛けて振り下ろしてきた。

即座に動いたセイバーは円盾を構えて対抗する。^{バックラー}

から見て反対側、奥の廊下へと押し込められてしまう……。それは炎によって塞がれていた階段とエレベーターへの道が開通した事を意味していた。

「退路確保、と……『イノケンティウス魔女狩りの王』、そのまま現状維持だ……」

炎の従者にそう命じたステイルは背を向け、インデックスの元に歩み寄る……。

「くッ……逃げるのか!!」

『イノケンティウス魔女狩りの王』の十字槌を防ぎながら、セイバーはステイルの背に向けて叫ぶ……。それにステイルは歩みを止め、流し目に背後のセイバーを見つめる……。

「戦略的撤退、と言って欲しいね……元より目的は『戦闘』じゃないし、聞けば『サーヴァント』ってのは、『魔術師』所か現代の間では歯が立たないって聞いた事があるからね。」

現に僕の『イノケンティウス魔女狩りの王』も君を抑え込むのが限界みたいだし、と自嘲する様に付け加えるステイル……。

「そう言われてるヤツをマトモに相手するのは、余程の馬鹿でも無い限りやろうとは思わないさ……ああ、あの少年ならやりそうだな……」

「……………何だと?」

『騎士』にとって聞き捨てならない事が聞こえた気がした……。

「君を召喚したあの少年がそんな強大な敵に対して愚直に立ち向かう『馬鹿』って言ったのさ……。魔術デイスベルの無効化には驚いたけど、出来るのはそれだけ……。たったそれだけの実力で……」

「……貴方の足元の白い子を手助けしようとした、ですか……」

何だ、気付いてたのか……とステイルは毒突くが、そんな嫌味などセイバーの耳には入らない――

セイバーはステイルの足元に倒れ伏す少女を見遣る――

「……遠目からでも分かる酷い傷だ……早く処置しないと取り返しの付かない事になる……！ 魔術師メイガス、貴方もその位分かるでしょう！」

橙色の熱気の間からステイルに訴えかけるセイバーだが、ステイルは意に介した様子も無く――、

「……君もややこしい時に召喚されたモノだね……ま、ある意味君のおかげで余計な殺生はしなくて済んだ訳だから、一応感謝しておこうかな……」

そう言ってステイルは向き直り、『回収』の為、インデックスの元へと歩を進める……。

「くッ……待てッ、魔術師メイガス……！」

バックラー
円盾を押し出す力を増幅させるセイバー……だが、その圧倒的な

力を全て『守り』に回した『魔女狩りの王』の壁は厚く、拮抗を常に約束する――

この炎の巨人は元より『騎士』を倒す気など毛頭無い……。

自分の主人が目的のモノを持ち去れば、それで『勝ち』だからだ

「く……ううウウウウ………!!」

相対する『剣の騎士』^{セイバー}が幾ら力を入れても、敵の『勝ち』は揺るがない――

それが当然という様に立ちはだかる壁は、とてつもなく厚い――^{あつ}

ステイルが一步一步、白い少女インデックスに近づいて行く――

彼の足音がカウントダウンをゆつくりと刻んでいく――
此方に目もくれないステイルの言葉が飛んでくる――

「抵抗するのは構わないけど、いくら碌に効かないとはいえ、君だつて僕の『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}を破れる訳じゃない……、あの少年にも出来る訳無いし、何より彼女も救えない………」^{インデックス}

それが、世界の絶対的摂理………

「それが、『現実』ってヤツさ………『剣の騎士』………」

だが――、

「ッ！ ……………それなら僕は――！」

その現実^{げんじつ}を斬り裂いてみせる!!!!!!

セイバーは初めて、『剣』に手を掛けた

「ん？」

歩を進めるステイルを呼び止めたのは、一瞬……、ほんの一瞬の風切り音だった。

背後に聞こえたソレは、自分の従える炎の巨人の向こう側から……。

|

|

|

|

何故だ

何故、震えている

根拠の分からない鳥肌がステイルの身体を覆っていく

炎の魔術師ステイルの全身が、寒気に支配されていくのを感じる

地獄の業火が、極寒地獄コキュートスに放り込まれた様に鎮まっていく

何故だ

後ろには『魔女狩りの王』インケンティウスが居るというのに、自分の使うルーン魔術の中でも指折りの魔術が『騎士』を抑えているというのに

何故、震えている？

『安堵感』を一刀の元に両断された様な『危機感』が、ステイルの全身を駆け上がる

何だ、コレは

その気配の源は背後　振り向くな　ステイルは恐る
恐る　振り向くな　額からの汗も拭わず

振り向くな！

それを目撃みた！

「魔術師^{メイガス}……見事な大魔術でした……」

そこには、左腕に白き円盾^{バックラー}、右手に三つ編みの下緒を下げた片手剣を携えた『剣の騎士^{セイバー}』と――、

「■■■■~~~~~~~~ッ!!!!!!」

断末魔を上げながら、火の粉へと崩れ落ちる『魔女狩りの王^{イノケンティウス}』の両断された肉片だった――

「……………イノケン……ティウス……?」

ステイルは目の前の現実を疑う。

受け入れ難い現実――

その双眸が見据える先に在るのは、ルーンが存在する限り、何度でも蘇る筈の炎の巨人が、火の粉となって消え逝く姿だったのだから――

「イノケンティウス……その名の記憶を約束します……。平均的な魔術師や騎士なら相手にもならなかったでしょうね……」

でも……………と、セイバーは言葉を繋げる――

「そんな現実^{げんじつ}を斬り裂くのが、僕達サーヴァント……………『靈長の英霊』なんですよ!」

――剣を向け、英霊は『世界』に叫んだ――

現実（後書き）

今回の決め台詞は勿論、当麻の台詞と対になる様に考えました……
安いでしょかね？

逆転く逆転（前書き）

ようやくステイル戦終了くくく……

想定していたよりずっと仰々しくなっていました
すみません……

逆転く逆転

1

「『霊長の………英霊』だと……!?!」

ステイルにとって、本日何度目になるか分からない驚愕

「うん? ……知らないんですか魔術師……?」
メイガス

セイバーは意外とでも言う様な顔でステイルに訊ねる。

「有り得ない! 幾ら何でも有り得ない!! 魔術が『異世界の法則』を世界に適用させる術だからって、言うに事欠いて『英霊』だと!?!?」

顔に手を当て、ステイルは声を荒げる。

「魔術師じゃなくても分かる! 万人からの偶像崇拜、信仰等によって高い霊格を得た英雄達の霊……『英霊』……神話、伝説、寓話、歴史………出所は沢山あるが、その何れもが『人』を凌駕する最高位の存在……!?!」

それは最早『精霊』に近い……!

「そんな霊達が『従者』サーヴァントの正体だと!?! ハッターリをカマすにしたって、もっとマシな嘘をつけ!?!」

ステイルは信じようとしな……。

当然だ……元より“従者”の意味を持つ『サーヴァント』は、ただでさえ『魔術』の世界でもその存在の真偽が定かで無かった概念……それを目前にしたステイルにとっては既に過去形だが……

「そんなモノサーヴァントの正体が、人類における最高存在たる『英霊』だと……もし本当なら、それは『死者の蘇生』に他ならないし、そんな高位の霊とされる眼前の『騎士』が何故あんな少年を『主人』マスター呼ぶのか、あまりにも不可解だ……!!

推論を考察しながら無意識下でジリジリと後ずさるステイル……。

「……ウン……、どうやら今回は少し特殊な様だ……」

一方で、顎に左手を当て、何かをウンウンと考える仕草を見せるセイバー……。

暫くして思考が終了したのか、左手を離し、ステイルに問い掛ける……。

「メイガス魔術師……貴方、『聖杯』について何処まで知っていますか？」

「何?!」

全くこの場に関係が見られない唐突な質問にステイルは困惑する。

「『聖杯』っていったら十字教における最後の晩餐で使われた杯、或いは神の子の血を浴びた『ヨセフの聖杯』の事だろう……ある程

度知識のある者なら信仰の薄くても知っている、常識の範疇だ……！
それとこれの何処に関……係……が……あ………！」

関係があるんだ！？と言おうとして、ステイルの語尾が小さくな
っていく……。

「……………まさか……、『聖杯は偏在する』っていうのか……本当
に……！！？」

思い当たった解の真偽を投げ掛けるステイル——
但し、セイバーは望む回答を得られず残念だという様な顔をして

「……………成る程……、知っているのはそれだけですか……？」

「え……？」

「……………もしそうなら、もう質問する事はありません……元より貴方
は『マスター』の敵だ……」

構えた剣を振り下ろし、空を斬るセイバー……。

「……………終わりだ魔術師……メイガス。貴方の言う『馬鹿』の力、主に代わり、
振るわせて貰う……！！」

――殺意が、歩き出した――

マズイ、マズイマズイマズイ――！

冷や汗が止まらない――！

『敵』が真っ直ぐ自分を見据えてくる――！

一步一步、地面を踏み締める様に――！

『命^{ッレ}の刻限』が迫ってくる――！

「い、いのけんていうす……どうした、イノケンティウス魔女狩りの王！？」

『世界』に向けて呼び掛けるステイルの声は虚しく反響するだけ……。

自らが頼りとするあの炎の巨人は現れない……。

「イノケンティウスなる魔術なら、今し方僕が斬り裂いたのを見たでしょう……。アレはもう現れない――」

歩く殺意が口を開く――

「馬鹿な！ イノケンティウス 魔女狩りの王は摂氏3000度を超える炎の巨人！
加えて僕のルーンが生きている限り、何度でも蘇る筈だ！！？」
一

体何をしたんだ！？ お前！！」

「その魔術の現実を、斬り裂いただけですよ……………」

風に揺れる三つ編みの下緒を伴ったその剣の穂先を、セイバーはステイルに向けたまま端的に答えた……。

死の気配がゆっくり歩み寄ってくる——此方に辿り着くまで、あと数歩——、

それまでの時間を泡沫でも稼ぐ為か、ステイルは後ずさって行く

その僅かにも劣る時間の中で、ステイルは尚も反撃の手立てを探っている——

『魔女狩りの王』は倒され、確保した退路は『騎士』の居る前方

極めつけは踵に当たる白い少女の存在——

「(クソッ！ 進退窮まる……………か……………！)」

足元の彼女を回収する——ただそれだけの任務の筈が、なんだこの状況は……………？

自分がこんな所で、命が取られるのを待つしかないでいる、だと……………？！

何の冗談だ、何の諧謔だ、何の悪夢なんだ、コレは！！

「くっ！
——灰は灰に、塵は塵に——『吸血殺しの紅十字』！！」

苦し紛れに唱えるのは、2本の炎剣より放たれる交叉する炎撃の魔術——

ステイルⅡマグヌスの得意とする魔術『ルーン』……それは戦場に張り巡らした神秘の文字を『力の源』とし、魔術を行使する魔術である。

『魔女狩りの王』に限らず、ステイルの使う魔術の殆どはこの『ルーン』の存在が必要不可欠だ……故にこの『ルーン』が無くなれば、『魔女狩りの王』はおろか他の魔術ですら、ステイルは使えなくなってしまう——

だからこそ——、

「！！？ ツ出た！！」

『世界』が応えた事に驚きを隠せなかった……。

「フッ！！」

轟、という音を立てて迫るその炎撃を『騎士』は焦る様子も無く、左腕の盾で薙ぐ様に『対魔力』で無効化する。

「……………」

その光景を目の当たりにして、ステイルの瞳は絶望に染まって……いなかった……。

目の前には火の粉を払い終えた『騎士』が悠々と歩いて来る……

ステイルに『死』を届ける為にエレベーターの前に差し掛かろうと
している……。

にも関わらず――、

その目は、僅かな希望の光を見出した様に見開いており、先刻ま
で瞳を支配していた怯えの色は消えていた。

「――ハアアッ！！」

そのステイルは再び炎の魔術を投擲する……。
但し、標的は『騎士』では無く――、

「なッ!？」

『騎士』の頭上の『天井』だった――！

幸か不幸か、スプリングラーにもかすらなかったその炎撃は、ズ
ウウウ……ンという音と共に崩れ、その瓦礫が『騎士』に向けて災
厄の様に降り掛かる！

「ぐッ！ 効かぬと悟って目眩ましか！ 小癩な手を！」

頭上の瓦礫を防ぐには小さ過ぎる円盾バックラーで頭を守りながら、セイバ
ーはその場から飛び退く。

コンクリートの飛礫が雨霰と降り注ぎ、副次的に巻き起こる塵や
埃で、セイバーは視界と甲冑の輝きを曇らせる。

やがて、瓦礫が収まり始め、塵や埃も治まり始めた頃に――、

「魔女狩りの王！……！」
イノケンティウス

「■■■■■■~~~~~！！！」

轟炎と再会した

2

「■■■■■■~~~~~！！！」

崩れ落ちた瓦礫を吹き飛ばし、現れたのは、今し方セイバーが斬り倒した筈の炎の巨人、『魔女狩りの王』……。

セイバーはそれに驚く様子も無く、飽く迄冷静にソレに目を向けていた……。

「……危ない危ない……危うく踊らされる所だった……」

巨人の影に控えたスタイルが、顔の汗を拭いながらソレに続く様に顔を出す。彼の口調は、既に難を逃れた後の様に元の冷静さを取り戻していた。

「……正直な話、『魔女狩りの王』イノケンティウスがやられたのに気が動転してしまったが、よくよく考えたら僕のルーンが死んだ訳じゃなかったんだ……」

だったら一から呪文を唱え直せば良いと、掌の炎を握り潰しながら、ステイルは言葉を紡ぐ。

「……………瓦礫は、僕との距離を作り、呪文を唱え直す時間稼ぎ……」

「そういう事。……………しかし……」

ステイルは怪訝な表情で、セイバーに視線を向ける。

「……………君は一体どうやってルーンの生きたままの『イノケンティウス魔女狩りの王』を葬った？ その剣は海をも断つ『モーセ』関連の霊装か何かなのかい……………」

そう、『イノケンティウス魔女狩りの王』はステイルが辺りに刻まれたルーンを消し去らない限り、何度でも再生する大魔術だ。

——例えるなら、『湖面に浮かぶ月』。それを消し去るには『月』そのものを堕とさなければならぬのだ。

にも関わらず、セイバーは斬り伏せてみせた……。彼は信じられない事に、本当に『湖面に浮かぶ月』を斬り裂いてみせた。それは普通では有り得ない事の筈だった……。

「……………申し訳ありませんが、此方の諸事情で黙秘させて頂きます……………」

しかし、そのカラクリを話す気はセイバーには勿論無かった……。

「そりゃ残念……………ま、何だって良いか……。さて、と……………」

ステイルの両掌に橙色の光が収束していく……。

「第2ラウンドと行こうか、セイバー……君にはもう何もさせない……」

ステイルの言葉にはもう、慢心も油断も消えていた……。

飄々とした態度はナリを潜め、眼光をセイバーに向けてギラリと光らせ、彼を守護する様に聳え立つ『魔女狩りの王』インケンティウスもまた、何時でもセイバーに向かって動ける体勢となる……。

視線が交錯する。

片や、『最強』の炎の巨人を従えた炎の魔術師
片や、その業火を一度は斬り裂いてみせた剣の騎士

互いに互いの力を見た両者は、エレベーターを挟んで、互いが互いの挙動一つ見逃すまいと睨み合う

その血闘の場は『通路』——一次元的に直進するこの場では、動き出しても『進む』か『退く』かしか出来ない

だが、当然両者に『退く』等という選択肢を取る気等無い

「(……………魔術師メイガスも本気か……………ならば……………!)」

剣を構えるセイバーは決意する——! 己もまた、本気で相手になる決意を——!

……彼は剣先をステイルから外さず、その空いた左手を、ステイルに悟られぬ様、ゆっくりと——

自分の腰のもう一振りの剣を手——

ジリリリリリリリリリリ
ザアアアアアアアア………

「「!」?」

………しようとした所で『嵐』が降り注ぐ――

「コレは……?」

「スプリンクラー……だど?」

甲高い警報と共に、寮内のスプリンクラーが一斉に起動する。

二人の頭は人工の雨によって途端に冷やされ、摂氏3000度の炎の塊である『魔女狩りの王』イノケンテイウスからはシュウシュウと、蒸発して水蒸気と化した雨が雲の様に立ち込める――

「コレは……一体!」?

「……『魔女狩りの王』イノケンテイウスじゃない……。元よりコイツには火災報知

器には手を出さない様に命令文を書いてある……!」

———という事は………、二人が顔を見合わせると同時に———

チーーーーーン

エレベーターからの乱入者がそれを遮った

「な?! マスター!!?」

ツンツンに逆立った黒髪を濡らした、夏用学生服に身を包んだ少年——『上条当麻』がそこには居た

上条はセイバーに背を向け、ステイルの方に近づく……。傍に控える『魔女狩りの王』に臆する様子も無く

そんな上条にステイルは疑る様に口を開く

「……再び戻ってくるとはね……『サーヴァント』が盾になってる間に逃げるとばかり思っていたが……」

どういう風の吹き回しかな……と、ステイルは訊ねると同時に上条は「まったく、参ったぜ……」と言って、額に手を当てる

「アンタ凄エよ……人の寮のあちこちに目一杯『ルーン』（こんなモン）ベタベタ貼り付けやがって……」

そう言って上条はポケットからその内の何枚かを地面に投げ捨て

る

「！ 僕と『魔女狩りの王』イノケンティウスの相手をサーヴァントにさせて、お前は『ルーン』を剥がす為にスプリンクラーを！？」

「ああ、つかまあ、アイツが引き付けてくれたおかげで俺は落ちて着いて動けた訳なんだけど……」

背中越しにセイバーを見遣る上条は、サンキュな。と、手を振って彼に謝辞を示す。

セイバーは騎士の様に胸に手を当て、折り目正しく返礼する

「……は、はは……ハハハハハハ！！成る程成る程、凄いよ君！ 戦闘にかけては天性のモノがあるかもね！！！」

狂った様に笑うステイルは上条を誉めるが、その語尾に「……」と続ける

「■■■■~~~~~ッ！！！」

脇に控える『魔女狩りの王』イノケンティウスもまた、狂った様に叫ぶ
「……………『ルーン』を力の源とするその炎の巨人はまだ息絶えてなかった！

「！ 何故ッ！？」

「コピー用紙はトイレトペーパーみたく水に溶け易くは無いんだよ……………経験が足らなかったね…………」

セイバーの驚愕にはステイルが答えた。

見れば、上条が捨てた『ルーン』のコピー用紙も十分濡れているにも関わらず、未だ形を保っている……。

「マスター！ お下がりでさ「大丈夫だって」え？」

前に出て自分を庇おうとするセイバーを手で制する上条。その上条に身体が反応したセイバーは駆け出しかけた両足を止める。

「何が『大丈夫』なんだか……。予定とは違うが、まあいい………」

『殺せ』

「■■■■~~~~~!!!!」

「マスト……！」

片や主人の危機

片や主人の命令

動機の異なる従者はその目的を果たす為

セイバーは手を伸ばし、
インケンティウス
炎の巨人は拳を振り下ろす、

……三者の位置関係も手伝って、
インケンティウス
炎の巨人の方が速かった

目の前に広がるのは、上条が業火に焼かれ、炭になるか蒸発するか――

この場に居る者は皆、そんな光景しか思い浮かばなかった――

が――

「邪魔だ！」

その『右手』の一振りで、上条は巨人を払う……。

「■■■■~~~~~………」

悲痛な断末魔と共に『魔女狩りの王』イノケンティウスが掻き消える……。

この『世界』から――永遠に――

「なッ!？」 「にイツ!？」

驚愕しないのは渦中の上条本人だけだった――

「バカなッ!？ 何故だ、僕の『ルーン』はまだ生きも「インクは?」!?!?」

従者の喪失に動揺を隠せないステイル……………。
その理由を裏付けるのもまた、上条であった――

「コピー用紙は破れなくても、水に濡れりやインクは落ちちまうんじゃないねえか……？」

その言葉にハッとなって、セイバーはさっきのコピー用紙に視線を移す……。

「（……確かに破れていない……けど……）」

そこにはもう『ルーン』は存在していなかった。
代わりにあったのは、何かを書いてあった痕跡にしかない様な黒い滲みだけだった――

「（この短い時間でこの魔術師の『ルーン』^{メイガス}全てを処理する手立てを………?!）」

セイバーは自分の主の手腕に驚嘆する――そして昂揚した――

自分のマスターが素手で『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}を掻き消したのにも驚いたが、彼が今見せたその『戦いの手腕』にも驚いた――
それに何より、目の前の強大な敵という『恐怖』から逃げず、そしてそれに打つ勝ってみせたその後ろ姿が――

とても眩しく見えたのだ――

「い、いのけんていうす………イノケンティウス!!」

ステイルはうろたえるしかない。
目の前の受け入れ難い現実を拒む様に―― または縋るモノを――

無くした子供の様に――

――しかし『世界』は応えない……。

セイバーの時とは違う。出し得る手段を完封され、今度こそステイルの勝機は失われたのだ――

「……マスター、如何致いかしますか？ お望みであれば、あの魔術師メイガスは僕の手で……」

当麻の近くに寄り添うセイバーはその手の剣を構えて言うが、当麻は首を振って――

「いんや……、その代わり、俺の手でぶっ飛ばすから、手、出さないでくれよ……」

「御意」

そう短く応えたセイバーは剣を鞘に納め、後ろに下がる――それを確認するや否や、上条は目の前のムカつく奴に向けて駆け出す――！

「ヒッ！！――灰は灰に――塵は塵に――……」

苦し紛れのステイルの詠唱……………。

「吸血殺しの……紅……十字……！」

しかし、中身の失った、ただの言葉と化したソレに『世界』が応

える筈も無い……………

「(……………ちつくしょう……………そうだよな……………)」

一方、少年の顔に迷いは皆無だ――

目の前のムカつく奴だけを見据えて、真っ直ぐ直進し――、

「(地獄の底まで付いて行きたくなけりや……………!)」

倒れ伏す少女の為に握られた『右拳』は――、

「(地獄の底から――引き摺り上げてやるしか……………!!)」

――無えよなっつつつつつ……!!

確かにステイルの顔を捉えた――

逆転く逆転（後書き）

セイバーが戦い、上条サンが弱点を突き、
そして最後はどちらかがシメる！

サーヴァントで戦う際のセオリーっぽい流れにしてみました
が、如何でしたでしょうか？

天秤（前書き）

遅ればせながら更新です！
といっても今回は内容が薄いです……どうかご容赦下さい……

天秤

学生寮が燃える……

消防車の甲高い音源が赤く輝く中……

駆け付けた警備員が消火・救助活動に当たっている……
アンチスキル

今は夏休みだ……寮に残っている学生は少ないだろうが、それでも安心出来ないのが見て取れる……

そんな光景を心配そうに見つめる人混みに……
おもしろ半分

『御坂 美琴』は居た

「お姉様~~~~~V」

そんな彼女は、背後からの黄色い声にピクリと反応する。

別段それが珍しかった訳じゃない。驚いた訳でも無い。自分に向けてられた声なのか？と思った訳でも無い。

何故なら自分は、そんな背後からの声色にも台詞にも（身に染みて）聞き覚えがあったのだから。

「まあお姉様Vまあまあお姉様VVV」

その声の主たる少女は美琴の腕にさも当然の様にしがみ付いてい

き、彼女を「お姉様vお姉様v」と呼んで、子猫もビックリする程じゃれてくる……。

「補習なんて似合わない事をしてると思ったら、夜遊びの口実でしたのねv」

「……………ねえ黒子……何処をどう見たらこの私が夜遊びしてる様に見える訳…………」

自分の腕にしがみ付く少女……『白井 黒子』に半眼になりながらも美琴は声を抑えて訊ねる。

学校の寮でも彼女と相部屋（黒子の押しかけ）な美琴にとって、この黒子のスキンシップは日常茶飯事なのだが、それでもウンザリな事この上無かった……

質問された当の黒子は自信有り気に――

「？ 決まっています。こんな場所を通って学校から寮に戻るの、どう考えても遠回りですもの」

「うっ…………」

意外に的を射た推論に美琴は息を詰まらせる。

「ちょ、ちょっと用事があったのよ…………それよりアンタこそどうしてココに…………あ！」

門限を破った子供の様な言い訳でお茶を濁す美琴だが、黒子の右腕の腕章が目に入り、その意味をすぐに理解する。

五角の盾の意匠の入った緑色の腕章――学園都市の『風紀委員^{セント}』の証である……。

「そうですわお姉様……。私、『風紀委員^{ジャッジメント}』のお仕事でココに来ましたの」

黒子は美琴から腕を外さぬまま、真摯な口調で自分の事情を話す。

「……あの寮の出火の原因、どうやら能力者の仕業らしいですわよ……」

夜空に向かって昇る黒煙は、空のキャンパスを濁す調和しない色彩でしかないが、それを見つめる者は多い……。

あまりの惨状に嘆く者、物珍しげに写メを撮る者、たまたま通り掛かって通り過ぎる者、それは様々だ――

「ふーん、物騒なモノね……」

そんな美琴達もその中の一人である。

だが、それは始まりの狼煙でしかなく、物語は別の所で――

「マスター、ココで宜しいですか？」

「ああ、一先ずソコで……」

サイレンのドップラー効果が耳に残るが、学生寮から少しばかり

離れた場所に上条達は居た――

「よいしょ……と」

インデックスを抱えたセイバーは彼女を街路樹近くのベンチに座らせると、上条が彼女の顔を覗き込む様にしゃがみ込む。

インデックスの眼は、未だ閉じたまま……その顔色は死に化粧をする前の遺体の様に蒼い……

「？ マスター、その白布は？」

上条の右手に握られたフードに目が入り、セイバーは訊ねる……。

「ああ、コイツのだよ……さっきの奴はコレの魔力を辿って来たんだ……」

「辿って……ああ成る程、確かにそんな代物を放置しておけば誰かの手に渡って、その人が危険に晒されないとも限らない……ですが、持って来たら僕達の方も……」

「その辺は大丈夫だよ……」

俺が『右手』で触れた時点で……と力無く付け加え、インデックスを見遣る。その顔に勿論変化は無い……。相変わらずの顔面蒼白だ……。

セイバーは上条の言った意味が分からず、今だに疑問符を頭上に浮かべるが、上条の気持ちを察し、それ以上の追求はしなかった……。

「……けど、どうすっかな……。コイツ、ココのID持って無さそ

うだし……入院なんかしたら、あつという間に情報が……」

何より治療中、手術中に攻めて来られたら、とても対処出来ない……上条がそう考えていた所に脇に控えるセイバーが割って入ってくる。

「マスター、入院による情報漏洩を気にしているのであればご安心を……僕が命に代えてもマスターの伴侶殿を守って御覧にいます！」

……先程まで一緒に戦ってくれた『剣の騎士』のその言葉は、とても頼もしいものだった――

いくら『異能の力』を退けられる『幻想殺し』イマジンプレイカーを持っていたても、上条当麻という少年はただの高校生――力には限界がある……そんな上条にとって、孤立無援なこの状況の中、先程の様に力を貸してくれる存在が居るという事は何よりの救いだった――

――が、

「ああ、ありがとよ、けどそういう問題じゃ………って、伴侶！？！？！？」

「え？ 違うんですか？ てっきり僕はマスターの伴侶殿が魔術師メイガスの暴漢に襲われていたとばかり………」

「学園都市のIDが無いと話にならない」と言いかけた上条だが、首を傾げるセイバーの言葉に思考回路が冷や水をぶっ掛けられた様に熱暴走シヨートし出し、言おうとした言葉を忘却の海に取りこぼしてしまっただ……。

「い、いやいやいや、伴侶だったって俺等、まだ今朝会ったばかりだし……そ、そりゃ色々トラブルあって……み、短いけど……、かなり濃い出会いを……」

「???」

ボソボソと言葉が覚束無い上条と背丈の変わらないセイバーが、兜ではなく疑問の重さに首を傾げる……。

小動物を思わせるその仕草は、騎士甲冑の上からでもある種の愛らしさすら感じられた……。

「……ってそれはどうでも良くて！　今はコイツの傷をn「……とうま？」！！」

顔を赤くして脱線しかけた会話の線路を戻そうとする上条だが、その力無いか細い声がどんな大声よりも鼓膜を突き、セイバーと共にその方向に振り返る。

「……………どうかした？　顔色悪いよ……」

自身が蒼褪めて尚も当麻の心配をするインデックス……。そんな自分を省みない彼女に上条は声を荒げる。

「人の心配してる場合か！　早く傷を……！！」

「……………大丈夫……だよ。とり……あえず……血を止めさえ……すれば……何……と……か……」

辛そうな笑顔を作り、気丈に振る舞うインデックスだが、語尾に

近づくに連れ、体力を放出するかの様に音量が小さくなっていく……

「お、おい！」

「おっと！」

……自身も支える体力も使ったのか、弱り切ったインデックスが倒れそうになるのをセイバーが素早く対応して支える。

「ん……鎧……？ ……それに凄い魔力……」

先程、高温の炎に当てられても尚、変型しなかったセイバーの甲冑は既に冷え切っており、その冷たさが、寄り添うインデックスの重い瞼を持ち上げる。

その虚ろな双眸がセイバーを捉え、インデックスはそれをジッと見つめる……。

その白銀の騎士の姿は、感じ取った人の身では有り得ない魔力量と相俟って、インデックスでさえ一瞬、『天使』では無いかと誤認させる程美しいものだった……。

「御氣を確かに！ 伴侶殿！ 「だから違え！！」」

「……この感じ……ああ、『サーヴァント』……召喚……出来たんだ……」

それは、死に逝く者が大事をやり遂げた際に見せる笑顔に似ていた……。

少なくとも、上条の目にはそう映った……それによって焦燥感を助長されつつ、上条はインデックスの頬に手を当て、微かな体温を感じながら一抹の希望を求める……。

「お、おいインデックス！ お前の持つてる10万3000冊の中に、傷を治す様なモンは無えのかよ！？」

「ある……………けど、君には…………無理…………」

藁にも縋る思いで飛び付いたオカルトに、一瞬希望を掴んだ様に感じた上条だが、インデックスの蒼い唇が紡ぐ言葉に絶句する…………。

「仮に私が術式を教えて…………、君が完璧に真似した所で…………君の力が…………きつと邪魔をする…………」

上条の力

退魔の右手『幻想殺し』
イマジンプレイカー

それは『異能の力』であれば、どんな物でも無効化出来る力…………しかし、逆に言えば、それが傷を治す魔術という『異能』すらも打ち消すというのか…………

目の前にある方法ですらも打ち消すというのか…………！

「ッ…………くそ！ またかよ！ またこの『右手』が悪いのかよ！！」

「マスター…………」

悔しさのあまり、『右手』を握りながら身体を震わす上条に、セイバーは同情の視線を送る事しか出来なかった…………。

自分にある唯一の力が、目の前の瀕死の少女の治療を妨げる要因となっていると思えば、上条で無くとも責任に押し潰されそうになる物だ…………。

だが、インデックスはそれを庇う様に言葉を続けた…………

「…………君の『右手』が悪いんじゃないくて…………『超能力』っていうの

が、もうダメなの……」

「「？」」

——そもそも『魔術』っていうのは、『超能力者^{キミたち}』みたいに『才能の有る人間』が使える様には出来ていないんだよ……。

『才能の無い人間』が、それでも『才能の有る人間』と同じ事がしたいから生まれたのが……『魔術』……。

そもそも使う『身体の回路』がお互いに違うから……『魔術師』は『超能力』を使えないし、『超能力者』は『魔術』を使えない……。無理に使おうとすれば、それぞれ専用の『回路』は焼き切れて、結果は明白……

『魔術』と『超能力』は相容れない……。……。インデックスは明確にそう言ったのだ……。

「じゃあ、能力開発を受けているこの学園の生徒には……。！」

「うん……。『魔術』は……。ダメ……」

インデックスの弱々しい声が、希望を砕く……。

「くそッ!!」と両拳を地面に叩き付ける上条……。そこに――

「……。……。話の意図はよく分かりませんが……。……。この街の住民は皆『魔術回路』を潰しているって事ですか??」

首を左右に傾げて疑問を述べる、ずっと沈黙を守っていたセイバ
！……。

「ああ、そうだよ……。この『学園都市』の生徒は皆『能力開発』の

為に色々やらかしてる!!」

薬の投与に電極による脳への刺激、『超能力』を開発する為なら何だってやる!! 『身体を作り変えてる』のと同じなんだ!!」

自分に置かれた現状に打ちひしがれる上条は、セイバーの質問に乱暴に答えるが――

「……でしたら僕が!」 「!」

「僕はその『のりよくかいほつ』とやらは受けた事すら無いです! 『魔術回路』にも少しは自信があります! 僕なら彼女の魔術を「ダメ……」え!」

セイバーの提案に再び希望が差し込めるのを感じた上条だが、またもインデックスが言葉を遮る……。

「……『サーヴァント』っていうのは、この世に現出する為に『魔力』は必要な物……君の魔力は凄いけど、それを私の治療に使ったら……今度は、君の身が……危ない……」

「なっ!? そうなのかよオイ!?」

「……………はい……。ですが、コレしか方法が無いのでしたら、マスター……、僕は甘んじてその大役を果たす所存です!」

兜の格子越しのセイバーの双眸が、真摯に上条を見つめてくる……

「ッそんなのダメだ! アンタ……「ではマスター……他に方法は……………」うッ……………!」

「……真に申し訳ありませんが、今の僕では、これ以上の方法は思
い付きません……ですが、どんな命令でも、僕は喜んで貴方に従い
ます！ ……………どうか、彼女の命の為、御熟考の上、御決断を！」

そういつてセイバーはインデックスを支えたまま頭（こうべ）を垂れ、事の
全権を上条に委ねる……。

責任の放棄とも取れるが、決してそうでは無い……セイバーでは
本当にこれ以上の上策は提案出来ないのだ……それが我が身を犠牲
にする様な行為であっても……それを臆する事無く「こ……う……い……う……選……択……
に躊躇わないでくれ」と、自分のマスターに訴え掛けて来たのだ……。

まるでそれが『人を助ける事』だという様に……。

この瞬間、上条は2人の命を預かった事となる

血の気が抜け、意識を保つのがやっとな女の子『インデックス』

その彼女を救う為なら命も投げ出すと言って憚らない剣の騎士『
セイバー』

一介の高校生が背負うには、あまりにも重過ぎる2つの命

『インデックス』を助けようとするれば『セイバー』が死に

『セイバー』の言う事を聞かなければ『インデックス』が死ぬ――

正直な話、上条は未だ信じられないでいる……。『魔術』の事、10万3000冊の『魔導書』の事、目の前の『サーヴァント』の事……。何もかも展開が速過ぎて、上条の脳の処理速度がついていかない……。だが、これだけは上条にも分かった……。

二つに一つ――、二者択一――、命の天秤――

――生きられるのは、どちらか一人――

これは決して、『冗談』では無いという事に――

「くっそッ！ 何だよそれ……ふざけんなよ……んな事………！」

んな事決められっかよ！と、上条は荒い言葉使いに反して、力無く項垂れていく……。

「……マスター……」

インデックスを支えるセイバーが見守る中、上条は『人助け』という名の『業』に押し潰されそうになる……。

あまりにも過酷、あまりにも残酷、あまりにも理不尽な『現実』
が、上条の背に重く押し掛かる――

「此処は学生の街『学園都市』だぞ……なのに学生には……
……『学生には』？」

だが――、

「……なあ、インデックス！ その『魔術』って、『才能の無い人間』なら誰でも使えるんだよな！？」

「？」

『希望』をもたらすのも――

「まさか、『魔術』の才能が無きゃダメってオチじゃねえだろうな……」

「う、うん……大掛かりなモノならともかく……この傷を塞ぐ程度なら、中学生でも出来る……と思う……」

また『現実^{げんじつ}』である――

「……………」

無言のセイバーだが、心中では上条の急な変わり様にとっても驚いていた。先程まで『絶望』の淵に立たされていた少年の姿も今は無く、その双眸にはある『希望』が込められていたのだから――

「お前！ えつと……『セイバー』とお呼び下さい、マスター！
セイバー！ お前はインデックスを看てくれ！ 俺はちよつと公衆電話に言ってくる！」

「御意！」

上条は返事も待たず、一刻を争う様に公衆電話へと駆けて行く……。

残されたセイバーは短く返事をする、インデックスの方に向き直り、肩を擦りながら彼女を勇気付ける。

「御気を確かに！ 今マスターが助けを呼びに行きましたから、もう少しの辛抱ですよ？」

「……………そういえば…………君のマスターって…………とうまなんだね…………」

インデックスが先の会話から引き出した情報を口に出す…………。

「…………一応術式を組んだの私なんだけど…………やっぱり私じゃマスターになれなかったのかな…………？」

「？ 何やら話が見えませんが、今はどうか御自分の身をお気になさって下さい！ 貴方が倒れてはマスターが悲しみます！」

うん…………と、力無く頷き————、

「…………でも『セイバー』か……………凄く…………頼もしいんだよ…………ウツ！」

「伴侶殿！ それ以上喋りますと傷に障ります！ どうか安静に！！」

「？ 伴侶……………「だから違って！！」 ふわっ！」

何時の間にか戻って来た上条のツツコミが飛ぶ……。

「マスター……御自重下さい！　あまり大きな声を出したら、彼女の身に差し支えます！」

「あ、スンマセン……ってお前が言うなお前が！！」

ツツコミに真面目にツツコまれ、そして再びツツコむ上条……。何言わせんだよ！と言いたげな顔でセイバーに抗議するが、事が事な為、その漫才みたいな掛け合いを無理矢理区切って本題に入る――

「コイツを匿ってくれそうな人の住所分かったから、ソコに行くぞ！　運ぶの手伝ってくれ！！」

「御意！」

セイバーの返答と共に、上条達はその人の下に向かう――

この傷を負ったいたいけな少女を看てくれる、世話好きな人のもと――

天秤（後書き）

ホントは小萌先生の所まで行きたかったんですけど、諸事情により分割します。

申し訳ありません……。

余談。

「たいま」を「退魔」に変換しようとしたら、代わりに「当麻」が出て来ました。

無力く慙愧（前書き）

月面を天体望遠鏡とかで見るとクレーターが作る模様が『ウサギ』にも『カニ』にも『女の人』にも見えますね？

無力く慙愧

1

ピンポーン　ピンポンピンポンピンポーン

『学園都市』某所

そこに最先端技術の塊が立ち並ぶ『学園都市』のイメージに全く
そぐわないオンボロアパートに当麻達は居た

破れかけのトタン屋根に、薄汚れた床

変色を起こした壁

錆び掛けの手すり

極め付けは廊下に備え付けられた、『風呂場』という概念を否定
する洗濯機

——という、オンボロアパートに相応しい備え付けが施され
た、それはまごう事無きオンボロアパートだった（大事な事）——

「……この時間で、もう寝てるなんて言わねえよなオイ！」

その二階の一室のインターホンを何度も押して、部屋の住人を呼
び出す上条。

その脇ではセイバーがインデックスを背負っており、腰痛になり
そうな程身体を屈めながら、彼女が鎧から滑り落ちそうになるのを
度々背負い直して阻止している。

住人の返事を待つ二人だが――、

「失礼……。マスター、この際です！ 住人の方には申し訳ありませんが……」

「？ セイバー……？」

控えていたセイバーが手刀^{てがたな}を出して上条の前に出る。すると――

「手加減はしますが、蹴破ります！！」

ハッ！！！！ “ガンッ！” “グキッ！” ーーーーー
「！！！！！！！！！！」

「セ、セイバー？！」

勢いをつけて思いっきりその部屋のドアを蹴手繰り、破ろうとしたセイバーだったが、逆に自分がドアの脇で悶絶してしまう……。それでも尚、ドアの蝶番側――開閉の邪魔立てにならない位置に行く等、周りに気を配っている様子……。

見ればそのアパートの一室のドアは足型が付いているだけで、甲冑を着たセイバーのキックに見事耐えてみせたのだ！ ……一体どれ程頑丈な造りと素材だったのだろうか……。

「……っ……突き指……しました……」

「うわゝゝ蹴らなくて良かった……」

『はいはいはゝい、対新聞屋さん用にドアだけは頑丈なんですゝ』

……ってうわ！何か跡付いてます！！一体どんなゴツい新聞屋さんですか！！？』

インデックスを背負っていた片手で蹴った足を押さえていると、ドアの向こうから住人の声がして来た。随分とあどけない……というか幼い声色だったが、上条は別段驚かない……。

何故ならこのアパートに住む、『傷を負ったいたいけな少女を看てくれる、世話好きな人』とは、何を隠そう、当麻の担任である、学園七不思議の『月詠 小萌』先生だったのだから……。

「マ、マスター……僕に構わず……伴侶殿の中に……」

「だから伴侶じゃねえっての！！ 小萌先生！ 新聞屋じゃないですよ！ 上条ツス！ 上条当麻！」

『え！ 上条ちゃん！？』

セイバーの必死（？）の懇願にツツコンでから、上条はドアの向こうの小萌先生に呼び掛ける。

中の小萌先生も『ゴツい新聞屋』では無く『自分の生徒』と知って安心したのか、ドアに掛けていたチェーンやカギを弄る音が聞こえてくる……。

上条の方も悶絶中のセイバーの背からインデックスをゆっくりと離し、両手で彼女を横に抱き上げ、中に入る準備をする。

——やがて、ドアがガチャリと音を立てて開き、

「どうしたんですか上条ちゃん………ひい！！？」

ピンク色のウサギのパジャマを着込んだ小萌先生は、ドアを開け

ると上条の姿を真っ先に確認出来ると思っていた事だろう……。

だが、実際に彼女を迎えたのは彼だけじゃない……。『彼に抱き抱えられた酷い傷のシスター』も居たのだから……。

「先生、見た通りちよつと……いやかなり立て込んでるんで、ちよつとお邪魔しますよ先生……」

はゝいゴメンよろ。と、ズカズカと幼女先生の自宅にお邪魔する当麻……。

「ちよ、ちよつと！ 先生困りますゝゝ！ 煙草とかビール缶とか散らかってて……はうゝゝゝ………」

………傍から見たら『年端も行かぬ幼女が留守番する家宅に悪漢が介入する』光景に見えなくも無いやり取りをしながら、上条達は部屋に入っていた……。

「……………ううう……………」

………今だ悶絶するセイバーは、ドアが死角となって小萌先生に目撃されなかったという……。

ガサガサ ゴソゴソ ガチャガチャ バサバサ カランカラン

「……………あゝ、何て言うか……、先生が20歳過ぎの独身女性^{はたち}つてのがよく分かる部屋ッスね……」

それが上条当麻の率直な感想だった……。

小萌先生の部屋はとにかく散らかっていた……。この一言に尽きる……。

床に散らかる缶ビール……、隙間を失った灰皿……、何かのシミがついた畳み……、乱雑に積み上げられた教材……、そこにあるのがさも当然の様な草臥れた布団……

せかせかと即興で片付ける（散らかってる物を捨てたり寄せたりする程度だが……）小萌先生の小ささには、イメージが全くそぐわない部屋である事に、上条は呆気に取りられるしか無かったという……

「こ、こんな状況で不謹慎ですけど、上条ちゃんは煙草を吸う女の人は嫌いなんですー？」

引き攣った笑顔で訊く小萌先生を尻目に上条はインデックスを（辛うじて）スペースの開いた畳の上にゆっくりとうつ伏せに寝かせる。

傷口は破れた修道服が妨げて確認出来ないが、徐々に広がっていくその白い服の『紅』が傷の深さを物語る。

「……だ、大丈夫……じゃなさそうですね……ソレ……」

「……先生、実は………ッ！」

上条が掻い摘んで事情を説明しようとした途端、変化が起こった

インデックスの身体が淡く発光し始めたのだ——！

「【警告。第2章第6節。出血による生命力^{マナ}の流出が一定量を超えた為、強制的に『自動書記^{ヨハネのペン}』で目覚めます】」

そう淡々と言葉を紡ぐインデックスの眼に人間味は無い……。上条はそんなインデックスに見覚えがあった……。

魔術師^{ステイル}と戦っていた時のインデックスだ………！

「【現状を維持すれば、倫敦の時計塔が示す国際標準時間に換算して、およそ15分後に私の身体は必要最低限の生命力^{マナ}を失い――
――、】」

――
【絶命します】

瞬きもしない、彼女の人形みたいな双眸に上条はゾツとする……。抑揚も無く、息も切らさないその喋り方は、とても瀕死の重傷を負っている身とは思えず、そのギャップに眼を逸らしそうにもなる……。

だが、それでも上条は逸らさなかった……。ただ、彼女を見つめ続ける……。1秒でも彼女から眼を逸らせば、もう助けられないと思っただからだ……。

「【これから私の指示に従って、適切な処置を施して頂ければ幸いです】」

「……………先生……俺、救急車呼んで来ます！ 先生はこの子の話

を聞いて、お願いを聞いて、とにかく絶対意識が飛ばない様に!!
この子、この通り宗教やってるんで、よろしくです!!」

小萌先生は事の展開に戸惑いを隠せない表情でうん、うん……と
首とパジャマのウサ耳を縦に揺らし、承諾する。

……実はこの上条の言葉には一つ『嘘』がある……。それは『救
急車を呼ぶ事』だ。

救急車を呼んで騒ぎを大きくしたりしたら、それこそ彼女の『魔
術』の妨げになり、彼女は今度こそ助からない。加えて『魔術』な
んてオカルトをこの状況で話でもしたら、小萌先生にバツサリ斬ら
れるに決まっている。

だが、上条は小萌先生にインデックスの『応急処置』では無く、
『気休め』を頼む事で、『魔術』の行使を可能にしたのだ。

「……なあ、インデックス……。何か俺にやれる事って無いのか……?
」

インデックスの耳元で、上条は彼女に呼び掛ける。

力になれるものならなりたい……。助きたい……。だが、そんな上
条の思いは簡単に両断された……。

「【ありません。この場における最良の選択肢は『貴方が此処から
立ち去る事』です。貴方がこの部屋に居れば、それだけで回復魔術
は打ち消されてしまいます】」

上条にとって、それはあまりに残酷な言葉――

インデックスの透明な声は暗に『右手の力が邪魔をする』と言っ
て来たのだ……。

上条は自分の右手を痛くなる程握り締め、それを恨めしげに睨み

付ける……しかし、そんな事をしても事態は好転する筈も無い……。

「先生………それじゃあ……、この子………お願いします!!」

奥歯を噛み締め、歯痒い思いに耐えながら、上条は立ち上がり、
玄関に向けて走り出す――

「あ! 上条ちゃん! 救急車呼ぶなら電話がソコに………」

――一方、

「………ったたた……、う………ようやく………治まって来たかな………」

そんな蚊帳の外でずっと突き指に悶えていたセイバーもようやく
復活し出し、ゆっくりと、足に気を配りながら立ち上がる。

復活した所で早い所自分も部屋に入らなければと、セイバーはド
アノブに手を掛けるが――、

「……おっと! 流石にこの格好だと住人の方が驚かれるか……。」

ハタとそう思い当たり、セイバーはドアノブを捻り掛けた手を離
す。

「……でも、鎧を外す訳にも行かないからな………まあ、せめて

兜だけでも……」

そう言うと、セイバーはカシヤカシヤと金属の擦れ合う音を立てながら自分の兜を外しに掛かる……。

固定具を緩め、脱ぐ為の隙間を作り出すと、両手でゆっくりと持ち上げ――

バンッ！ バキッ！

「「げふっ！！？」」

――ようとした所でドアが勢い良く開いた……。

その前に立っていたセイバーはドアが開く勢いで、ドアを開けた本人である上条はドアが跳ね返る勢いで全身を打ち据えられ、二人揃ってカエルが潰された様な悲鳴を上げる……。

「「――ッ……は、鼻が……鼻が…………！」」
はな はな

二人とも互いに転倒はしなかったが、ぶつかった拍子にセイバーは脱ぎ掛けた兜に鼻を打って再び悶絶……。

一方、上条は全身を打ち据えられ、ヨロヨロしながらも部屋の外に出て、廊下の錆び掛けの手摺りに掴まる。掴んだ『右手』が痛くなる程手摺りを握り締める上条の脳裏には、胸に突き刺さったままのインデックスの先の言葉が虚しく反芻される――

『【この場における最良の選択肢は『貴方が此処から立ち去る事』です。貴方がこの部屋に居れば、それだけで回復魔術は打ち消されてしまいます】』

……………無力感に打ちひしがれながらも、上条は駆け出した……

「うう……ってあ！ マスターどちらに！？」

兜が外れ、鼻を押さえていたセイバーが上条の後ろ姿に気付くが、上条はそれに気付く様子も無く、駆け足でアパートの階段を降りる

アパートを出て、夜の街を駆け出す……今だ脳裏に響くインデックスの言葉を実行する為に街中を走る——アパートの一室からなるべく遠くに——その方がインデックスが助かる確率が上がる——そう自分に言い聞かせながら——

「ちょ！ マスター、一体どちらに赴くつもりですか！？ 待って下さいよ！ ってゆーかマスター足速ッ！！」

それを追い掛けるセイバーにも気付かない程——

2

上条駆け出して数刻——、

「ぜえ……、はあ……、ぜえ……、はあ……」

薄暗い街中——『学園都市』には珍しい、街の光ネオンの少ない市

街地の一角に、走りに走ったおかげで息を切らす上条当麻と――

「マスター、大丈夫ですか？」

同じ様に走ってて、息を乱す所か汗一つかかないセイバーがいた。

「ぜえ……、や、やるではないですか……セイバーさん……。不良、相手に百戦錬磨の、……この上条さんの逃げ足に追いつくとは……はあ……、」

「普段こういう生活を送ってるんですかマスター……；」

自宅の寮には戻れない……。まだ消火活動が行われてるかどうかも分からない上にここからじゃとてもじゃないが遠い……。第一、自分の部屋はぶっ壊れたままだし、またあの『魔術師』と出くわすとも限らない――

既に草木も眠る丑三つ時、歩行者の姿は既に無く、少ない街灯や羽虫群がる自動販売機が辛うじて光を保った一帯――恐らく、上条の背後で身を案じるセイバーの鎧姿を気にする者も現れないだろう……。

そんな歩道の道脇で片手を突き、項垂れる上条は肩で息をしながら、自分の『右手』を見つめ……息を詰まらせる……。

神様の奇跡だって打ち消せるのに、たった一人の女の子も救えない……自分の右手を……。

「……………マスター……………」

金属が擦れる。

背後でセイバーが心配して声を掛けてくる

上条は振り向かない……。振り向く気力が無い……。

故に耳だけを傾ける。失礼な事この上無いが、相手は自分を何故か『主人』と呼ぶ『騎士』………多少の無礼は目を瞑ってくれるだろう、と上条は甘えた考えに縋る事にした……。

「……………伴侶殿は……………」

「……………だから違えて……………小萌先生が相手してくれて……………『魔術』で何とかかなりそうだってさ……………。俺が居なくてもインデックスは助かる……………」

いや、『俺さえ居なきゃ』の間違いか……………と上条は訂正すると、『騎士』セイバーは首を傾げる。だが、金属の擦れる音は聞こえて来ない……………。

「……………何故です？ 彼女の傍には貴方が居た方が良いのでは……………何か理由が？」

何も知らない者の発言は何にしても腹が立つものだが、今の上条にその気力は無い……………。

「……………『幻想殺し（イマジンブレイカー）』……………」

「？ 『幻想殺し（イマジンブレイカー）』……………」

初めて聞く専門用語にオウム返しで訊ね返すセイバー……。

「……俺の右手は、どんな『異能の力』でも問答無用で打ち消しちまう……。それが回復魔術に邪魔なんだとさ……」

掻い摘むにしても、あまりに雑な説明に上条は一瞬後悔した……。これでは「何だそれは!？」「どういうチートだ!？」なんてツッコまれるに決まってる……。

そんなのに一々相手にする気力も無いのに……と思いきや……。

「……………そうでしたか……」

「!」

セイバーが言ったのはそれだけだった……。

「……出過ぎた真似をお許し下さい、マスター。そのマスターの御力が原因で追い出されては、さぞ心苦しかったでしょう……心中お察し致します……」

……甲冑の擦れ合う音が聞こえる。

セイバーの影は縮み、膝を地面に付け、頭を垂れて跪く。セイバーの言葉にハッとなって、ようやく振り向いた上条が見たセイバーの姿だった。

意外だった……。

自分に向けて跪いた事でもなく、少ない逆光に陰るセイバーが兜を外し、髪が外気に晒されている事でもなく……。

この能力の事を初めて見聞きした者は大抵『驚く』か『疑う』かする物なのに、今この場で相對する『騎士』はそうせず、ただ『受

け入れた』のだから……。

「……………何も訊かねえのか？ この『右手』の事とか……………」

今度は顔を気持ち持ち上げた上条の方がセイバーに訊ねる……。

「あれ程彼女を必死で助けようとしたマスターの御言葉を、僕には疑う理由がありません故……」

答えを用意していたかの様な即答でセイバーは返す。しかし、その言葉に嘘偽りは無い……感じられない……。

「……………」

そんなセイバーの真摯さに上条は、ホンの少しだけ口を動かす……。

「……………今朝の事なだけどさ……………」

「？」

……上条はセイバーの知らない、今朝のインデックスとの出会いを話した――

――『魔術』の事、

――10万3000冊の『魔導書』の事、

――インデックスを追う『敵』の事、

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』が破壊した『歩く教会』の事、

—— ころうじて無事だったインデックスのフードによって引き合わされた、あの『魔術師』との事……………」

「……………」

上条の話を静聴していたセイバーが、跪いたまま遠慮がちに口を開く。

「…………元を正せば…………俺のせいなんだ…………」

「は？」

「俺が今朝、インデックスに…………補習サボってでも捜して…………フード届けてりや…………アイツは今頃…………」

その位の事、出来た筈なのに…………と、上条は行える筈だった事を行わなかった事に後悔する。

自分は別れ際、インデックスにハッキリ拒絶されたというのに——

『——じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？』

なのに自分は、フードさえ有ればまた会える……などという未練がましい期待を抱いて、届けなかった……。

「……ハハ、これじゃ俺……現実リアルから非現実オカルトに逃げ込もうとしてたみてえだな……」

いや、みたいじゃなくて実際そうか……と懺悔する様に訂正する……。

自分は、またインデックスに会えるかもしれない。インデックス本人が『追われてる』と明言していたにも関わらず、自分はその事を深く考えず、彼女を追いつめてしまった……。

——絶命するかもしれない致命傷を負わせてしまった——

「……ホント、何やってんだろ……俺……」

再び沈み込む上条……。頭を抱える右手の握力が強くなって、上条は無能な自分を責め立てた——

「……何だか……跪いてる僕がまるで神父みたいな役回りですね……」

「! ……ハハ、ホントだな……」

膝を付いたままのセイバーの冗談にも乾いた笑いでしか返せない上条……だが、

「……マスター……、僕はマスターとは違う存在ですから、上手い事は言えませんけど……」

——マスターはどんな気持ちで、彼女を助けたんですか？

「……………え？」

その言葉に上条はハツとする……。

「もしマスターがマスターの言った通りのお気持ちでしたら、何故危険を冒してまで助けようとしたのです？」

——その『非現実』オカルトを目の当たりにしたのなら、そこから引き返す（にげる）事も出来た筈では……？と事も無げに訊いて来るセイバーに上条はハツと顔を上げて声を上げる。

「な！ バカ！ そんな事したらインデックスが……」

「……………それで良いんだと思いますよ……」

「……………え？」

沈んでいた顔を浮上させて抗議する上条にセイバーは頭を垂れたままソレを肯定する。

「マスターが彼女を助けた時の気持ち、貴方の心の答えなのではないですか？」

、
「たったそれだけ……たったそれだけの言葉なのに」

セイバー……、彼が掛けた言葉で、上条の心は、スッと軽くなつた……。

「悔やむより、省みるより、もう貴方は答えを持っているじゃないですか」

セイバーが膝に手をやり、グッと力を入れて立ち上がる……。

「貴方のその答えは『逃避』でも『好奇心』でもありません。貴方が出したその答えをそう嘲笑う輩が居れば、マスターが許容しても僕が許しません」

一寸先の見えない闇夜の中、
兜を被っていないその素顔を上げ……。

ブロロロロロロロ……。

車道からやって来た車のライトに顔を照らされ、

「何たってマスターは、そんな非現実と向き合いながら、」

『僕か彼女か』では無く、『僕も彼女も』生存出来る『
現実^{げんじつ}』を切り拓いたんですから！

満月の輝きに並ぶ、その凜々しい美貌で、柔らかに微笑
んだ

「……………お前……………」

「……………ですからマスター、どうか『彼女を助けた』自分まで否
定しないで下さい」

「え？」

「貴方が居なければ、彼女にはあの魔術師^{メイガス}に捕らわれるという結果
しか無かった。そんな『現実』を切り裂いたのは、間違い無くマス
ターなのです。どうかその事を忘れないで下さい……………」

、

ああ、

本当に、

何でだろう…………

目の前の満月を見つめるだけで、心が軽くなっていく……
…。

「…………ハハ…………何ていうか、」

「？」

「上条サンってば、ホント不幸だ……」

——そんな月を見納め、少年は自分を恥じる……。

——他人に言われるまで、自分の瞳が曇っていた事に……。

「……………そうだよな……」

——同時に、少年は再び決意する……。

「ついさっき、『地獄の底から引きづり出す』って、決めたばかりだったよな……！！」

——そうだろ？上条当麻！！

汗の溜まった鼻を拭い、上条は頭の曇りを払った——

そんな彼の顔は決意に満ち、満月の騎士はそれを見て、ただ嬉しそうに微笑み返した——

余談

「なあ、セイバー……」

「はい？」

「お前、女の子だったのか……」

「いえ、男ですよ？」

「……………」

……………えー……………」

無力く慙愧（後書き）

という訳で、ウチのセイバーは『男の娘』でした。詳しい容姿はまた次回……。

氷解（前書き）

セイバー影薄く。

氷解

事件から一夜明けて、朝の日差しが意外に入ってくるボロアパートにて……上条当麻の呆れた声が物語の鐘――、

「――それで、何だってビール好きで愛煙家な大人の小萌先生のパジャマが、お前にピッタリなんだ……」

――年齢差いくつ何だか………

「んまっ!?!」「むう……」

歳の事を指摘されれば、女性是谁しもショックは受けるもの……。後ろ手で身体を支える上条の慇懃無礼さにインデックスと小萌先生は二人揃ってムツとする。

インデックスの件から、上条達は小萌先生のアパートに一晩泊めて貰う事となった。自宅は全壊して帰る所も無いし、インデックスを先生に預けたままというのも気が引けるといいう、上条の判断だった。

そして同じ様にお世話になっているインデックスは昨日まで着ていた白い修道服では無く、小萌先生のパジャマ――つまりはピンクのウサ耳のパジャマをバッチリ着こなして、布団から身体を起こしている……。

「見縊らないでほしい!」「うんうん!」私も流石にこのパジャマはちょっと胸が苦しいかも……「うんう……って、なっ!?!?!?」「――」

――その発言は舐めてるのです!?!!

え〜でも〜……

でも、何なんですか……!?

べっつに〜……

〜〜〜! 私大人なんですう〜!

え〜……

傍から見れば、ただの姉妹喧嘩にしか見えない少女達どんぐりの背比べ……。

それを傍から見ていた上条が呆れて深いため息をつく頃、小萌先生が遅かれ早かれ訊いてくるであろう事を訊いてくる……。

「それはそうと上条ちゃん! 結局この子は上条ちゃんの間様なんです!?’」

質問を予想していなかった訳では無いが、正直上条にとってこの手のごまかしは……。

「……………妹」

不得手である。

「大嘘にも程があります! この子完全に銀髪碧眼の外国人少女です!!’」

「ああ、スンマセン! ホントスンマセン! 嘘つきました! 許して下さい! ゴメンなさい!」

そして余計怒られた……。

「それで上条ちゃん！ ホントの所どうなんですか！？」

「……………、……先生、一つ良いですか？」

「です！」

土下座しつつも上条は恐る恐る挙手して、仁王立つ小萌先生に質問の権利を申請する。

許可が出た所で、上条が隣でウサ耳を揺らしているインデックスに目を配りながら小萌先生に訊ねる。

「事情を訊きたいのは、この事を『学園都市』の理事会なんかに報告する為ですか…………？」

「です！ 上条ちゃん達が一体どんな問題に巻き込まれてるかは分からないですけど、それがこの『学園都市』で起こった以上、解決するのは教師の役目、大人の義務です！」

教師の鑑…………というべき言葉だった――

小萌先生――彼女は『規則の為』でも『保身の為』でも無く、飽く迄も『生徒の為』に『自分を頼れ』と言ってくれたのだ…………。

「上条ちゃん達が危ない橋を渡つてると知って黙っている程、先生は子供では無いのです！」

土下座する上条と視線を合わせる様に屈んで、真摯に見つめてくる小萌先生。

目の前の教え子が危ない橋を渡ろうとしても黙っている教師も多い中、小萌先生の言葉は上条にとってこの上なく救いになった。教師『月詠 小萌』――何の能力も、腕力も、責任も無いの

に、彼女は見掛けの小ささとは裏腹にその教師としての器量は他の先生以上に広いものがあつた……。

だが――、

「……先生が赤の他人だったら遠慮無く巻き込んでるけど、先生にはインデックスの事とか借りがあるんで、巻き込みたくないんです！」

だからこそ、上条は『小萌先生を巻き込む』という選択肢を選ぶ訳には行かなかった……。彼女へのこれ以上の負担は、上条にとって望むものでは無かつたのだから……。

「……ムウ……／＼／＼／＼何気にカッコいい台詞言つたって、先生は誤魔化されないうすよう！」

屈み込んで更に小さくなった身体をユツサユツサ揺らしながら立ち上がり、部屋の出口の障子に足を運んでいく……。

「……ってアレ？先生何処へ？」

「……執行猶予です！先生、スーパーにご飯のお買い物に行つて来ますから、上条ちゃんはその間、何をどう話すべきか、キツチリカッチリ整理して置くんですよ！」

――先生が万が一忘れてた時は、ズルせず、正直に話すんですよ！と付け加え、小萌先生はアパートの自室から外出していく……。

上条とインデックスはポカンと口を開け、最早ドアや壁が遮って

見えなくなった彼女を見送る

コンコン

「「うん？」」

二人が再び動き出したのは、窓の外にイモリのように張り付いた『
剣の騎士』の呼び掛けが聞こえてからであった……。

「つてうわ~~~~ッ！　ビククリしたあッ！！！」

「……いないと思ったら、ずっとソコに居たんだね……」

あ　け　て　く　だ　さ　~~~~~　い

というただでさえ兜でくぐもった声が窓ガラスに遮られて更にくぐもり、正に地の底から響く様な声で空気を叩き、マスター達に呼び掛けるのであった……。

|

|

|

|

「要らぬ手間を取らせてしまい、申し訳ありませんでしたマスター……」

「いや……それは良いんだけど……せめて普通に入ってこいよ……」

上条に向かって跪くセイバーだが、そこにインデックスがセイバーの鎧の後ろから割って入ってくる……。

「ホラねとうま！ 『サーヴァント』だよ！ 『サーヴァント』！ やっぱりあの魔法陣は間違ってたんだよ！」

パジャマのウサ耳をピコピコと揺らしながら、ヒーローに出会った子供の様にはしゃぐインデックス。

「伴侶殿！ ちゃんと横になっていないと体力が戻りませんよ！」
そのギャグはもうイイ！！」

あまりにしつこいセイバーに上条の怒鳴り声がボロアパートの一室に響く。

「自己紹介しなきゃだね！ 私の名前はインデックスっていうんだよ！」

「インデックス殿ですか……。では、僕の事は『セイバー』とお呼び下さい」

「うわ~~~~『セイバー』か~~~~♪想像してたよりずっとカッコイイんだよ~~~~♪」

インデックスがセイバーの白銀の鎧をペタペタと触りまくる。その光景が鎧兜とは縁遠い上条には、精々『玩具屋に立ってるヒーローの等身大フィギュアに興味津々な子供』みたいにしが見えなかった……。

等身大フィギュアよろしく当のセイバーは少々居心地が悪そうだが……。

「あ、あの……すみません、インデックス殿……ずっと外で待機していたので暑さで鎧が蒸れてしまつて……、とりあえず兜だけでも取りたいのですが……」

「え？　兜取ってくれるの！？」

「あの……、何故そんなに嬉しそうなのですか？」

……ホントにヒーローに夢中な子供みたいだ……。

既に彼の素顔を拝見した当麻がそう思う頃に『セイバー』はカチャカチャと甲冑を擦らせながら、そのボロアパートの部屋には分不相応な兜を脱ぐ――

「フウ……」

兜を脱ぐと同時に、フワリと広がる絹の様に細かい紫髪から汗がキラキラと飛び散る……。

兜の中で反響していた声が、反射物を取り払われた事で、澄み切った高めのボーイソプラノが部屋の空気を清浄する……。

切り揃えればボブカットになりそうなセミショートの髪は、前髪

がちよつとだけ右に流れており、その隙間から覗くパッチリ開いた宝石の様に碧い瞳がインデックスを見つめている……。

細長い眉に小さな唇、引っ込んだ顎、極め付けは黒子一つ無い色白な肌……、そんなセイバーの『素顔』はどう見ても……、

「……セイバー……」

「はい？」

「……女の子だったんだね……」

「いえ、マスターにも訊かれましたけど、男ですよ？」

「……………」

「……えー……」

そんな自分と全く同じリアクションを取る上条は思わずプツと噴き出す……。

——と、今の二人の会話から、上条はふと思い出した——

「って、そういえばセイバー……って呼んで良いんだよね？」

「はい！ 如何致しましたか？ マスター」

「その……色々忙しくって訊けなかったんだけどよ……何でお前、俺を『マスター』なんて呼ぶんだよ？」

当然の疑問だと上条は思う。

『超能力』は『無能力者^{レベル0}』、『魔術』だってズブの素人、『異能力』を打ち消す右手『幻想殺し^{イメージブレイカー}』以外は普通の高校生である自分が、見ず知らずの『騎士』に『主人^{マスター}』呼ばわりされる謂れはどう考えても無い……。

「？ サーヴァントを召喚した者の事を僕達は『マスター』と呼ぶんですが……？」

「は？ 『召喚』ってのをしたの、俺じゃなくてインデックスだぞ！？」

『魔術』には詳しくなくても、その理屈だったら普通の人は『インデックスがマスターになるのでは？』と考えるだろう……。上条は『召喚の儀』に相席していたが、飽く迄も見ただけだったというのに……。

そう考える上条であったが、今度はインデックスを一目見たセイバーの方が首を傾げる……。

「うゝむ……その辺りは僕にも何とも……そもそもマスターの右腕に僕の『令呪』が有りますので……」

「『令呪？』」

疑問符を浮かべる当麻とインデックスは一斉に『右腕』を見合わせる。

「つてうおっ！ そういやゴタゴタですっかり忘れてた！ つてゆか何だコレ……上条さんの『右手』が『右腕』レベルで奇妙な事になってますけど……！」

上条の『右腕前腕部』には竜の顔を模した三画の刺青が刻まれていた。事件のゴタゴタで刻まれた本人も記憶の隅に置いていた、その『令呪』と呼ばれる刺青の存在に戸惑う上条。

そして――、

「おー……これが噂に聞く『令呪』なんだねー」

それを興味津々に観察するインデックス……。

「……てゆうか、コレ！ 小萌先生に気付かれてねえだろうなオイ！ コレどう見ても刺青にしか見えねえじゃねえか！」

「こもえはソレについて何も言って来なかったし、多分気付いてなかったんじゃないかな？」

「じゃあ今の内に隠しとかねえと！ こんな晒してたら、俺が不良にしか見えねえじゃねえか！！」

何か隠す物、隠す物！ と上条は部屋の中をあちこち探し出す。担任の部屋とはいえ人ん家の物を動かすのは気が引けるものだが、今の上条はそれどころでは無い。

何故なら――、

「こんなの先生に見つかったら絶対勘違いされる！！」

傍から見れば刺青以外の何物でも無いこの右腕の『令呪』……。こんな不良がする様な物を見られた日には最悪の場合――、

先生が――泣く（超重要）！！！！

刺青を入れた事を叱るより、『上条ちゃんが不良になっちゃいました……』なんて言ってメソメソと泣く光景の方が容易に思い浮かぶ……。

そんな事になれば、補習の時の『痛い視線地獄』再び……なんて事も有り得る……。アレはある意味、先生に怒られた方がマシな拷問だ……。

そればかりは、大抵の不幸を経験した上条でも御免蒙りたかつた……。

「先生というのは、さっき出て行かれた『ピンクな貴婦人』の事ですネ？」

「ああそうそう、先生に見つかったら……って、貴婦人ツ！？！？」

インデックスを『伴侶』と呼んでいた時と同じ位の衝撃が、部屋中を物色する上条の手をピタリと呼び止めた……。

「素敵な方ですね、彼女……。マスター達の事を信頼して暗に見逃してくれるとは……」

「い、いや、あの……セイバーさん？あの小萌先生の何処をどう見たら……その……『貴婦人』という表現が……？」

「？『貴婦人』とは『人徳の高い女性』という風に理解してますが……間違ってますか？」

「えっと……『貴婦人』が本来どういう意味なのかはともかく、そういう認識ってんなら……」

間違っ
てねえ
と思う
けど……と、口調が覚束無い上条……。

それもその筈。赤いランドセルが似合いそうな小萌先生の第一印象なんて、普通の人が見れば『小学生』か『幼稚園児』辺りが関の山だったのに……目の前の『男の娘』はそこから階段を5、6段位飛ばして『貴婦人』だなんて……、

「(……………コイツの感性って一体どうなってんだろ????)」

インデックスを『伴侶』と呼んだかと思ったら、今度は小萌先生を『貴婦人』と来たモンだ……。一体コイツは何を基準にして人の呼称を考えてるんだとツツコミを入りたい心境な上条であった……。

閑話休題。

「……しかし、彼女はこれ以上は巻き込めないですね……」

「……うん、そうだね……彼女はもう『魔術』を使っちゃダメ……」

などと上条が一人ボヤいている内にインデックスとセイバーが真^{リアル}面目モードに入っている……。それに伴って、上条も頭を切り替え、インデックスの話に耳を傾ける……。

「『魔道書』ってゆうのは危険なんだよ……。そこに書かれてる『異なる常識』や『違える法則』……そういう『異世界』って、善悪以前に『この世界』に対して有毒なの……」

パジャマのウサ耳フードを取り去り、パジャマの中の美しい銀髪を外気に晒しながら、ゆっくりとした口調で『魔術の危険性』を語る……。

「魔術師ならともかく、『この世界』の人間が『違う世界』の法則を知ると脳とかの神経が破壊されてしまうから……」

宗教観の薄い人の多い日本人は特に……と付け加えるインデックスは小萌先生にこれ以上の魔術行使は無理だと当麻とセイバーに告げる。

「脳を破壊って……『魔術』ってそういうモンなのか!？」

「成程……。『魔術回路』に発現していない一般人である貴婦人殿には、一回使えただけでも奇跡……という訳ですね……」

セイバーの言葉にインデックスはウンと小さく頷く……。

一方で当麻はその事に対して顔を顰める。『魔術』についてもそうだが、その根源たる『魔道書』に対し、上条は言いようの無い感情が自分の中で渦巻いて来るのを感じていた……。

それに何より――、

「(ソレを『10万3000冊』も叩き込まれたコイツは、何も苦しくないのかよ……!?!)」

インデックス

……いや、分かっている。そんなものを叩き込まれた彼女が苦し

くない筈が無い事位、上条にも分かる……。だが、彼女自身、今までずっと『苦しい』とは訴えない……。きっとソレがその感情の渦の正体……。

「……………知りたい？」

「！」

顔に全部出てしまったのか、唐突にインデックスが訊ねてきた。両手を祈る様に組み、上条を見つめる。その美しい碧眼は心なしか震えている様に見え、セイバーが気遣う様に彼女の背中を擦っている。

「とうま……私の抱えてる事情、ホントに知りたい？」

白い少女は再び訊ねてくる……。いつもの明るい声じゃない、まるで自分の罪を懺悔する咎人の様に……。静かで、遠慮がちな声……。そんな彼女に上条は――、

「……………なんていうか、それじゃコッチが神父さんみてえだな……」

「え……………うん、そうだね……懺悔を聞く神父さんみたい……／＼／＼／＼／

『覚悟』を以てして、その『覚悟』に応えた……。

「フフ、何処かで聞いた台詞ですね、マスター♪」

「ん…………フツ、ホントだ……」

—— 十字教なんて元は一つなのに、カトリック プロテスタント旧教や新教、ローマ正教、ロシア成教、イギリス清教、ネストリウス派、アタナシウス派、グノーシス派なんて、今では幾つもの派閥に分かれてる。どうしてだ
と思う？

—— どうしてって、そりゃあ……。

—— 『宗教』に『政治』を混ぜたからですね。どの時代でも
人がやりそうな事だ。

—— ウン、セイバーの言う通り……。分裂し、対立し、バラ
バラの道を歩く事になったそれらは、同じ神様を信じてるのに互い
に『敵』になった……。

—— 要するに、それぞれが規模の大きな『宗教法人』……と
いう訳ですね……。

—— 法人……その呼び方は的を得てるかも……。その『法人』
達がそれぞれ独自の進化を遂げて、『個性』を手に入れたんだよ。

—— 『個性』ねえ……。考え方が違ったらそりゃ個性も出
るよな……。

—— カルトローマ正教は『世界の管理と運営』、ロシア成教は『非
現実の検閲と削除』。そして、私の所属するイギリス清教は
—— その、イギリスは魔術の国だから……。

『魔術師への対抗』……と言った所ですか？あの国はそういうのに厳しい歴史がありますから……。

ウン……。だから、イギリスには特別な部署があるんだよ……。魔術師を討つ為に魔術を調べ上げて対抗策を練る『必要悪ネセサリウスの教会』……。

ネセサリウス……。

『必要悪』とはよく言ったものですね……。『この世界を守る為に『異世界』を行使する……『世界の汚れ役』といった所でしようか……。

ウン。その表現は合ってる……。穢れた敵を理解すれば心が穢れ、触れれば体が穢れる……。その役目を一手に引き受けるのが『必要悪ネセサリウスの教会』で、その最たるものが……。

……お前が記憶している『10万3000冊の魔道書』か……。

そう……。『魔術』っていうのは数学の式みたいなモノだから、上手に逆算していけば、相手の攻撃を中和させる事も出来るの。世界中の『魔術』を知れば世界中の『魔術』を中和させる事が出来る筈だから、私には10万3000冊が……、

「叩き込まれたッ………!!」

反吐が出る……それが上条の感想だった。

『魔術』等の異能の力を中和させる様な力なら上条にもある。右手に宿る『幻想殺し』……上条自身、何の役にも立たないと斬り捨てていた力だ……。

だが、その『必要悪の教会』とかいう連中は『そういう力』を求めて、インデックスに『地獄』を晒し続けて来たのだ……！

「ハン！ そんなヤバイモンなら、読まずにさっさと燃やしちまえ
ばいいじゃねえか！」「マスター、恐れながら……」「うん？」

この場にいない魔術師連中に毒突く上条にセイバーが挙手する。

「『10万3000冊の魔道書』とか『インデックス殿に叩き込まれた』とか、正直僕には初耳だらけで、話の意図はよく掴めていません。ですが、『魔道書の知識』が残っていれば『焼却』は無意味なのではないでしょうか？」

「え？」

「ウン、正解……。重要なのは『本』じゃなくて『中身』だから、
原典を消しても『中身』を伝え聞かせちゃ意味が無いの。それに――」

セイバーの意見を裏付けるインデックスは言葉を更に続ける……。

「原典の処分は『人』……正確には『人の精神』では無理」

「え……何で!？」

「……それも『魔道書の危険性』の一端なのですか？」

「そう……どうしようもないからこそ、『封印』以外に道は無かったんだよ」

『10万3000冊の魔道書』を全て使えば、世界を例外無く捻じ曲げる事も出来るから……と、インデックスは布団に潜り込む。

その意味を理解出来る者はどれだけ居るだろうか……。魔術師からも『危険物』扱いされるその『魔道書』……その『10万3000冊』を脳に保有するその意味を……。

「……つまり連中は、『お前の頭ン中にある爆弾が欲しい』ってコトか………！」

奥歯を噛み締め、怒りを抑える上条にセイバーは落ち着いてと甲冑に覆われた手を重ねる。

インデックスが恐る恐る上条を布団から覗いてくる。そんな彼女に上条は……。

「……………この……バカ……！！」

「ひう！」

「そんな大事な事、何で今まで黙ってやがったッ……！！」

「ちよっ……マスター！？」

セイバーが取り押さえる上条の怒鳴り声に驚き、両目を見開くインデックスは亀の首の様にササッと布団に潜り込む。

「だって……信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし……、それに……その……」

嫌われたくなかったし……。

「ッざけんなよお前!」「ひう!!」「舐めた事言いやがって!!」「マスター!!!」

必要悪の教会!?

ネセサリウス!!!?

10万3000冊の魔道書!!!?

上条は布団の中で震えるインデックスにも自分を『どうどう』と宥めようとするセイバーにも構わず、矢継ぎ早に叫び続ける。

「とんでもねー話だったし、聞いた今でも信じられねえよ!!!」

上条は今、自分の爆発した感情を抑え切れない……。インデックスがずっと背負っていた物、それを早く知っていれば、もっと早くに力になったかもしれないのに……。当のインデックスがそれを求めなかった……。

「……だけどな」

「「?」」

「たったそれだけなんだろうが……。みくびってんじゃねえ……」

それが上条にとっては、悔しくて悔しくて、腹が立つ程悔しかったのだ……。

「……とうま」

「……マスター」

「たかが『10万3000冊』覚えた程度で、気味悪がられるのも思ってたのかよ……」

——ちったあ俺を信用しやがれ！人を勝手に値踏みしてんじやねえぞ！

「……………ふえ……………」

「「！」」

可愛らしく漏れた言葉と共に、少女の眼に涙が滲む……。

「イ、インデックス殿!？」

「う……うう……」

ソレはまるで雪解け水のように止まらない……。上条の言葉が暖か過ぎて、心の何もかもが軽くなってくる……。

その鳴咽に耐えようと布団の端を噛み締めるインデックスだが、
双眸から漏れ出るソレは止まろうとしない……。

彼女はずっと孤独だったに違いない……『魔術師』にずっと追われて、ずっと一人で戦って、誰にも助けを求められなかったのに……『サーヴァント』なんて藁にも縋る思いで助けを求めたかった筈なのに……。それでも彼女は助けを求められなかった……。

そんな時に差し伸べられた――

ペチン

「はうっ！ ……………？」

額をデコピンで弾く『上条の右手』――

「ホラ！ 俺ってば『右手』があるから、『魔術師』なんざ敵じゃねえし！」

「及ばずながら、僕も全力を尽くします！！」

そして『セイバー』の存在が――

そんなインデックスの心に救いを齎したのだ……………。

「こんなに味方が居るんだからよ！ ドーンと大船に乗った気で居ろよ、な！」

上条の言葉はインデックスにとって、とても頼りになる物だった……………。

「……でもとうま、補習で学校行かなきゃならないって言ったから……」

「……………言ったっけ？」

「絶対言った」

「？」

……さっきまでカッコ良く啖呵を切っていた上条が壊れたブリキの様に言葉を詰まらせる……。完全記憶能力を誇るインデックスにとって、昨日の朝の出来事を思い出すなど、お茶の子さいさいらしい……。

ただ一人、その現場に居合わせなかった為に話に付いていけないセイバーは「がっこ？ほしゅー？」と目を点にして己のマスターを見つめる……。

「い、いいんだよ学校なんて！ 向こうさんだって何も進んで退学者とか留年生とか出したい訳じゃないだろうし……」

「じゃあ、何だって『学校に行かなきゃ』とか言ってたの？ 予定があるとか言って……」

「……マスターそんな事言ってたんですか？」

二人の言葉責めに顔を真っ赤にする上条は眼を合わさない……。

「私が居ると居心地悪かったんだ……」

「え？ 彼女が居ると居心地悪かったんですか？」

「……、」

「悪かったんだ」

「悪かったんですか？」

重なる追及の声。

それらは上条当麻を追いつめる――

真つ赤な顔が見られない様に天井を見上げながら、胡坐をかいた足をチョコチョコと動かして細やかに逃げる上条を布団から出て来たインデックスを親子亀の様に背負ったセイバーがハイハイで追いつける……。

「~~~~~ッ」

「ム~~~~~！」

はつきりしない上条に痺れを切らしたのか、未だその目に涙を溜めたインデックスが――

「？ インデックス殿？ 何故八重歯が光る程大口を開けるのです？ はしたないでS」

ガブリ！！

——上条達が世話になるアパートから600m程離れた、雑居ビル……。

「……………」

その屋上に居座る、啞え煙草の魔術師『ステイルⅡマグヌス』は
双眼鏡から目を離し、600m先を見つめ続ける——

「彼女に同伴している少年の身元を探りました。インデックスは？」

「……生きてるよ」

その脇に凜と立つ、『令刀』を携えた美女『神裂 火織』に振り
返らずにステイルは応える。

「……それで、あの『右手』は何だった？」

ステイルは双眼鏡を仕舞い、代わりに懷からライターを取り出す。

「少なくとも、『魔術師』や『異能者』の類ではないとしか……」

「……おいおい、まさかアレが『ただの高校生』とでも言うつもり
かい？」

ライターで煙草に火を付けながら、その童顔をウンザリといった
表情に歪ませるステイル。

「……止めてくれよ、僕はこれでも24のルーン全てを解読し、新
たに6つのルーンを生み出した魔術師だ。『サーヴァント』ならま

だしも、何の能力ちからも持たない『ただの高校生』に『魔女狩りの王』
を退けられる程、『世界』は優しく作られちゃいない……」

「そうですね……。寧ろ問題なのは、彼の実力が『ただの喧嘩っ早いダメ学生』という分類カテゴリになってるという事です」

ステイルは物思いに耽る様な表情で紫煙を吹かし、苦渋を舐めさせられた昨晚の戦闘まけいくさを反芻する。

インデックスの助言一つで戦術を組み立てる思考速度とそれを実行する行動力……それだけならまだ脅威には成り得ない……。

それに加えて、あの正体不明の『右手』と『サーヴァント』と名乗るあの『騎士』だ……。警戒しない訳が無い……。

「なあ神裂……この極東にはどの位の魔術組織が実在するんだい？」

インデックスの傷の治療が魔術によるものなら、情報の意図的な封鎖さえ有り得る。

ステイルの抱く疑念は正に杞憂であった。当麻自身、『魔術』に
関しては素人もイイ所であり、彼の右手が持つ『幻想殺し』イマジンプレイカーは他の
『異能の力』にぶつからない限り、全く効力を発揮しない為、どんな機械が（……）測定しても（……）『無能力者（レベル0）』なのだ。

情報の封鎖などステイルの考え過ぎ……封鎖しなくても情報ソース自体が『無い』のだから……。

しかし、それをステイル達が知る由は無い――

「学園都市で動くとなれば、何人も理事会のアンテナに引っ掛かる筈ですが……」

敵の戦力は未知数……対して此方の増援は無し……。と、神裂は冷静に現状を分析するが――、

「それは違う……」

「？」

そんな折にステイルが割って入ってくる……。

「『未知数』じゃなくて『一定値以上』だよ……神裂。あの『セイバー』の存在がその『一定値』だ」

指に挟んだ煙草を弄るステイルの言葉につられ、神裂は視線を600m先のアパートに移す。

彼女はそもそも双眼鏡など使わなくとも、両目で視力8・0を誇るのだ。故にこれ程離れた位置からでもアパート内のインデックス達の様子は問題無く分かる。

そんな神裂の双眸に映るのはツンツンとした黒髪の少年に頭から噛み付くインデックスとそんな彼女をどうどうと宥める中性的な少年の姿……。

神裂が、その内の中性的な少年の方を視界の中心に捉えると――

「あの少女がステイルの『魔女狩りの王』イノケンティウスを退けた『サーヴァント』ですか……？ 正直な話、私は未だに信じられないのですが……」

「僕もさ……しかも、どんな霊装を使ったかとか、『サーヴァント』云々以前に、まさか『女』とは思わなかったな……」

……やはり遠目では『女』にしか見えないのか、ステイルと

神裂もまた『彼』を『彼女』と勘違いしている。だが、重要なのはソコでは無い……。

「仮に『サーヴァント』がハツタリだとしても、『イノケンティウス魔女狩りの王』を一時的にでも無効化する程の霊装に……それを難なく扱えるだけの実力……コッチは完全に『強敵』の分類カテゴリーだな……」

そう言うときステイルは煙草を咥え、その先を橙色に染め、紫煙を吹かす。

「加えて、あの少年の思考速度と行動力が掛け合わされば、危険度は更に上昇……。ステイル、貴方のルーンには先の戦闘で防水性の致命的な欠点を指摘された、と聞いていますが……？」

「それについてなら問題無い……」

ラミネート
防水加工した、とステイルは懷から数枚のトレーディングカードらしき物を取り出し、奇術師の様に神裂に披露する。

「……ま、これも気休め程度にしかない、かな……」

「？ ……珍しく自信が無いですね？」

「それ位油断出来ない相手って事さ……彼女……」

紫煙を吹かしながら、ステイルは肉眼で見えもしないインデックス達を見つめ続ける……。

「……ステイル……まさかアレが本当に『サーヴァント』だとしても？」

「？……彼女自身はそう言ってるけど、何だい神裂？まるで僕が『そうであって欲しい』と思ってる様な口ぶりだね？」

「……………いえ、ステイル。貴方がそう思っているのは『サーヴァント』では無く『聖杯』の事では？」

……………、

ステイルの煙草から灰が落ちる…………。

「……………あれは誰だっと思って思うものさ……………あんな『夢物語』はさ…………。」

「……………そうですね。アレは夢を追いかける『魔術師』の更なる夢想……………文字通り『夢のまた夢』……………あんな物があるなら、世界は誰も苦しむ筈は無い…………。」

つまらない事を訊きました。忘れて下さい…………。

神裂はステイルに謝罪するが、ステイルは目も首も動かさない。ただ遙か遠方のインデックス達をボンヤリと、しかし真っ直ぐと見つめ続けている…………。

「(……………『現実』を斬り裂く……………か…………)」

ステイルの表情は変わらない…………。昨晚の忌々しい相手の言葉を反芻してもそれは変わらない…………。

彼はただ、楽しそうに過ごすインデックスの事を見つめ続けていた…………。

「(……………斬り裂けるものなら、僕だって…………！)」

「……………、まあ確かに……………、彼女の戦闘力が無視出来ない要素と
いうのは……………!!」

そんなステイルに向けていた視線をアパートに戻した神裂は凍り
付いた……………!

アパートはさっきから同じやりとりが繰り返されている……………。
ツンツン頭の少年にインデックスが噛み付くという微笑ましい光景
……………。

だが、問題はもう一方の少年（少女と認識）だった――

「（此方を……………見て……………!!?!）」

彼（彼女と認識）は今、神裂達の雑居ビル屋上に視線を向けてい
る……………。しかもただボンヤリ見つめる様な視線では無く、キツと睨
み付ける様な視線で――、

「ステイル、感付かれました」

「!?!」

場所を変えましょう――神裂がそう言った瞬間には、二人の
姿は雑居ビルから消えていた――
残っていたのは、ビル風に攫われて行く紫煙の一端のみであった

「ガブガブ~~~~ッ!!」

「あだだだだだ!! ギブギブ!! インデックス姫どうかお許しを
オオオオ!!!!」

舞台は戻ってボロアパート……。

今だインデックスによって制裁を加えられる上条……。

先程までそれを宥めようと必死だったセイバーだが、今ではそんなやり取りを尻目にアパートの窓の遥か遠くを見据えている……。

その双眸の鋭利さは、普段の柔和な輝きと打って変わり、標的を捉え、獲物を狙う鷹の目を連想させた。

「……………」

セイバーは何も喋らない……。

その視線の先の、今は消え失せた“敵意”の主をただ見据えるの
み――

そう遠くない日、再び起こるであろう戦いを予感しながら――

!

「ちよちよちよ、ちよつとセイバーさ〜ん!! 青空なんか見てない

で上条さんをこの不幸から早く助けろ……アダダダダダダダ！
「！！！！」

氷解（後書き）

原作の感動を損なっていないかハラハラしています……
改善点等があれば、教えてくれると嬉しいですよ……

名前

——結局、買い物から戻って来た小萌先生は、何の事情も訊かずに俺達をアパートに泊めてくれた……。買い物に夢中で忘れたのか、それとも全部忘れた事にしてくれたのか、それは訊いていない……。自宅も全壊状態で、行く所の無い俺達にとっては感謝に言葉も無かった……。

——きつとお節介な先生の事だ……。前者でも後者でも、後でやっぱり相談したって『どうしてもっと早く言ってくれなかったんですか！？先生キレイさっぱり忘れてました！』とぷりぷり怒りながらも喜んで力になってくれるだろう……。つっても、どの道先生をこれ以上巻き込む気は、俺にもインデックスにも、きつとセイバーにも無いだろうけど……。

——小萌先生と言えば『令呪』の事なんだが、見られたら見られたでその説明が面倒そうなので何とか隠そうとしたんだがしかし……。結局その隠す物が見つからず、小萌先生に見られない様にするしか無かった……。なるべく『令呪』が刻まれた右腕の甲を小萌先生の視界から外し、極力他に注意を向ける様に気を配った……。

——食事中は箸を持つという関係上、嫌が応にも右腕の甲が見えてしまうからどうするか困ってたんだが、ソコはインデックスが突破口になってくれた。外国人である彼女は箸の使い方など分かる筈も無く、それがお節介焼きな小萌先生の注意を惹き付けてくれて、その間に食べ終わる事で難を逃れたのだ……。

——全く……。こんなつまらん事で頭を悩ますなんて………
…不幸だ………。

かくしてその後、私、上条当麻は二人が寝静まった夜、
という僅かな時間の内に俺は（気が動転してて忘れてた）持ち合
わせのハンカチを巻く事で『令呪』を隠す事に成功したのであった――
『上条 当麻の隠し事奮闘記』完――！

―― だったら良かったんだが……、どうも御天道様おてんとさまは波乱が
好みの様だ……

「おっふる♪ おっふる♪ お・ふ・ろ〜♪」

小萌先生のお世話になり始めて3日……。

その晩、『病人』という分類カテゴリーから寿退社を果たしたインデックス
針のムシロが白い修道服に身を包み、上条と一緒に夜の歩道をテクテクと歩い
ていた。

「おっふる♪ おっふる♪ お・ふ・ろ〜♪」

そんな彼女が両手に抱えるのは、その鼻唄にそぐう、シャンプー、
タオルにアヒルの玩具といった、風呂の『三種の神器』を詰め込ん
だ洗面器サイズの風呂桶。上条もまた似たような物を小脇に抱え、
インデックスの後に続く様にテクテクと歩いている。

「（……嬉しそうだな……コイツ……）」

健康を取り戻したインデックス姫の最初のご希望、それは『風呂』
だった。

小萌先生のボロアパートでは風呂は『管理人室のものを借りる』か『最寄の銭湯まで行く』かという選択に迫られる。今回はインデックスたってのご希望で後者の方を選択。

そんな訳で、今の上条当麻はそのお気楽姫の付き添いも兼ねて、その『銭湯』行きに御相伴させて貰った訳である。

「(……アイツも来れば良かったのによ……)」

アイツとは勿論、この場に居ない『剣の騎士』、セイバーの事……。

この3日間、彼の姿は見ない……。あの『学園都市』じゃなくても現代の街じゃ何処でも目立つような甲冑で出歩いたら、嫌が応にも噂かニュースになったりすると思うのだが、今の所は何の音沙汰も無い……。……或いはどっかの大学の新型ロボットみたいな扱いとか受けてたりして……。

知り合ってまだインデックスよりも間もないが、彼のあの分かり易い程従順な人格からすれば、きっと自分達の為に周りを警戒してくれてるのだと思う……。そう思うと気が引ける……。

……といっても、姿を見せないのであれば仕方が無い……。……という事で上条は妥協し、インデックスと二人きりで『銭湯』へ赴く事となり、現在に至るといふ訳だ……。

「(……ま、3日前の事を思い出すと、アイツ、忘れた頃に突然現れたりしただけだな……)」

3日前、窓に張り付くというセイバーの奇行を思い出し、フツと笑みを零す上条はそう思うと、視線をインデックスに向ける……。そのタイミングを狙ったかの様にインデックスがフワリと長い銀髪を広げながら振り返る。

「とうま♪　とうま♪」

「ん？　何だよ？」

「何でもない、用が無いのに名前が呼べるのって、何か面白いかも♪」

布団で寝込んだ病人が嘘の様にイキイキとして上条に懐いてくる。そんな変わり様にやや呆れつつも満更では無いといった表情を浮かべる当麻……。

「とうま、こもえが言ってたんだけど……、」

『ジャパニーズ・セントーには、コーヒー牛乳という物があって、風呂上りにそれを――、』

――　こう、（グッ）

――　やって、（グッ）

腰に手を当てて飲むのです!!』

『お~~~~~~~~!!　』　パチパチパチパチ

「……コーヒー牛乳って何？　カップチノみたいなもの？」

「んなエレガントな物『錢湯』にゃ無え！　でもまあ、広い風呂っ

ていうのはある意味お前には衝撃的かもな……」

「お前の地元イギリスって狭っ苦しいユニットバスがメジャーなんだろう？ と上条は本場イギリス人インデックスに確認するが、即答すると思われた彼女は首を傾げて――、

「んー、その辺りはよく分かんないかも。私、気が付いたら日本コッチに居たしね、イギリスむこうの事はちよつとよく分かんないんだよ」

「うん、どおりで日本語ペラペラな筈だぜ……」

日本出身だったのか。と、上条は合点がいった様な表情となるが、インデックスが即座にそれを否定する。

「ううん。そういう意味じゃないんだよ。私、生まれはロンドンで、聖ジョージ大聖堂の中で育って来たらしいんだよ。どうも、日本コッチに来たのは1年位前の事らしいんだね」

「らしいって？」

インデックスの不自然な言葉遣いに上条は違和感を覚えるが――

「記憶が無くなっちゃってるの、1年分位の」

それを聞いて、彼は絶句する――

「最初に目を覚ました時は、自分の名前もつい昨日の事も思い出せなくて、でも『禁書目録インデックス』とか『魔術師』とか、そういう知識ばかりが頭の中をグルグル回って、怖かった……」

普段通りの明るい口調で話すインデックスだが、記憶を無くしてから今日まで、決して明るい物では無い事位は聴き手にも簡単に想像がつく……。だが、話し手である彼女のこれまでの経緯の想像は自分に及ぶものでは無く、また及ぶとしても、想像するのは彼女に失礼だとも上条は思った……。

そこまで考えて、上条はある可能性にハッと行き着く――

「――じゃあ、その記憶を無くしちゃった理由も分からねえってコトか!？」

「うん、そうだね……」

彼女は普段通りにそう答えた――

「……………」

そこは『学園都市』のとある大手ビルの屋上――、

……といっても、そこに子供が喜びそうな『屋上遊園地』がある訳ではないし、あるのは空調機器や給水タンク、そして赤く点滅して存在をアピールするアンテナ位――それでも『没個性』なビルな事には変わりはないが……。

そこから俯瞰すれば『学園都市』夜の摩天楼を眺望でき、気が遠くなってそのまま空を飛べそうだななんて錯覚を覚えてしまいそうだ

そんな質素な屋上に『異質』は居た^{あった}

「……………あつた……、あの魔術師^{メイガス}のルーン……」

その異質とは、『屋上に目一杯貼られた派手な色使いのトレーディングカード』と『白金に輝き、それでいて派手で無い清純な印象の騎士甲冑』である。何ともシュールな光景だが、それを気にする様な人目はここには無い……。

セイバーはこの3日間、人目に付く地上には一度も下りていない。その少年的な脚の跳躍でビルからビルへと渡り、昼夜問わず人で溢れる学園都市の摩天楼を疾駆して回っていた。無論、上条とインデックスを守る為、彼等を狙う魔術師を警戒しての行動である。

「(……かと言って、人様を無闇に騒ぎ立てて、マスターに迷惑を掛ける訳にもいかないしな……)」

それがセイバーが地上に下りない理由だった……。甲冑姿で街中を闊歩してたら、『学園都市』で無くても目立ち過ぎる事位はセイバーも心掛けているつもりだ。それは結果として『敵への情報漏洩』に繋がるかもしれないのだ。気を付けない筈が無い……。

「これで4箇所目……しかもかなり広域に張り巡らしている様だ……これは全部回収するのはとてもじゃないけど……」

無理だな……と諦観に満ちた独り言を呟くセイバー。誰も聞く者の居ないその呟きはビル風によって掻き消される。

「これまで回収して来た所から考慮して、範囲は直径2km前後、

しかも目立つ所と目立たない所の両方に張り巡らす事で、剥がされた時の穴埋めも兼ねた配置の仕方をしている……中々勉強家な『魔術師』だな……」

ルーンを1枚1枚丁寧に剥がしながら、セイバーは相手の手腕を持ち上げる。

「それにしても、これだけ大掛かりな下準備なんて、一体どんな『魔術』を使うつもりなんだろ？」

専門家の『キャスター（魔術師）』のクラスじゃないセイバーでは相手魔術の処理にも限界がある……。セイバーは一瞬、自分にキヤスターの素養があればとも思ったが、それは詮無き事と割り切り、ルーンの処理に専念する。

「それに『魔術師』の目的はインデックス殿一人の筈……。それなのにこの徹底ぶり……。まさかマスターまで標的に……。……は！！」

そこまで考えて、セイバーはある重大なミスに気付いた――！

『サーヴァント』にとって、それは致命的ともいえるミスを――！

「僕……、マスターの名前訊くの忘れてた………」

間。

「何たる……不忠………、」

ガクツと膝をつくセイバー――

手放したルーンのカードが宙を舞う――

ビルの下 of 自動車が五月蠅く聞こえる静寂だったという――

そんな自動車の河川の下流に――、

「ふーっふーっ………たく、噛むだけ噛んで行っちゃまいやがって……」

歯型だらけの上条当麻が居た――

歯型を付けた犯人はともかく、何故歯型だらけになっているかという、話は数刻前に遡る――

――『銭湯』に行く途中、インデックスが『記憶喪失』だっ

た事を聞いた上条は、その原因が十中八九、彼女を追っていた『魔術師』にあるんじゃないかと思ひ始め、その考えていた間の沈黙がインデックスの気に留まったらしく、彼女が訊いて来たのだ――

『?　とうま、怒ってる?』

『……怒ってねえよ』

少なくともインデックスには……。

『……何か気に障ったなら謝るかも。とうま、何キレてるの? 思春期ちゃん?』

『その幼児体型だけは『思春期』とか訊かれたくねえよな、ホント』

『む。何なのかなそれ。やっぱりとうま怒ってる様に見えるけど……それともアレなの? とうまは怒ったフリして私を困らしてる? とうまのそういうトコは嫌いかも』

『……、あのな、元から好きでもない癖にそんな台詞吐くなよな……。いくら何でもお前にそこまでラヴコメっぽい素敵イベントとか期待してねえから……って、え?』

『………『え?　あの……;』………、』

『何で上目遣いで黙ってしまわれるのですか……姫;』

『………、とうま!』

『へ?……;』

『だ い っ き ら い!!!!』

ガ
ブ
リ
!!

——そして現在に至る……。余程上条のお味は姫の口に合ったと見えるが、その被害者はイイ迷惑であった（同情する者はいないが……）。

「……やっぱり無理矢理ギャグに持って行こうとしたのが失敗だったか？」

おかげで姫は機嫌を損ない、先に『銭湯』へと行かれてしまった……。上条は『まあ合流先は一緒だし……』と樂觀して、一人テクテクと街路を往く……………

「痛テテ……おっとやべ、ハンカチずれてら」

菌型を眺めながらハンカチの緩みに気付いた上条はいそいそとハンカチを縛り直す。その際、隠していた竜型の『令呪』がチラリと見え、それが当麻の脳裏にある人物を連想させる。

ある人物とは勿論『セイバーの事』だ——

インデックスと同時期に当麻の前に現れた、身元不明の少年騎士

インデックス曰く『聖杯によって呼び出されたサーヴァント』――

ステイル||マクス

あのいけ好かない炎の魔術師に真っ向から、それも寸分も怖れを抱かず立ち向かった勇敢なる騎士――

兜を脱いだら、そんな英雄の如き功績が嘘みたいに思えて来る程柔らかな、それこそ女の子の様な笑顔を浮かべる可憐な美少年――

思い出すのは、公園で一人佇む上条にだけ向けられた、月の如く輝く天女の微笑み――

「(……………)って、イヤイヤイヤイヤ!!!! 何考えちゃってんの上条さんってばっっ!!! アレ男だからっっ!!! 男性だからっっ!!! 男の娘と書いてオトコノコだからっっ!!!」

……誰が聞いている訳でも無いのに、上条は顔を真っ赤にして頭の煩惱を振り払う。

「……でも、あれは男色^{ゲイ}でなくても……………くっ! セイバーさんってば恐ろしい娘」

……振り払った先にも、脳裏に浮かぶのはセイバーの美貌――
、そんなに溜まってんのかと、上条は自分の浅ましさを侮蔑
しつつ、男色でもない男にそんな感慨を抱かせるセイバーを末恐ろ
しく思った。

「……止めた止めた！！　こんな下んねえ事考えるなんて
きつと上条さんってば疲れてんだ！！　とっとと風呂かつくらって
リフレッシュしよう！　そうしよう！　うん、それがいい！！」

雑念だらけの思考を無理矢理中断させると、上条は目先の『銭湯』
の為、目の前の交差点の横断歩道を渡る事に専念する事にした……。

……のだが――、

「ん？」

――それは、横断歩道の真ん中で気付いた――

「……………、そーいや『令呪』付けたままで銭湯入れんのか？」

――ふと思い立った。

この『令呪』、知らぬ人が見ればただの『刺青』である。
そう、極道がする様な『刺青』である。

そう、学生の街『学園都市』には比較的縁遠そうな『刺青』である。

そう、………銭湯で他の客が怖がるからお断りされている――
『刺青』である。

「……………」
「……………」

そう、未来には、覆せない不幸があった。

「……あー……、「ガクッ」不幸だ……」

遣る瀬無い不幸を胸にガクリと肩を落とす上条。

それでも歩みは止めない。何時も通りに膝をつかない。

そんな事をすれば、他人にも迷惑だし、何より自分も危ないからだ。

何故ならこの場合は、人が行き交う天下の往来――横断歩道のど真ん中なのだから――

「ん？ あれ？」

……………その筈だった――

辺りを見渡す――

先程まで煩く走っていた自動車が無い――

歩道を行き交っていた人影が無い――

店などの建物に光が有っても、人が出て来る気配が無い――

赤と緑の信号機が意味を成さない――

その違和感に立ち止まっても、迷惑の掛かる人が――

「……………居ない……………？」

この世界に『自分しか居ない』と錯覚した――

そう、錯覚したのだ――

「……………ルーン……………」

「！」

背後からの刀の様に怜悯な声が、上条の背筋を走る――

その声は、上条の錯覚と払拭すると同時に、彼を背後に向けて振り返らせる暗示の様だった――

「……ステイルが人払いのルーンを刻んでるだけですよ」

その刀の正体は『長身の女性』であった――

高い位置で結ったポニーテールの長髪、鋭い目つき、整った顔立ちによくふかな体付きは『美人』という形容に足るものだ――

だがその格好が中々に奇抜だった。上着の半袖シャツは胴を捲し上げてヘソを出し、穿いているジーンズも左脚、しかも付け根からバツサリ切り落とされて、そのおかげでその細い腰と脚があられもなく外気に晒されている――

だが、それより何より目立つのは、拳銃のホルスターの様な物にぶら下げた、その黒塗りの鞘に納められたバカ長い長刀だ。長身である彼女の身長よりも長いそれは、絶対にアクセサリーの類では無いだろう……。それにしてもデカ過ぎる……。

「かみじょうとつま神淨の討魔、ですか……………良い真名です」

「――てめえは……………!?」

上条は女性に向けて問う。彼女は答えた――

「『神裂 火織』、と申します」

その声は背筋を震え上がらせた

名前（後書き）

うゝむ、やはり原作沿いはつまらないでしょうか？

それからお知らせです。

10月も残り僅か……月が変わったら一月程休載致しますので、その点宜しくお願いします。復帰は一応12月の予定です。

ご意見・ご感想も待ってます

疾風ノ怒濤（前書き）

神裂戦に平行してオリ戦闘です。
上手く書けてるかは別問題……

疾風く怒涛

「何たる……不忠……、」

ガクツと膝をつくセイバー……、

手放したルーンのカードが風に攫われ……、

上昇気流に乗って――、

「やだな……大事に持っていてくれよ」

「！」

――旅立とうとして、元の持ち主の手中にパシッと収まる……。

セイバーが振り返った先、貯水槽の隣に煙草を咥えて腰掛けるその男は――

「あの時の『魔術師』……！！」

兜を被っていなかった為、セイバーの澄んだ声は夜の摩天楼によく通った。

「ステイルⅡマグヌス、魔法名はFortis931（我が名が「最強」である理由をここに証明する）だ……紹介してなかった……っけ！」

飄々と自己紹介……と同時に、ステイルは受け止めたルーンのカードをセイバー目掛けて投げつける。風切り音を伴ったそれをセイバーは首の動きだけ難無く避け、カードは屋上の床にピタリと貼り付く。

「……、」

セイバーは口を噤む。

自らも騎士の端くれ。相手が名乗りを上げた以上、自分もまた名乗り返さねばならない。

だが、セイバーは――、

「……ステイル、と申しましたね。真に申し訳ありませんが、我が名乗りはどうか控えさせて頂きたい。」

「？ 名乗るも何も君は『セイバー』……ああ、成程。君は『英霊』だったね」

セイバーの言葉に疑問に思うステイルはすぐに合点がいった。3日前、セイバーは自らを『霊長の英霊』と言った。それはかつて『人間』として生きた生前という『過去』を持つ証拠。ならば、セイバーという名前が『真名』な筈は無い。

では何故、セイバーは名乗りを拒んだのか――、

「本来はここで名乗りを返すのが騎士の礼儀であり、名乗らずは己

と主の名誉毀損となりますが、生憎とこの身は我が『真名』を知られては主の不利に繋がる危険があります故……。此方の都合ばかりですが、この身勝手な無礼と不遜、どうかご容赦を……」

——と言って、セイバーは腰を折り、恭しく頭を下げる。

「……………」

それを一瞥したステイルは、

「名より実を取る、という訳か……って、君の都合なんてよくは知らないけど、まあ気にしないでくれ。僕にとっては気にする所じゃない……」

飄々と言ったのけた。

名乗りに『名実』が絡めば、その両方を取る事は難しい。

本来、名乗りとは互いの名を明かし、正々堂々を誓う礼儀……。『名』しか絡まない筈なのだが、そこに『名乗ってはいけない』という『実』が絡めば、そのどちらかしか取れないのである。

かの白鳥の騎士ローエングリン宜しく『名を知られてはいけない』という誓約が存在した前例もある位だ。

「痛み入ります。では、ステイル卿……貴方が此処にいるという事は、僕と戦いに来た、と解釈しても？」

「フツ……『卿』だなんて、僕はそんな大層なモンじゃないよ……ま、その通りさ……」

尤も……、

ステイルは咥え煙草を手に取り、真上に向けてヒュン、と投げ捨てると――、

「正しくは……『君達』、とだけど……」

パン

投げられた煙草が破裂すると同時に変化が起こった……。

「!？」

聞こえなくなった……。

ビルの下で五月蠅くて止まなかった自動車の排気音が、ピタリと止んだのだ……。

不意にセイバーはビルの俯瞰を覗き込むが、その自動車の河川と化していた道路には一台の光も無い……。車の光が消えている……。

その一方で、店などの建物の光が人の存在をアピールするが、その外……屋外には全く人影が見られない。

夜の帳に覆われた街が、その呼吸を止めていた――

セイバーは新しい煙草を取り出すステイルの方へ向き直る。

「『人払い』による各個撃破、ですか」

「お見事正解……向こうは同僚の神裂が行ってる……あの少年でも彼女にはきつと……いや、絶対勝てない」

「……ご説明、感謝します」

セイバーは魔力で形成した兜を被り、そのキツとした目付きの顔を覆い隠す。彼なりの頭のスイッチの入れ替え方だ……今この時、彼の頭脳は完全に『戦闘モード』へと切り替わった。

「おや？ 中々愛らしい顔だったのに隠すのかい？ 顔を晒したままなら、僕も攻撃を躊躇するかもだけど……？」

「？ ……どういう事ですか、ステイル卿？」

「いくら敵でも『女性』相手なら手加減する……僕も一応は英国紳士の端くれだからね……尤も、君相手にそんな余裕は無いとは分かっているし、被ってくれた方が僕も好都合なんだがね……」

いや、心理的に。と語尾に付け加えるステイルだが……、

「……ステイル卿」

「ん？ なんだいセイバー君？」

「僕は男です」

「……………えー……………」

テンプレな反応のステイル。煙草に近付けたライターの花がシュポツと消えた……………。

「……………とにかく、貴方に構っている時間が惜しい！一刻も早くマスターの元へ……………「行かせる、とでも？」何！？」

佩剣をステイルに向けて抜き放つセイバーの背後、ビルを登って来た橙色のソレは現れた——、

「■■■■~~~~~~~~~!!!!!!」

「！」

「リベンジマッチ雪辱戦だ『イノケンティウス魔女狩りの王』……………。遠慮は要らない」

質素なビルは松明トーチとなって、夜天を赤く染め上げた——

——その数分前、

「——てめえは……!?!?」

「——『神裂 火織』、と申します」

『学園都市』の交差点にて、上条もまた、敵に遭遇していた。

「できればもう一つの名は語りたくないのですが……」

「もう一つ?」

「魔法名ですよ」

対峙する女性『神裂 火織』の言葉に上条は戦慄する。

魔法名……魔術師の間における旧き因習、上条が最近知った『魔術』サイドの知識の一つ。それから連想されるのは、自分とセイバ―が自宅前で最初に戦った、あのいけ好かない赤毛の男の顔——

「アイツと同じ……魔術結社の……!」

神裂に聞こえない声で呟いた。

「率直に言います。魔法名を名乗る前に彼女、インデックスを保護したいのですが……」

「……嫌だと、言ったら？」

神裂の冷たい声に怯まず、上条は右手で拳を作って自分を奮い立たせる――

その時だった――

ドン　！

「！？」

花火の様な破裂音が夜の街に鳴り響く。

その音につられた上条が夜空を見上げると、そこには空を赤く染め上げる松明^{トーチ}の光が見えた……。

「……………私の場合は少々異なりますが……………」

まあ、ああなりますね。と、見向きもしない神裂は淡々と答えた――

「まさか……………イン、デックス？」

上条の脳裏に最悪の映像^{ビジョン}が映る……………。

その歩みは無意識だった……………。

一步、また一步……………踏み締める度に早くなるそれを――

——一陣の風がせき止めた……

「!?!」

その風は上条を通り過ぎ――、

ズバン!

という、何かが真つ二つにされる音が後方から聞こえてくる。
だが、上条は振り返らない、振り返……れない……。目の前でその長刀を居合い抜く神裂から目を逸らせない……。

少しして、ズズンツという地面か何処かに大質量の物体が落ちる音が聞こえ、ようやく上条は振り返る。そこには、羽根の一部が綺麗に欠けた風力発電のプロペラ機が見え、その羽根の一部(だったもの)は更に奥に見える歩道橋にグツサリと突き刺さっていた。

カマイタチ………上条の脳裏に最初に浮かんだのがその単語だった。

あの長大な刀が空気を斬り裂き、真空の刃を作ったのか、というフィクションじみた憶測を上条は立てるが、確信を持つには至らない……。

「目を背けないで下さい。命を散らすのは貴方です」

チン、と鞘に長刀を納める神裂の声が上条を自分の方向に向き直らせる。

「……もう一度問います。魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが……」

「な……何言ってやがる……お前ら相手に、降参する理由なんて……！」

言動に反して膝が啞う……。上条は脚を何度も擦るが、それでも震えは止まらない。

「……………何度でも問います」

七閃。

キイイイイイイイイイイイ

「っうわっ!!?」

神裂が長刀に手を掛けた瞬間、その手が残像を伴ってブレる。それと同時に甲高い金属音が鳴り響き、目の前の地面を斬り裂いていく。

全身を持って行かれそうになる攻撃だった。その余波に耐える上条……。

やがて耳障りな鋭い音と風圧は止み、上条はその交差点に起きた惨状を目の当たりにする。

「……私の『七天七刀』が織り成す斬撃『七閃』は、一瞬と呼ばれる間に七度相手を殺せるレベルです」

それを人は『瞬殺』ないしは『必殺』と言うでしょう。誇るでも

無く、神裂はそう言った。

アスファルトで覆われた地面は、巨大な獣にでも切り裂かれたかのような刀傷が上条に向けて奔っていた。白塗りの横断歩道も見事に両断され、自分が生きているのは相手の故意であると思わざるを得ない……。

先の攻撃が奏でいた金切り音の音楽と相俟って、その7条にも及ぶ傷跡が五線譜を連想させる（線は2本ほど多いが……）。

「（くそ……一発も見えなかった！ だけど、この右手で触れさえすれば……！）」

右手を握り潰す勢いで拳を作る上条。

その仕草が目に入ったのか、神裂が語りかけてくる。

「ステイルから話は訊いています。『貴方の右手は、何故か『魔術』を無効化する』と……。しかし逆に言えば、『貴方は右手で触れない限り、『魔術』を無効化出来ない』のと同義……違いますか？」

全く以て大正解ですよコンチクショー！ と、上条は心の中で手^カの内を読まれている危機的現状に悪態をつく。

「（クソッ！ どうする……思い切って飛び込むか……！？）」

先の『七閃』なる斬撃は魔術によって、居合いのスピードと射程距離を強化したもの……ならば『右手』で触れさえすればそれらを無効化出来る。だが、相手もそれは分かっている筈だから、そうはさせない為に『右手』以外を積極的に狙ってくるだろう……。

……少なくとも、初見で彼女の長刀を抜く様を目の当たりにした上条は、そう考えていた……。

そんな時――、

「(ッ痛! ……!?)」

上条は右腕に、小さいながらも鋭い痛みを覚えた。

上条は何かと思い、右腕を目の前に持って来ると、その皮膚には血の滴る小さな切り傷が出来ており、巻いていた筈のハンカチは、足元で端を適当に結んだ2枚の布きれに成り果てた姿で見つかった。恐らくそれは、先の神裂が放った斬撃に掠ったのだろう。それと同時に、『右腕の甲』に刻まれた『刺青』――『令呪』が外気に晒されていた。

「! (そうだ、セイバー……!)」

それを目の当たりにした上条は、自らの『味方』――セイバーの事を思い出す。

同時に自身を異界に縛る、敵の『人払い』という単語も思い出す。これがある限り、恐らくこの場の人間――上条と神裂――以外の者は誰も介入はしてこないだろう。

だが、彼――あの『剣の騎士』ならば或いは……………。

そう思う根拠も勿論ある。

3日前のステイルとの戦い……彼の魔術をセイバーが無効化したのを上条ははっきり目の当たりにしている。

ならば、同じ魔術であろうこの『人払い』も越えて来れるのでは……………。

……そう希望を抱くが、

「……それが噂に聞く『令呪』ですか……」

「！」

神裂の言葉が上条の頭にガツンと打ち据えられる。

そして、彼女が続けた言葉に、上条は更に絶望する事になる。

「……私は実際対峙した訳では無いので、今だ『サーヴァント』なる物には不信感が拭えません。ですが……」

少なくとも、あのステイルが真っ先に潰しに行くだけの戦闘力はある、という事は分かります……

「！ ちょっと待てよ！ それってどういう……?!」

「……この場で戦ってるのが私達だけでは無い事は、先の爆発で分かっていたのでは？」

最悪だ……。

さっきの爆発がインデックスに対するモノで無いと知った安堵感もあるが、現状における絶望感の方が、今は優先して押し掛かって来る。

神裂が漏らした言葉……それは、此方の増援が絶たれたも同然、という事だった。

ステイルと戦っているセイバーを呼び寄せればステイルが、また、神裂と戦う自分がセイバーの元へ行けば神裂が、どちらか手の空いた方がインデックスの元に向かう余裕を与えてしまおう、という事……。

つまりこれは『現状の手札で目の前の敵を打倒せよ』と言ってる
様な物なのだ――

上条の、無いも同然な手札を使って――

「……喋り過ぎましたね、尤も……」

どの道、貴方を無力化するに越した事は無いのですが……。
刀の様な神裂の言葉と視線が、上条の足を地面に縫い縛る――

だが――、

ドン！

「！」

神裂の背後、道路の奥から聞こえた爆発音が、上条を反射的に突
き動かした――！

何もかも引き千切るつもりで動かす両足でアスファルトを力一杯
蹴る音が、『人払い』された街中に反響する――だが、

七閃。

キイイイイイイイイイイイイ

「ぐわっ!!　ぐう……!!」

再び襲い掛かるカマイタチの円舞曲……。その風圧に吹き飛ばされ、アスファルトの上に転がり往く上条。砕かれた石飛礫が当たり、上条の精神を削り取る。

「……何がそこまで貴方を駆り立てるかは分かりませんが、何度でも問います。魔法名を名乗る前に……!!」

神裂は言葉を止める……。

目の前の少年の目はまだ死んでいなかったからだ……。これ程の力量差……。実力差を見せ付けられて尚、彼はまだ立ち上がる事を止めなかったからだ……!

「ツチツキツシヨオオオオオオオオ!!!!!!」

一手目から変わらぬ突撃。その行為を『猪』と人は形容するだろう。そんな猪に現実を分からせる為、神裂は彼を待った……。

あと一步……。あと一步で目の前の敵に触れられるという距離まで到達した上条。神裂に向けて『右手』を伸ばすと同時に――

キイイイイイイイイイイイン

それを見計らう様に金切り音が鳴り響いた。

その音の発生源は当麻の右手に当たり、そして、めり込んだ。

「な！ 消えなッ！？」

上条の驚愕を他所に、右手どころか右腕までドンドン『赤』に染まって行く……。

腕が引けない……予想もしていなかった事態に上条は咄嗟の行動が取れず、そのまま『七閃』の風圧に吹き飛ばされる。

「……………これで分かったでしょう。貴方と私の差を……」

刀を構える神裂は凜とした立ち振る舞いでその場を動かない……。だが、その周囲には縦横無尽に奔る幾つもの赤い『線』が、上条の血を吸って赤く染まった『線』が、神裂を守る様にして月光に輝いていた。

「くっ……極細の、鋼糸……？」

それを見て、上条もようやく合点が行った。彼女は『魔術』によって刀の性能を強化していた訳では無かったのだ。そうではなく、刀を扱う仕草に隠して、7本もの鋼糸ワイヤーを操っていたのだ……。

「……言った筈です。ステイルから話は訊いています、と」

元より向こうにとって手の内の分かった戦いだ……。そんな戦いにわざわざ此方の手札カードが有効な攻撃などする筈が無かったのだ……。

「じゃあ、その長い刀は『飾り』だって言うのか!？」

「勘違いをしている様ですので訂正させて貰います。この『七天七

刀』は『飾り』ではありませんよ。『七閃』を抜けた先には、真説の『唯閃』が待っています。それに何より、私は魔法名すら名乗っていないですよ」

「……ああ、そうか。アンタ等『魔術師』は魔法名^{ソレ}名乗んねえと『魔術』を使えないんだったな……」

口ではふてぶてしく言うが、内心余裕の無い。

相手の力が『異能』でも何でも無く、ただの『物理現象』なら、上条は自分の身体能力しか対抗手段が無くなってしまう。

上条の切り札は見事に封じられてしまったのだ――。

あまりの不利に苦虫を潰す上条だが――、

「……名乗らせないで下さい少年。私は二度と、あの名を名乗りたくはない……」

月下の氷刃は、ただ慈しむ様に呟いた――。

2

上条と神裂が対峙する最中、また別の場所でも事は起こっていた――

ド
オ
ン
！
ド
オ
ン
！
ド
オ
ン
！

「ハア……ハア……ハア……！」

「ハハッ！ 流石は『セイバーのサーヴァント』！ 中々しぶといじゃないか！」

「貴方こそ！ 昨今の『魔術師^{メイガス}』にしては筋が良いですよ！ いえ、魔術的に」

上条と神裂の戦いが『静』ならば、此方、セイバーとステイルの戦いは『動』であった。

アスファルトが焦げ付く臭いが空間を支配する中、学園都市の道路をセイバーとステイルは駆け抜ける。

道路はアチコチ燃え盛り、その火柱がセイバーを追い掛ける様に勢い良く立ち昇っていく。

電柱や街路樹、信号機すらも破壊され、金属の類を全て高熱によってひん曲げられた彼等の戦闘^{バトル}区域は、戦闘の激しさを物語るには十分過ぎた。

「ホントに貴方は勉強家だ……『人払い』の他にこんなルーンを仕掛けていたとは」

「……『暗示の炎』だ。君相手に正攻法は自殺行為と考えた結果さ」

セイバーが指すルーンとは、道路に限らず、セイバーの進行方向の随所に仕掛けられた無数の『罠』の事……それらに近づけば途端に『魔術』が発動し、巨大な火の手の餌食となる、という代物だ。

かく言うセイバーを追い求める火柱も、その『暗示の炎』のルーンによるモノだ。

「……って、こんなに凝っても『魔術』である以上、『対魔力』を持つ君には決定打は与えられないんだが……」

「……この、二次被害が目的で、ハア、ハア……よく、言えますね……」

「あらバレてた……。ま、そういう事さ」

飄々と煙草を弄るステイルに反して、鎧を纏ったセイバーは息が上がり気味だ……。

当然だ……。セイバーの『対魔力』は『魔術』を防ぐのであって『熱』を防ぐ訳では無いのだから……。

「もうその鎧じゃサウナに居る様なモンだろ？ そんな状態で満足に戦えるのかい？」

「……さあ？ ご想像にお任せしますよ……」

あっそ。と、ステイルが興味の無さそうに呟くと同時に――

■■■■~~~~~!!!!!!」

突如として立ち塞がった炎の巨人が鉄槌を振り下ろす――！

「くっ！」

剣で振り払うより相手の方が速い！ 直感でそう判断したセイバ

「は急いで方向転換し、その鉄槌から難を逃れる。」

正味、ステイルの包囲網から切り抜ける事は、セイバーにとっては本来、何の造作も無い事だった。だがそれは、立ちほだかる巨人『魔女狩りの王』イノケンティウスを排除すればの話であった。

この『魔女狩りの王』イノケンティウスはサーヴァントを相手に善戦する程の力がある。『再生する』という魔術特性もその大きな要因の一つだ。加えて力そのものも単純に強い……。

並のサーヴァントなら手こずる程の『魔術』……それがステイルの『魔女狩りの王』イノケンティウスだ……飽く迄『並の』サーヴァントなら……。

「（一度破られてるからな……慎重に行けよ『魔女狩りの王』……）」

己の最強を証明する者『魔女狩りの王』イノケンティウス。

だが、そんな『最強』の肩書きなど、ほんの数日前からとつくに意味を無くしている。

それはステイルが以前の戦いで、その炎の巨人をセイバーに一度完全に破られてしまっているからだ……。

それを警戒してか、今回の『魔女狩りの王』イノケンティウスは前回の時とは違い、積極的にはセイバーを追って来ない……。

『最強』の名を貶められた汚名を雪ぐ意味も含めたこの戦いで、努力家故にプライドの高いステイルは自身でも驚く程、慢心も油断もしていなかったのだ。

「はっ!!」

セイバーがこの炎の包囲網を抜けようと、ステイルに目掛けて駆け出せば――、

「おっと!!」

ステイルの炎剣がその行く手を阻み――、

「クッ！！」「ゴォッ”グアッ！！”」

それを防ぐ隙に『魔女狩りの王』イノケンティウスが一撃を入れ――、

ド　　ォ　　ン　　！

「ウワァアッ！！！！」

セイバーを『暗示の炎』へと放り込む――

セイバーの標的が変われば、役割が逆になるだけ……それが、今回ステイルが取っている戦法だった。

夏の夜天に向けて火の手が昇る――

そんな中で生きている者が居るなど誰が考えるだろうか――
常人ならば消し炭にされても可笑しくない火力に放り込まれたのだ、普通は無事では居られない――

『地獄の業火』という表現は誰が言い出したのだろうか、この光景が正しくそれだろう――

だが、彼は『常人』でも『普通』でも無かった――

「ハ　　ア　　ッ　　！！」

裂帛の気合と共に、『剣の騎士』は『地獄の業火』を吹き飛ばした――！

剣、盾、鎧……セイバーが携える物全てが焦げ一つ付かずに白金に輝き、辺りの焰を照らし返す――

「……………やれやれまだ力不足か……まあいい、何度でも向かって来るなら、何度でも吹き飛ばすだけさ」

ステイルは掌中に再び炎を溜め、『インケンティウス魔女狩りの王』は威嚇する様に唸り声を上げる。

それに相対するセイバーは、手にした剣と盾を構え直す。

「さて、どうする気かなセイバー？　こうやって僕の相手をしていく内にドンドン君のマスターが危機に晒されていくよ……」

「……………」

「僕としてはこのまま素通りしても構わないけど、さっき僕が言った事を聞いたら、そういう訳にも行かないよね……？」

「……………各個撃破、の件ですか？」

「そう、君達のどちらか一方がもう一方を助けに行けば、僕達の片方の手が空く。そうなれば彼女……インデックスの下へ向かう余裕が此方に出来る、という戦略さ……」

考えただろう？　と自慢げにステイルは言う。

だが、ステイルの言う通り、セイバーは眼前の敵に集中するしか無かった……そうしなければ、マスターを助けに行けても、今度はインデックスに危険が及ぶのだから――、

「……………」

しかし、セイバーは――、

「……………」

そこに一抹の疑問を覚えた――

「……………では、逆に訊きますけど……………」

「？」

「なら、何故貴方は僕が『インケンティウス魔女狩りの王』を抜き去るのを嫌がる様に攻撃するのですか？」

「！」

一瞬、ステイルの顔が強張る……………。

「貴方の言う通り、僕等の戦力は所詮たったの二人。分散した所をそれぞれ相手取る事で、確かに『増援』という手を未然に防ぐ事が出来る……………。仮に僕達のどちらかがもう一方の援護に向かっても、貴方達にはインデックス殿の下に向かう余裕が出来るというアドバンテージが得られる……………けど、」

一拍置いて――、

「……………何だか、やり方が回りくどくないですか…………？」

心中に浮かんだ、その違和感を口にした。

「……………どういう意味だい？」

啞えたままの煙草を指に挟みながらステイルは眉を顰め、平静に訊き返す。

「……………確かに貴方の『魔女狩りの王』イノケンティウスは厄介ですけど、『サーヴァント』の力…………それをよく知ってるなら、魔術師である貴方^{メイガス}を僕に当てる事にメリットが少ない様な気がしてならないんです…………」

「……………フン、勝者の台詞だね、ソレ」

「…………それに、先程のルーンの山があのだビルだけじゃなく、この街の一部を取り囲む様に配置され、『陣地』が形成されているのを僕は見ましたけど、それなら貴方が前線に出て来るのも不自然な気がするんです。術者である貴方が倒されたら、この『人払い』の効果が消えてしまうんですから…………」

セイバーはステイルの先に述べた作戦の穴を『そんな気がする』程度の意識で指摘してみせた。

魔術師にとって『陣地』の存在は非常に重要だ。自分にとって少しでも有利な陣地を形成し、魔術を使える環境を作り出す。魔術師の戦いとは、下準備の段階から始まっているのだ。

故に、その陣地の主である魔術師が撃破されれば、陣地内に施された魔術は全て瓦解してしまう。

「そんな『結界』の主である貴方が前線に出て来るのは、少々デメリットが大きいのでは？」

「……………それで、君は何が言いたいんだい？」

それでも、前線に出て来たステイルは――、

「……………ひょっとしてですけど、貴方達の戦力も限られているのでは？」

それ程までに追い詰められていたと言えるだろう――

「……………」

表情を曇らせるステイルは何も言わない。
ただ彼はセイバーの口上を静聴し続ける。

「……………確かに、僕達の戦力はマスターを入れても僕等二人……………。なら貴方達は僕達を足止めしながらゆっくりインデックス殿を確保すればいい……………けど、其方の戦力も限られているとしたら……………」

貴方達は僕達を足止めしてからインデックス殿を確保しなければならぬのでは？

そのセイバーの指摘はステイルの胸中にグサリと突き刺さった。
セイバーの語った言葉のニュアンスの違いは非常に大きい。

『足止めしながら』と『足止めしてから』

前者はステイル達が時間を稼いでいる間に他の仲間がインデック

スを確保しに行くという場合。しかし、これはステイル側が組織的な人数の仲間を連れている時のみ有り得る場合で、それ程の人数を連れて来ているなら、セイバーの前に立ちはだかるのは『人払いの結界』を形成するステイルであっても、彼を守るもつと他の仲間が居なければおかしい。何より先程のステイルの発言――、

『そう、君達のどちらか一方がもう一方を助けに行けば、僕達の片方の手が空く。そうなれば彼女……インデックスの下へ向かう余裕が此方に出来る、という戦略さ……』

例えハツタリだとしても、この様な言い回しをする必要性が全く無い。

故に、ステイル達の現状は後者の場合、つまり、戦力がセイバーと当麻を相手取るので精一杯な程少数の場合である可能性が高い、というのだ。

「貴方達の戦力は最低でも二人……、ステイル卿、貴方と先程聞いた同僚の二人ですね」

「……この国で言う黙秘権を行使させて貰うよ」

ふてぶてしく笑うステイルだったが、その胸中では忌々しく歯噛みしていた。

敵に戦力を看破された事は予想外だったが、それを表情に出す訳にはいかない。飽く迄無表情を装うステイルだったが――、

「……………、……あの、違いました？」

「（そこで訊くか！）」

……………何故か敵に解答を訊いて来るセイバーの凶太さが、謀らずもそれを崩しに掛かる。

「それともう一つ……」

「（！）まだあるのか……」

不意に仄めかされたもう一つの違和感の存在。

一瞬セイバーの凶太さに呆気にと取られていた事もあり、ステイルの心臓が必要以上に跳ね上がる。

そして、その内容を聞いて――、

「……ステイル卿、貴方は何故、インデックス殿を――自分の仲間を襲うんですか……」

「ッ！！！」

ステイルの無表情は音を立てて崩れ去った――。

「『必要悪の教会』！？」

「はい……それが私達の所属する組織の名前……」

それは、上条がその名を神裂から聞くのとほぼ同時だった……

「貴方達とインデックス殿は……」

「私達とインデックスは……」

「同じ組織の仲間だったんじゃないですか!?(だったんですよ……)」

疾風ノ怒濤（後書き）

きつとこれが今月最後の更新……
また1ヶ月後、生きていれば会いましょう！

守護（前書き）

こんにちは

お久しぶりです

ヌエマルです

前回から、もうホントか・な・り間が空いてしまって、本当に申し訳ありません！！！！

スランプもありますが、それと入れ替わるようにパソコンが大破して、結果一年近く間が空いてしまいました。修理も完了して、既存の小説の手直しもボチボチとやっています。

図々しいお願いですが、こんな駄作者でも頑張りますので、どうかこれからも応援よろしくお願い致します。

追伸

『閑話？』を文章の一部を前話に写して消去しました。よって聖杯戦争の説明は黒歴史に……m（　　）m気まぐれでスミマセン

戦争の説明は別の形で改めて行う予定です。何卒ご了承お願い致します。

守護

まず最初に違和感を覚えたのは、貴方の着ている『神父^{カッ}服』と先程名乗った『魔法名』です……。その2つはそれぞれ、貴方が『神父』である事と『魔術師^{メイガス}』である事を表しています。

『神父服^{カソック}』とはそもそも、十字教の神父が着る歴^{れっき}とした礼^{カトリック}服で、その服を着込む神父とは、『旧教』における『十字教』の『司祭』に当たる役職とされます。この事から、貴方の宗派が『旧^{カトリック}教』だという事が分かる……。

しかし、そうになると、貴方が『魔術師^{メイガス}』であるという点に疑問が残る……。魔術を『禁忌』として扱う筈の十字教の神父が魔術を使うなんて、誰からどう見ても『異端^{イレギュラー}』です。仮にそのどちらかに成り済ましているにしたって、どっちの観点から見てもそれによるメリットが見当たらないんです。

『神父が魔術を使っている』場合、教義を重んじる十字教では魔術を学び、修めれば『異端』と処断され、最悪、極刑に免れない……。逆に、『魔術師が神父をしている』としても同じ事……。教会にバレれば一卷の終わりの綱渡りです……。教会側であるインデックス殿が狙いなら、情報漏洩を防ぐ為にも尚更魔術を使つてはいけない筈だ……。

故に、貴方の所属組織はかなり限定されてくる……。

特例的に魔術の習得が認められていて、その魔術の中に母国語に馴染みのある『ルーン』があつて、教会側^{インデックス殿}に知られても平

気な……十字教に帰属する『魔女狩り』の組織……。

これらの条件に当てはまる組織は、唯一つ………！

それが、

イギリス清教『必要悪の教会』！！

「ステイル卿……貴方達とインデックス殿は……同じ組織の仲間だったんじゃないですか！！」

夜の帳落ちる戦場の闇を、燃え盛る橙色の炎が照らす

対峙する影は、『白い騎士』と『黒い魔術師』

四方へと伸ばす筈の影を、八方からの炎に掻き消される彼等の間を、燃え盛る戦火におよそ似つかわしくない静寂が支配する

「……………」

ステイルから答えは来ない……。

顔を逸らし、炎の様に赤い前髪が垂れ、彼の顔に影を落とす。

だが、その影も口元まで隠すには至らず、トレードマークたる啞え煙草が天に向かって折れ曲がる程、唇を縫い縛っている様までは隠せなかった。

炎の音だけが響く中、やがてステイルがセイバーの方に一瞥すると、その重い口を開き始める……。

「……………何時から気付いていた？」

「懸念は3日前からありました……けど、確信したのはついさっきです」

貴方自身の『英国紳士』って発言を聞いた時から……と、セイバーは言い放った。

「ハハ……“パチ　パチ　パチ” ホント凄いや君……ご明察だ」

最早観念したらしく、ステイルは力無い拍手と賛辞をセイバーに送る。

セイバーはそれに対し、「どうも……」と短く答えるのみ……。

やがて、伽藍堂な街に木霊する空虚な拍手は止み、ステイルはやれやれと呆れた様に首を振る。

「全く……感付かれるなんて夢にも思わなかったよ……。やっぱ隠し事は神裂の様には行かないな……流石、『英雄』様は聡明であらせられやがるねえ……………」

嗤う炎の魔術師だが――、

「……けど、どうしても分からないんです……」

剣の騎士の曇りは未だ晴れない。

「ステイル卿……、どうして貴方が同郷の仲間を襲うのか……その

理由が分からないんです……それに……！」

「……………」

無表情な瞳で相対者を見つめるステイルにセイバーは出掛かった言葉を詰まらせるが、一拍置いてから改めて言葉を紡ぐ……。

「それに、もし今言った僕の推測が正しかったら、僕はこう疑わないといけなくなる……！」

貴方と同郷であるインデックス殿が僕とマスターを騙しているのか、と……………！

「ッ……馬鹿を言うな！ あの子がそんな事をするワケが——！」

「えっ？」

「……ッ、チッ！」

ステイルのその怒声は俯き気味だったセイバーの顔をハッと持ち上げる。

それは冷徹な彼らしからぬ、激情の声だった。

血相を変えて声を張り上げたステイルだったが、己の感情の爆発

にハッと息を呑み、直後、自分の愚行に気付いた様に舌を打つ。気休めに啜え煙草を弄ろうと口元に指先を運ぶが、先の怒号で地面に落としてしまった事に気付き、更に舌打ちする羽目になる。

そんな彼らしからぬ、余りにも落ち着かない様子にセイバーは何かを察し、恐る恐る訊ねる。

「……何か事情があるんですね？」

「……………、……………」

ステイルは逡巡する。

苦虫を噛んだ様な顔は徐々に哀を帯びて行き、炎の奥に見える彼の長身がセイバーにはひどく小さく見えた。

やがて新しい煙草を取り出したステイルは、啜えた一本に火を付け、フウとため息の様に紫煙を吹かす。

その紫煙が風の中に溶け行く頃、彼は意を決したのか――、

「……………完全記憶能力……、それが全ての元凶だ……………」

――その口から、真実を語り始める。

1

――同じ頃、

「完全……記憶能力……、それって確か……………」

「はい、インデックスの脳内に『10万3000冊の魔道書』を納める力の根幹です……………」

夜の学園都市の空虚な路上――、

肌寒い空気の中、対峙する一組の男女――上条と神裂もまた、『インデックス禁書目録』という少女の核心に触れようとしていた……。本人ですら知らない、白い少女の核心に……。

「全ては、彼女があの特異体質が発端なのです……。あの力があるからこそ、私の親友……インデックスは『10万3000冊』という魔道書チカラを読み取り、それらを己の脳に蓄える宿命を背負う事になった……」

神裂の口調は依然として変わらない……。淡々と紡がれるその言葉は、氷の様に冷ややかだった。

まるで周りだけでなく、己の感情すら凍らせようとする様に。

「ああ、アイツから聞いた。つつつても、今でも信じらんねーよ、一度見たモノを残さず覚える能力なんて」

それは上条だけの感想では無い。

凡人であれば、誰もが抱く『信じられない』才能――人はその持ち主を口を揃えて『天才』と呼ぶ。

しかし、そんな非凡な才能が、必ずしもその持ち主を幸福にするかと言えば、

答えは『否』である――

「人間の脳の容量は意外に小さい。ですが、要らない記憶を無意識に忘れる事で脳を整理し、結果、人間はおよそ100年もの長い時間、脳を動かしていられる。だから、人間は生きていける」

ですが、と神裂は一瞬眉を顰め――、

「――ですが、彼女にはそれが出来ない……」

「ッ！」

その逆説に上条は瞠目する。

「街路樹の葉っぱの数や形、ラッシュアワーで溢れる人の顔や人数、雨粒の数と一滴一滴の形、………彼女の脳はそんなどうでもいい記憶であつという間に埋め尽くされてしまう……」

それが『完全』に『記憶』する『能力』――『完全記憶能力』
なのです。

神裂は鉄よりも重く、氷よりも冷たく言い放った。

「ちょ、ちょっと待った！ 前提がおかしいぞソレ！？」

そんな折、矛盾に気付いた上条は感情的に神裂の言葉を遮る。

「アンタ達は同じ組織に所属していながら、何でインデックスを追
い回すんだよ？ インデックスに『完全記憶能力』があるなら、一
年前の記憶や親友だったアンタ達を覚えてねえ筈無いだろ？ な
に、インデックスが俺達を騙してねえだなんて、辻褃合わねえだ
ろソレ！？」

上条の疑念は誰もが抱く物だった。

完全に『覚える』体質ならば、昔の同僚を『覚えていない』とい
うのは明らかに矛盾している。親友だったのなら尚更だ。

問われた神裂は――、

「それは……………」

――と言った所で意味深に押し黙り、伏し目がちに俯く。

さっきまでの毅然としていた彼女の態度や勢いが嘘のようで、一瞬だけ見せたその様子はまるで、神を前に懺悔する信徒の様に上条は思えた。

やがて、神裂はゴクリと固い生唾を呑み込み、意を決した様に改めて言葉を再び紡ぎ始める。

この3日間に於ける――否、インデックスを取り巻く過去の全てに隠れた、余りにも残酷な真実を――、

「それは、彼女の記憶を消したからですよ……私達が……」

「消……した……………」

訳が分からない……。

例え兜を取らずとも、十分に周りへ動揺を示す剣の騎士。

目前の魔術師に求め、そして返って来た解は、それ程に重かったのだ。

「そうだ……。彼女……、インデックスの記憶は、僕達が魔術で消した。此処に来るまで、何回も、ね……」

戦火がゴウゴウと燃え盛る戦場の中で、ステイルは紫煙を吹かしながら、遠くを見つめる。

その一方で剣の騎士――セイバーは、未だ行く手を遮る眼前の魔女狩りの王と対峙しながらも、ステイルの言葉に耳を傾け、彼の一挙手一投足、全ての仕草を注視し――、

そして、凍り付いた――

ステイルの言葉が真実ならば、全てに納得がいく。いつてしまう。インデックスに彼等の記憶が無いのなら、ステイル達からの逃亡も、襲撃も、全てにおいて合点がいく。

「何回も、という事は今回が初めてでは無いんですね……」

絶句しながらも我を保ち、眼前の魔術師が語る真実を嚥下するセイバー――

「……ああ」

炎の奥で佇み、恐らく、初めて胸中を露わにするステイル――

「……ッ、どうしてそんな………!!」

されども真実は、あまりにも奇怪、あまりにも不可解――、ステイル達の行って来た白い少女への仕打ちは、仲間相手にあまりにも理不尽と思える物だった。

「インデックス殿は貴方達の仲間だったんでしょ！ さっきの貴方の様子からも分かる！ 貴方だってインデックス殿を大切に想っている事位……!!」
なのに、どうしてこんな……仲間を傷付ける

真似を!!」

怒りで声が震える。剣を強く握り直す手から、怒りが漏れ出た。騎士として戦うセイバーにとって、ステイルの話は衝撃的だったに違いない。

同僚への攻撃。

それはセイバーから見れば、騎士道を尊ぶ者が最も忌むべき所業

——即ち『裏切り』に他ならなかった。

では何故、目の前の男はあんなにも少女を想っているのか？

その逆賊としては余りにも不可思議な彼の心情が、更にセイバーの脳漿を掻き乱す。

「……フン、『どうして』、か……。僕達もそういう台詞、唾液が枯れる程吐いたものさ……」

鼻を鳴らし、紫煙を吹かすステイルの表情は、何処となくもの悲しい……。

その口から紡いでいく言葉に、一体どれ程の悲しみが込められていたのか……。

「……そうしないと死ぬからさ、あの子は……」

「……………は……………?」

何も知らなかった少年達は、すぐに思い知る事になるだろう

2

五感を切り離された、気がした

世界から、唐突に

神裂から放たれた氷刃の真実

鋼糸よりも、刀よりも、遥かに優れた斬れ味の刃

それは刹那

上条当麻の身体から、魂から、『現実感』を乖離させた

「……………は……、し、死ぬって……………」

それでも上条は、声を絞る。

ようやく絞り出した声は嗚咽にも似ていて、相手が聞き取れるかすら不安になる程に掠れていた。

「彼女の脳の85%は10万3000冊の魔道書の記憶の為に使われています。それは逆に言えば、彼女には常人の15%しか、自由に使う事を許されていないという事……………」

これが何を意味するか、分かりますか……………、と神裂は肩を震わせながら、上条に問う。

「な、何をつてお前……………」

「その15%の脳に記憶を続ければ、その先に待っているのは……………」

分かっている——分かってしまう——データバンク
学園都市が誇る最新式のパソコンにだって記憶領域には限界がある。

データその容量を超える様な記憶は、当然出来ない。故に要らない記憶を消去する必要があるとしても出て来る。

人間で言えば、『忘却』の事だ。

それが出来ない禁書目録の脳に待つ運命、それは正しく——、

——バンク
『死』
——

「……………記憶消去以外の方法は？」

「無いね……あつたらあの子も僕達も今此処には訪れてない……」

「……………何時までですか？」

「うん？ 彼女の制限時間かい？」タイムリミット

あまりの真実に絶句しつつも、セイバーはしかと訊く。

例え、その答えが、絶望に塗れていると分かっているとしても。

例え、その死が、自分の力では覆せないとしても。

「記憶の消去はきっかり1年周期で行う。早過ぎても遅過ぎてもダメだ。そしてそれは」

——あと、3日だ——

「ッ！」

あと、3日……。

短い。短過ぎる。

まるで末期の重病人の寿命……。

「……信じられないだろう。だが事実だ……。今頃、変調を来たしてるだろうね、あの子……。大事無いと良いんだけど……」

物憂げに呟くステイルの言葉にセイバーはハツとなる。

確かにそうだ。頭のパンクまであと3日と迫っている状態が、人にとって良い状態である筈が無い。

にも関わらず、インデックスは微塵も苦しい表情を見せず、不調を訴えず、ただ変わらず、その眩しい笑顔を振り撒いていた。

一体彼女は、その笑顔の裏で、どれ程の苦しみと戦っていたのだろうか。

魔術師にも追われ——、

孤独とも戦って——、

拳句の果て、自分の命まで蝕まれて——、

……………何だ、これは？

小さな女の子に課された運命にしては、あまりにも凄惨過ぎる、
……………過酷過ぎる！

「分かっただろう？ 僕達には彼女を傷付ける意志なんて毛頭無い。
寧ろ僕達でないと彼女の命は救えない……おっと、『英雄』様には
愚問だったかな？」

「ッ！」

ステイルは思い出した様に皮肉を飛ばし、そして『英雄』に向か
って言外に仄めかす。

『お前ならどうするべきか分かるだろう？』と。

『何が“英断”か、分かるだろう？』と――

「引き渡してくれませんか？ 私が『魔法名』を名乗る前に……」

それに……と神裂は言葉を紡ぎ続ける。

「記憶を消してしまえば、インデックスは貴方の事を憶えていませ
んよ？ 貴方がどれだけ彼女を想った所で……」

それはまるで、自分に言い聞かせる様に。

「それどころか、君達も彼女には『10万3000冊を狙う敵』と

しか見られなくなる。僕達と同じ様にね……」

ステイルの語調は飽く迄強い。

「そんな彼女を庇い立てたって、何のメリットも無いだろう？ 主に君の主様^{あるじ}には、さ？」

悲しい決意は未だ揺るがない。

全く異なる戦場で、全く同じ禅問答。

四者が共有するのは、たった一人の少女への想い。

そして、細やかで、残酷な、負の因果がそこにはあった。

片や、自らの『過去』を目の当たりにする『絶望に苛まれた者』。

片や、自らの『未来』を目の当たりにした『希望を碎かれた者』。

前者は憐れみ、後者は苛まれ、両者は結局『絶望』する。

始まりを同じくし、また終わりまで同じくしようとする彼等は『鏡像』。

『可憐な『禁書目録』に導かれ、そして終わって行く『閉鎖^{ウロボ}された運命線』^{ロス}』。

それでも――、

『希望』の歩みは止まらない。

「「ふざけんなッ!!／＼ふざけるなッ!!」」

その心^{オモイ}が、重なる限りは――

3

「!」

拳が震える。

「アイツが覚えてるかいないかなんて関係あるか！
分かんねえな
ら一つだけ教えてやる!!」

気焰が上がる。

「俺は……いや、俺達はインデックスの仲間なんだ、今までだってこれからだって、アイツの味方であり続けるって決めたんだ！ 聖書に書かれてなくなたって、絶対にそうなんだよ！」

瞼の奥が熱くなる。

「何か変だと思ったぜ、単にアイツが『忘れてる』だけなら、全部説明して誤解を解きゃいいだけの話だろ！」

上条の全身に燃え上がる怒りが――、

「何で誤解したままにしてんだよ、何で敵として追い回してんだよ、テメエ等、何勝手に見限ってんだよ！ アイツの気持ちを何だと

「――うるっせえんだよ、ド素人が！！」

「！」

――それ以上の怒号に呑み込まれた。

「知った様な口を聞くな！ 私達が今まで、どんな気持ちであの子の記憶を奪って来たと思ってる！！」

沈着冷静な剣気の殻も、伶俐な言葉遣いの皮も、自身を覆う何も

かもをかなぐり捨てた神裂は、その赤裸々な想いを咆哮に乗せる。
爆発する『感情』が、神裂から取り止めも無く溢れ出てくる。

「貴方はステイルを敵視している様ですが、アレが、一体どんな気持ちであの子と貴方を見ていたと思ってるんですか!? 一体どれほどの決意の下に敵を名乗っているのか! 大切な仲間の為に泥を被り続けるステイルの気持ち、貴方なんかに分かるんですか!」

「……………ッ!」

そのあまりの豹変ぶりに、上条は頭から冷水を浴びせられた様に固まってしまう。

それが、隙となり――、

神裂が跳んだ――、

「フッ!」

「ぐあっ!」

蹴撃。

情けも手加減も無い回し蹴りが、当麻の顔を捉え、吹き飛ばす。
空に投げ出された当麻はアスファルトの地面に転がり伏せ、しかし、痛みのにた打ち回る暇等与えないつもりか、神裂が星の見えない夜空を背に跳んで来る。

目視ではおよそ3メートルに達しているその跳躍に上条は一瞬驚愕するも、

「!」

咄嗟に身体を転がし、その高所からの一撃を避ける。

「私だって頑張った！　頑張ったんですよ！」

神裂は上条を追って、その手にした『七天七刀』の鞘を突き立てる。

鈍い打撃音が響き、砕けたアスファルトが僅かに飛び散る。

「春を過ぎ、夏を過ぎ、秋を過ぎ、冬を過ぎ！」

神裂が鞘を手に暴走する。

それを鞭として、槍として、上条の身体に何度も、何度も打ち据える。

まるで、身の置き所を失くした、鞘の無い刀の様に。

その今の鞘が気に入らないと言わんばかりに、鞘の錨いかりを穂先に見立て、上条の臓ハラワタへと突き立てる。

上条に悲鳴すら許さぬ様に。

「思い出を作っアルバムて忘れないようにたった一つの約束をして、日記や写真を胸に抱かせて！」

そして、今まで力の籠った一撃が上条の顔面に目掛けて振り下ろされ――、

「ッー！」

――頬を掠った。

「……………！？」

「……、それでも、ダメだったんですよ」

上条への鞘の雨は止み、しかし、神裂の独白は今なお当麻に降り掛かる。

「一から思い出を作り直して、何度それを繰り返しても、家族も、親友も、恋人も、全てが、ゼロに還る」

怒号は何時しか『哀』を帯び、身体の支えに突き立てる『七天七刀』を握る手がガチガチと震える。

今にも崩れて来そうなその震えは、『七天七刀』を伝い、金属の鳴動として、上条の耳にも聞こえて来た。

「……、私達はもう耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて……、不可能です！」

……………

上条は、何となく理解出来た。

この目の前で血の涙を流しかねない顔をした彼女も、あのいけ好かない炎の魔術師も、きっと自分達の力で、インデックスの運命を覆す方法——『記憶を消さなくて済む方法』をずっと模索していたのだろう。

元より『魔術』なんて超常的な異能を扱う事を専門とした『魔術師』なんて連中だ。常識や定説を打ち砕くつもりで、きっと死に物狂いで足掻いていたのだろう。

それこそ、当麻の想像を絶する、血反吐を吐く様な努力もしたかもしれない、血豆を潰す様な無理もやって来たかもしれない、血の涙を流す様な思いだって……今日の前でもしている……………。

しかし結局、理想は叶わなかった——

だからこそ――、

「…………ふ、ざけんなよ……」

上条当麻は許せなかった。

「んなモン、テメエらの勝手な理屈だろうが！」

上条の右手が『七天七刀』を掴む。

軋む身体に鞭打ちながら、上条はそれを上っていく。

「インデックスの事なんざ、一瞬も考えてねえじゃねえか！」

人から見ればあまりにも無様で、あまりにも滑稽で、あまりにも悲惨な恰好。

それでも上条は立ち上がろうと懸命に足掻く。

「テメエの臆病のツケをインデックスに押し付けてんじゃねえぞ！」

この一年間、痛みを胸に抱えて一人過ごして来たインデックスの
為――

今、目の前の魔術師を肯定する訳にはいかないのだから。

「！……………ッ！」

眉間に皺を寄せる神裂は『七天七刀』に力を入れる。

だが、その鞘に縋る様にしがみつく上条によって、振り上げる事は叶わなかった。

「1年の記憶を失うのが怖かったら、次の1年にもっと幸せな記憶を与えてやれば！ 記憶を失うのが怖くない位の幸せが待ってるって分かっていれば、もう誰も逃げ出す必要なんざねえんだから！ たったそれだけの事だろうが！！」

神裂は思い出す。

青々と広がる草原、その向こうに見える小さな湖畔と大きな山脈

そして、インデックス――

花の舞う春風に攫われた、もう戻らない、なのに色褪せない、色褪せてくれない、彼女の笑顔――

何時かの記憶が、神裂の脳裏にバチリと過ぎる。

「デメエは力があるから、仕方なく人を守ってんのかよ！？ 違うだろ、そうじゃねえだろ！ 守りたいモノがあるから、力を手に入れたんだろ！ その背中に守りたいモノがあったから力をつけたんじゃないねえのかよ！？」

上条は知っている。

地獄の業火の中、毅然と立つ『騎士』を知っている。

非力な自分をその背に庇い、盾となり、剣となる『騎士』を知っている。

絶望の暗闇に晒されても、その背中が子羊の希望の光となる頼もしい『騎士』を知っている。

それこそが『守る者』の強さだと、上条は知っている。

「なのに何だよコレ！ テメエはこんな所で何やってんだよ！」

なのに、目の前の『守る者』があまりにも弱くて、『少女』の希望所か絶望になって、それが『騎士』を侮辱されている様で、上条は許せなかった。

「テメエは何の為に力を付けた？ テメエはその手で誰を守りたかった！？ テメエはコイツの矛先を一体ドツチに向けてんだ！！」

『七天七刀』の鞘を叩く上条の手に、もう余力は無い。

なのにその衝撃は、『聖人』である神裂の腕に強く、強く響いた、気がした。

「これだけ万能の……力を、持ってるのに……………」

目の前が霞んで来た。

支える腕がずり落ちて行く。

ただでさえ満身創痍だった上条は、最早体力の限界だった。

本来なら、喋る事すらままならない状態だろうが、それでも上条は意識を手繰り寄せる。

まだ、戦いは終わっていない。

「何でそんなに、無能なん、だ……………」

そんな思いも空しく――、

上条は意識を手放した――

守護（後書き）

上手く推敲出来ているかは謎な文です……。
もう少し添削出来たかもしれませんが……。；
精進します。

働哭く決意（前書き）

お待たせしました！ ホントに！

慟哭と決意

1

人はそれを、偶然と言うのか――

それとも、必然と言うのか――

夜に吼える少年達の姿は、まるで湖面の鏡像――

二人の『心』は、一つだった――

「ふざけるなッ!!」

「!?!」

澄んだボーイソプラノは怒号と化し、夜の街に反響する。

その声の主、セイバーは眼前の魔術師を見据え、言い放つ。

「インデックス殿が憶えてもらえない? 貴方達でないと救えない

? ふざけるのも大概にしろ魔術師^{メイガス}!!」

甲冑が擦れ合う。

「彼女は泣いていたぞ! ずっと孤独の中を戦って、逃げ延びて、涙も堪えて、常人なら摩耗してもおかしくない中を今までずっと壊れず生きて来たんだぞ!! そんな時、彼女の傍に居なくて何が親友だ!!」

大地を踏み締める。

「僕達との記憶が消える？　ならその後は！？　彼女を……インデックス殿を放り込むのか！？　四面楚歌の『幻想』の只中に！！　これが貴方達の言う『インデックス殿を救う』という事なのか！！」

剣を振るい、火の粉を払い、

「彼女が憶えてるとか憶えてないとか、そんなの関係無い！！　インデックス殿を助けたいのなら――」

――やる事が違うだろう！！

叫ぶ。

裂帛の気合と共に放たれた言霊は、街を照らす炎を一瞬にして吹き飛ばす。

セイバーを囲んでいた業火は種火程度にまで小さくなり、『人払い』された伽藍堂の街は、再び暗い闇の静寂に帰る。

まるで、眼前に立つステイルの心象を表す様だ。

「……………」

それは例えるならば、
嵐の前の――、

「……………フン、――」

――知った口を利くな、餓鬼が！！

「！」

轟！！

鬼気迫るステイルの声を皮切りに、セイバーの辺りの地面が、途端に燃え盛る。

酸素を貪り、風を燃やし、天を衝く竜巻となって、炎は騎士を蹂躪する。

炎を支配する男の激昂を表す様に。

「……………君の言葉は正しい……………けどさ『英雄』、君こそ苦しみ出した彼女を目の当たりにして、同じ台詞が言えるのか！？」

口調は緩やかに、しかし力強く、ステイルは炎剣を諸手に構える。

「記憶に脳を圧迫された彼女は、その痛みに加え、今までの記憶を忘れなければならぬ苦しみをも味わう事になる！ その時の苦痛が一体どれ程のものか！ たかだか数日過ごしただけで、君こそ彼女の何を理解したつもりだ！！！」

轟ッ！！！！

とステイルは炎剣を振り下ろし、炎の渦中のセイバーに向けて爆発させる。

摂氏3000度にもなる炎剣を使った魔術『吸血殺しの紅十字』

ただでさえ炎に晒されている中、更にそれが炸裂しては、常人では決して生還は出来ない――。

「神裂の件だってそうだ！ 彼女は元からインデックスを傷付ける気なんて毛頭無かったのに！！ インデックスの傷は元を正せば君の主に原因がある！！！」

炎剣の猛攻は止まらない。

再び炎剣を作り出したステイルは、それらを矢継ぎ早に投げ付けていく。

「カメラの扱えない二人の代わりに僕がシャッターを切って、撮った写真は何時でも胸に抱いて！！ 僕は今でも撮った土地だって憶えているのに、彼女にそれを見せたって、返答は謝罪だけ！！ 分かるか、セイバー！？ この胸の空しさが！ 悔しさが！！ もどかしさが！！！」

神父服が弾ける。
カソック

それに伴い、懐にあるルーンカードの大半が勢い良く飛び散り、ステイルの意に沿う様に宙を舞い踊る。

「だけど……いや、だからこそ僕は決めたんだ!!」

『記憶』も!

『記録』も！
 例え彼女が全てを忘れたとしても！
 僕は何一つ

忘れずに！
彼女の為に！
生きて死ぬ！！」

ルーンは炎を纏い、連なり、セイバーに向かって大蛇の如く襲い掛かる。

セイバーの居た周辺は最早、炎の海と化し、轟々と燃え上がる。強過ぎる火力による光のせいかな、今では炎の中に居る筈のセイバーの影も確認出来ない。

「例え彼女の『敵』になるとしても……!」

[illegible]

これまでに最も巨大な唸りだったかもしれない。

主の激情に呼応する『魔女狩りの王』はトドメと言わんばかりに炎の海に覆い被さる。

激情の火種は燎原と化し、炎の巨人が跋扈する

神も罪人も蹂躪する、その紅蓮の名は『ラグナロク神々の黄昏』

『世界』すらも焼き尽くせると錯覚するその業火は――

――所詮は『錯覚』……………。

「……御覧よ、これだけやっても『世界』なんか燃やせない。……彼女が命を脅かされる『現実』なんて燃やせない」

溜め込んだ激情を吐き尽くした、空虚なため息の様な声だった。遠くを見つめるステイルの双眸に、果たして燃え盛る炎や街並みは映っていたのだろうか……。

それとも、彼が見つめていたのは――、

「……ならばその『現実』の中で、彼女を守る最善手を取り続けるしかあるまいよ」

もっと、もっと遠く――、

手の届かない、遥か遠くの――、

「どんなに手を伸ばしたって――、

――『星』を掴むなんて、出来ないんだからさ――

斬ッ！！！！

「！」

刹那、空を散斬^{ザンギ}る音が、海を割った――

「フッ！」

「ドッ！」　ぐあっ！！」

その断層より出でて、ステイルを襲ったのは、風の弾丸となったセイバーの柄頭による突きだった。

『魔女狩りの炎』の爆炎を裂き、そこから急加速でステイルに肉薄しての攻撃だった。

突き出された柄頭はステイルの鳩尾付近に吸い込まれ、彼の身体は直角に折れ曲がる。

「……ゴホッ………ハハ……ホラ、ね……」

肺の空気全くと僅かな唾液と共に、ステイルの口から冷笑が零れる。

「……『英雄』相手に戦っても……これが……『現実』、さ………」

言い切るや否や、ステイルの身体はガクリと項垂れる。

同時に、斬り裂いた背後の『神々の黄昏』^{ラグナロク}は完全に消火され、今度こそ、伽藍堂の街は業火の輝きから解放された。

そんな音の消えた夜の街中では、彼――セイバーの眩きはひどく響き渡る。

「……………ならばその『現実』、僕達が斬り裂いてみせる……………必ずや……………」

ステイルの無念も、インデックスの運命も、全ての真実を聞き届けて尚、それは曇りの無い、澄んだ声だった。

「よ……………っと」

気絶したステイルを歩道の隅に降ろし、セイバーは空を見上げる。ステイルが倒れた今、この辺り一帯を覆う『人払い』も直に解けるだろう。

この伽藍堂の街が息を吹き返すのも、最早時間の問題だ。

セイバーは横たえるステイルに背を向け、闇に覆われた道先を見据えながら車道に出るが――、

「……………さて、かなり足止めされてしまった。マスターの元へ急いだ」

――途端、

セイバーは硬直する。

「ッ!？」（この感じ……! マスターの身に何か!？」）

突然の異変。

それは、脳髓に刺さる危険信号。

その意味を瞬時に悟ったセイバーは、折った膝に力を込め――

――急ぎ、闇の道先へと駆け出した。

interlude

――戦いは終わり、乖離された『日常』は舞い戻る。

「待って下さいお姉様、そんなに急がなくても」

「黒子アンタねえ、門限門限言ってた割にあちこち連れ回して、遅れても知らないわよ?」

「ああ、お姉様」

『学園都市』のデパートから顔を出す二人組の女子中学生。

御坂 美琴と白井 黒子。

門限の厳しい『常盤台中学』の学生寮に住む彼女達が買い物を済ませ、帰路に着く頃――

「って、何アレ?」

「？　どうしたんですの、お姉さま……ッ！？」

戦いの残滓は確かにあった。

先行く美琴とそれを追う黒子が目の当たりにしたのは、人だかりの出来た歩道橋に、聖剣の如く突き刺さった、見るも無残な巨大プロペラの破片だった。

この付近にある、『学園都市』の誰もが見慣れた風力発電機のプロペラだ。

「……あの鋭利な切り口、気体制御系能力者の悪戯でしょうか……」

「悪戯、ね……」

現場を冷静に観察する黒子の言葉に生返事を返す美琴。

「悪戯にしては程度が過ぎるのでは？」と思わなくも無かったが、この『学園都市』は様々な能力者が溢れ返る街だ。当然それと同じ位、色んな性格の人が溢れている。

彼女達が過去に解決した『連続発火強盗事件』^{グラフィトン}しかり、『常盤台眉毛書き事件』しかり、『虚空爆破事件』しかり、である。

このプロペラ破壊も、ひよっとしたら本当に犯人が『悪戯』程度の気持ちでやったという可能性も否定出来ないし、逆に大きな事件の前兆では？　という可能性も捨て切れない。

それがこの『学園都市』――、

そして、その治安を守るのが――、

「『風紀委員』^{ジャッジメント}のお仕事ですわね！」

「ちょっと、黒子！？ この荷物どうすんのよー！」

美琴に自分の荷物を（半ば強引に）預け、『盾の腕章』を装備し、仕事モードに入った黒子は人だかりを押し退け、初動捜査を開始する。

「全く……」

そんな黒子に半ば呆れつつ、美琴は彼女を見送る。

ふと、美琴は空を見上げる。

視線の先にあるのは、無機質に立ち、そして機械的に回り続ける風力発電機。

しかし、均整の取れていたそれはプロペラの一部が欠損し、一転して不恰好な物へと化していた。

恐らく、今日の前でブツ刺さった破片がその欠損部分なのだろうと、ぼんやり思って見つめていると――、

「――うん？」

見上げた先に、『何か』が居た。

自分達を俯瞰する『白い何か』が、不恰好な風力発電機の上に、ポツン、と――

比喻では無い、本当に白い。頭頂部から爪先まで白い。

それは、街の人工の光を反射して、清く、美しく、そして神々しく、白金色ブラチナに輝いていた。

夜の暗がりの見慣れぬ『何か』を、美琴はもっとよく見てみよう
と目を凝らす。

すると、その『何か』は、『誰か』を横に抱いているのが見えて

「って、アレ！」

その『誰か』は自分の知っている顔の青年なのでは！？　と思つた瞬間、『何か』は回るプロペラの影に隠れ、それが過ぎ去った時、そこには――、

――『誰も／何も』居なかった。

「……………?」

「? どうしましたの、お姉様？」

「……何でも」

アレは、幻だったのだろうか――
煮え切らない美琴を他所に、夜は更け、闇は深まる――

今日も日常が終わり行く――
それが無事の民達の軌跡である――

しかして、非日常は未だ眠らず
物語は幕間を過ぎて、動き行く――

i n t e r l u d e o u t

『学園都市』のとある夜道

そこで彼女は唄っていた。

「フ、フフン♪ フ、フフン♪ フ・フ・フ〜ン♪」

テクテクと歩く白い修道服、洗面器サイズの風呂桶をお腹に抱え、

「フ、フフン♪ フ、フフン♪ フ・フ・フ〜ン♪ “ゴキユ
ゴキユ” ップハ〜〜〜♪」

コーヒー牛乳の瓶を口に傾ける。

インデックスは御満悦だった。

「ふあ〜っ、お風呂上りにはコレなんだよ〜〜〜♪」

初めてのコーヒー牛乳にもうすっかり馴染んだ様子。

順応能力と柔軟性の高さが窺える一コマである。

そんな彼女の風呂桶の中には、タオル・シャンプー・アヒルの玩具。そしてもう三瓶のコーヒー牛乳……。

「……結局とうまったらお風呂に来なかったけど、……噛み過ぎちゃったかな……?」

流石に多少罪悪感を感じてきたのか、風呂桶のコーヒー牛乳を見

つめながら、インデックスは上条を思う。

コーヒ―牛乳は他の皆の為に購入したものだ。

一本は小萌先生、もう一本はセイバー、そして最後の一本は――

「……………（ま、まあ全体的に悪いのは私を怒らせたとうまなんだけど、私はそれをいつまでも引き摺る程心の狭い淑女^{レディ}じゃないし…、帰って来て、とうまが少しでも悪びれたら、海のように広々な心で許してあげなくもない……………かも!）」

気にはしていた、上条との仲直りの印の為の物だった。

そんな上条と仲直りする光景を思い浮かべる彼女の足は何時の間にか小萌先生のアパートに着いていた。

「あ、もう着いた。あ、明かりが点いてる……………こもえかな?」

小萌先生の部屋に明かりが点いているのが目に入り、インデックスは階段を駆け上がる。

部屋の前まで行き着いたインデックスは、ドアノブに手を掛けようとして、ハタと手が止まる。

「……………あ! 私、鍵持っていないや。え、と……………確か……………」

と、気付いた彼女はドアノブに運んだ手を小萌先生に教えて貰ったインターホンに移し、恐る恐るポチリと――、

ピンポーン

「ひうっ! な、鳴った!」

――押した音に思わずたじろぐ。

ずっと魔術の世界で生きて来たインデックスにとって、科学の世界で発達した文明の利器は、インターホン一つを取っても未体験な物なのである。

やがて、小萌先生の部屋から声が掛かる。

「……………はい」

セイバーの声だった。

そのボーイソプラノの声質は彼のものだったが、インデックスには心なしか、いつもより低めに感じた。

「セイバー？ 私だよ？ インデックスだよ？」

「！ はい、今開けます」

ドアの向こうからチェーンが外される金属音がする。それから程なくして、ドアがゆっくりと遠慮がちに開いた。

「お帰りなさいませ、インデックス殿。貴婦人殿は？」

「こもえの事？ 私は出掛けてから見てないけど――！」

そこまで言って、インデックスは察しがついた。

セイバーの存在は小萌先生には知られていない。見つかったらあの鎧姿なのだ。自分以上に言い訳が辛い物があるだろう。

そんなセイバーの意を汲んだインデックスは、安全確認の後、OKサインを出してそそくさと部屋に入る。

「ただいま、セイバー！ はいおみやげ！」

風呂桶のコーヒー牛乳を取り出し、静かにドアの鍵を閉めるセイバーにずい、と差し出す。

「おお、有難うございます。ですが、今は急を要します！ 急ぎ此方に！！！」

「？ どうしたの？ 一体何が……？」

コーヒー牛乳をやりわりと受け取ると、セイバーはインデックスを居間の方に促す。

そのあまりの慌て振りに、連れて来られたインデックスは――

「セイバー、あまりバタバタすると近所迷惑わk――」

――迷惑になるってこもえが言ってたよ、と喉まで出掛かった台詞を飲み込んだ。

その、自分が3日間お世話になった居間の布団に、今度は上条が痛々しい姿で臥せていたのだから――

「とうま！！！」

風呂桶が投げ捨てられ、それをセイバーが「おっとと！」と危なげなく受け止める。

そんな風呂桶の安否など気にも留められず、インデックスは飛び付く様に上条に駆け寄る。

「どうま！　どうまどうま！！」

今にも泣きそうになるインデックス。

親に縋る雛鳥の様に、何度も上条の名前を呼ぶが、上条は目を瞑ったまま、返事を返さない。

「……インデックス殿、今は彼の治療が先決です！　手を貸して下さい！」

「！　う、うん！」

セイバーの言葉でようやく我に返り、インデックスは強く頷く。見れば上条の身体には、既にいくつもの包帯・絆創膏が施されていた。

治療途中だったからか、特に傷の多い右腕は包帯を途中までしか巻かれておらず、近くの救急箱も開きっぱなしだ。

その姿は痛々しくも、どうやらセイバーが的確に治療をしてくれていた様だ。

「インデックス殿、『右腕』に包帯を巻いて貰えますか？　僕では巻き切れないんです！」

「『右腕』？　……あ！」

一瞬、何故と思ったインデックスだが、その答えはすぐに分かった。

『サーヴァント』であるセイバーは、明らかな『異能の塊』……。そんな彼が上条の持つ『幻想殺し』イマジンプレイカーの『右手』に触れたら一体どうなるか……。

『歩く教会』を破壊されたインデックスにとって、その結果は想像に難くなかった。

「う、うん！ 分かったんだよ！」

インデックスは巻き掛けの包帯に手を伸ばし、傷だらけの上条の右腕にせっせと巻き始めた――

「これで一応は大丈夫です」

パタン、と救急箱を閉め、セイバーは上条を心配そうに見遣る。

「あとは、マスター御自身の回復力に委ねるしか……」

「とうま……………」

インデックスもまた、セイバーと同じ気持ちだった。

布団に沈む上条の半身は包帯の『白』に染まり、しかしてその『白』から『紅』が滲む様子が傷の凄惨さを雄弁に物語る。

そんな傍から見たら半死人の様な……いや、実際に半死人な彼は、驚く程安らかに眠っていて、彼のか細い寝息が不安を煽る囁きとなつて、インデックスの胸を締め付ける。

「インデックス殿、実は……、「分かってる」！」

事情を説明しようとセイバーは口を開くが、即座にインデックスがそれを遮る。

「……魔術師と戦ったんだね、とうまも……、セイバーも……」

全て分かってる、そう諭す様な声は小刻みに震え、今にも泣き出してしまいそうだ。

しかし、彼女は泣かない。

唇を噛み、眉を顰め、揺れる瞳を抑えながら、インデックスは泣かない。

「……………、僕達は別々の場所で別々の魔術師と戦いました。僕がマスターの元に駆け付けた時には、もう既に彼はこの状態でした……」

「そう、なんだ……」

「はい……………、申し訳ありません、僕の力が及ばなかったばかりに……」

「ううん、私だって……」

謝り合う二人の声は暗い。

二人の胸に去来するのは、無力感と罪悪感

セイバーは、己がマスターを守れず、騎士の責務を全う出来なかった無力感。

インデックスは、大切な人を守る為、何も出来なかった、いや、しなかった罪悪感。

言葉の意味に差異はあれど、二人の胸にあるのは、何れも独力では拭い切れぬ、自責の念。

……が――、

「……………痛ッ！」

「!!」

――神は、運命は、待つてはくれない……。

「インデックス殿!!」

セイバーの脳裏にステイルの言葉が過ぎる。

『今頃、変調を来たしてるだろうね、あの子……大事無いと良いんだけど……』

やはり大事有ったのだ。

インデックスが頭を押さえ、頭痛という如何にも記憶圧迫状態に現れそうな症状を患っていた。

それを見たセイバーは即座にフラつくインデックスの身体を支える。

「だ、大丈夫だよ、セイバー……。ちょっと逆上せちゃった……のか、な？」

おずおずと頭を押さえていた手を降ろすインデックスの顔色は優れない。

3日前で既に変調を来たしている。となれば、制限時間^{リミット}を迎えれ

ば、一体どれ程の……。

『記憶に脳を圧迫された彼女は、その痛みに加え、今までの記憶を忘れないければならない苦しみをも味わう事になる！ その時の苦痛が一体どれ程のものか！ たかだか数日過ごただけで、君こそ彼女の何を理解したつもりだ！……！』

不意に思い出した魔術師の慟哭。

そうだ。これから彼女は制限時間を迎えば、今の頭痛ともまた違う、更なる苦痛が待っている。

いや、それだけでは無い。制限時間を迎えるまでも、きっと彼女はこの頭痛に苛まれる事になるだろう。恐らく、制限時間に近付けば近づく程に……。

「えへへ……、ゴメンねセイバー。とうまがこんな大変な時に……」

彼女は謝る。笑顔で、謝る。

その満面の笑顔は愛らしい筈なのに、それが何故かセイバーの目には、胸がきつくなる程苦しそうに映った。

「（……こんな時でも、いや、こんな時だからこそか……！ 自分の身を省みずに……インデックス殿はマスターの身を案じて……！）」

その痛々しくすら思える献身さ。

この小さな身体の何処にそんな精神力があるのか。

そんな小さな修道女シスターの心の有り様を垣間見たセイバーは、心の底から彼女を敬服した。

だが、同時に悲壮に思えた。

「（これ程の人が『消える』というのか……。こんなにも献身的で、こんなにも愛しい少女が、消えるのか……。！！）」

恐らく、彼女と運命を交えた者全てが抱いたであろう絶望の種。

笑顔の甘味の飴の中にある、最高に不味い苦味の飴。
決まり切った、最悪の結末への片道切符。

「（いや……。）」

……。それが、どうした――。

「（……。まだ決まった訳じゃない！）」

制限時間まで3日――。

3日しかない……。ではなく、3日もある。

その間に如何様にも対策が打てる。

マスターは重傷で動けない。

恐らくインデックスも彼の元を離れないだろう。

正直に言えば、自分もマスターの傍に控えるべきだと思う。

だが――、

「（ステイル卿の言葉が正しければ、少なくとも3日間は彼女の安全が保障される……。何故なら……。）」

『記憶の消去はきっかり1年周期で行う。早過ぎても遅過ぎてもダメだ。』

早過ぎても遅過ぎてもダメ……これは逆に言えば、3日後きっかり午前0時0分0秒までは、魔術師達にも手が付けられないという事。

「(そしてこの中で、自由に行動出来るのは、僕一人だけ………ならば!)」

自分が動いて、解決の手立てを探るしか、方法は無い……!

「(ならば、僕の騎士としての責務……、まだ終わってなどいない!! ……いや、)」

始まってすらいないのだ! 何故なら――、

「(僕はまだ、マスターの口から名前すら聞けていないのだから!)」

それまで、自分が――、

「セイバー、どうしたの? 思い詰めたみたいな顔して? 私なら平気だよ? それとも、まだ気にしてる? とうまがケガしちゃった事?」

「……………大丈夫ですよ、インデックス殿。マスターの負傷は僕の如何ともし難い失態ですが、僕にはまだ、やるべき事がある!」

この笑顔を振り撒く白い少女を、守ってみせる――！！

「……、セイバー。あんまり思い詰めちゃダメだよ？」

「お気遣い感謝します、姫」

「／／／／／とうまに言われる時とは全然違うんだね、流石騎士……」

柔らかに微笑み、騎士の礼を返すセイバーにインデックスは頬を染める。

そんなインデックスの感想を聞き流すセイバーは――、

「（……さて、その為には……）」

小さな姫君の救出の為、思考を巡らしていた。

その思考は――、

ピンポン

「「！」」

『上条ちゃん？ それともシスターちゃん？』

――この部屋の主の帰還と共に、纏まった。

「あ、あわわっ！ せ、セイバー！ こもえが帰ってきた！ 急いで隠れて……「いえ！」……へ！？」

「インデックス殿！ 毛布を貸して下さい！ なるべく僕の全身が覆える位のを！」

「へ？？」

「（マスター、僕が必ず、姫を救う糸口を掴んでみせます……！ 必ず……！）」

従者の決意は固く、その決心は宵を越し、そして、動き始める――

慟哭く決意（後書き）

次回はオリジナル色が強くなりそうです。
ご意見・ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1335o/>

とある騎士の聖杯戦争（ヘブンズフィール）

2011年11月17日17時55分発行